

# 富地原森

福岡県宗像市富地原所在遺跡の発掘調査報告

宗像市文化財調査報告書

第40集

1995

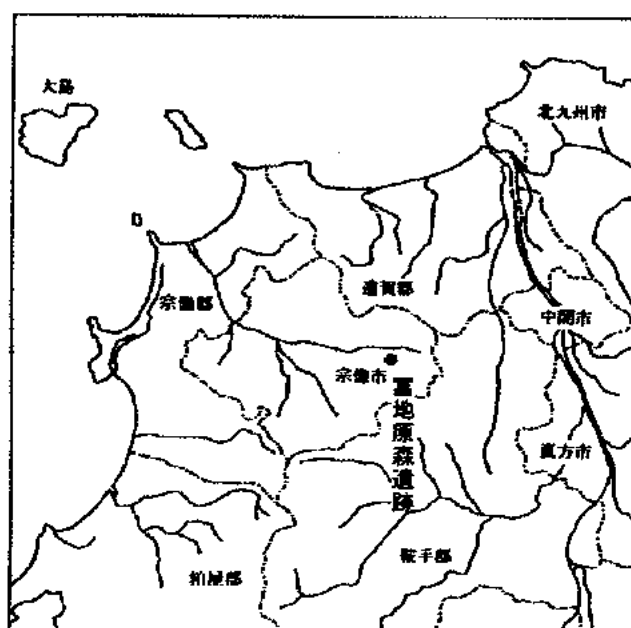
宗像市教育委員会

FU ZI WARA MORI

# 富地原森

福岡県宗像市富地原所在遺跡の発掘調査報告

宗像市文化財調査報告書 第40集



1995

宗像市教育委員会

# 序 文

宗像市は、福岡市と北九州市の中間に位置し、両大都市の通勤圏として宅地化が進んでおります。昭和38年に始まる自由ヶ丘団地の造成、昭和41年には日の里団地の造成、さらに2つの大学の進出が加わり、「学術・文化・高福祉都市」を目指して発展を続け今日に至っております。

このような急速な都市化と併行して、昭和47年には農業振興地域の指定を受けて農用地の計画的利用を進め、県営圃場整備等による農業基盤整備事業が行われております。

大型の農業基盤整備は、事業規模が大きいだけに自然環境や歴史的景観の大幅な改変を伴うものであり、当然、埋蔵文化財は消滅の危機にさらされ、緊急な対策を常に迫られています。このような状況の中で失われ行く埋蔵文化財に対して、不十分ながらも記録保存に努め、多くの成果をあげてまいりました。

本書は平成3年度に発掘調査を実施した富地原森遺跡の発掘調査の記録を収めており、弥生時代から中世にかけて営まれた集落や墓地の発見は古代のむなかたを解明する上で貴重な調査となりました。

最後に、本書が広く文化財保護および学術研究に貢献することを願いたしますとともに、発掘調査全般にわたってご協力をいただいた多くの方々に心からの感謝の意を表する次第であります。

平成7年3月31日

宗像市教育委員会

教育長 森 下 照 清

## 例 言

1. 本書は、平成3年度富地原地区県営圃場整備に伴って実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宗像市教育委員会が事業主体となって実施した。
3. 遺跡名は、字名によって富地原森遺跡と呼称し、福岡県文化財番号330535とする。
4. 遺構は、呼称を全て記号化し、住居跡および掘立柱建物はS B、溝状遺構はS D、柱穴はS P、土坑・土壌墓はS K、石棺墓はS Q、不明遺構はS Xとする。
5. 測量は、国土調査法第Ⅱ座標系を用い、方位は磁北である。
6. 遺構の実測は主に白木英敏が行い、安部裕久の協力を得た。
7. 遺物の実測は白木、富岡一枝が行った。
8. 遺構、遺物の製図は牧野淑子、吉田佳世が、遺物の整理は法泉順子、高木成子、家永蓮子、篠原啓子、大崎美枝子が行った。
9. 遺構、遺物の写真は白木が行った。
10. 本書の執筆、編集は白木が行った。

# 本文目次

第1章	序説	1
1	調査の経過	1
2	位置と環境	2
第2章	調査の記録	7
1	土坑	7
2	土坑墓・木棺墓・石棺墓	28
3	竪穴式住居跡	31
4	掘立柱建物跡	43
5	大溝	46
6	その他の遺構	54
	I) 溝状遺構	54
	II) 柱穴出土遺物	57
	III) 包含層出土遺物	59
第3章	まとめ	60

# 挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第2図	事業計画図 (1/2,000)	5
第3図	富地原森遺跡遺構配置図 (1/300)	6
第4図	SK1・2・9・10・11遺構実測図 (1/40)	7
第5図	SK9・10出土遺物実測図 (1/3)	8
第6図	SK12遺構実測図 (1/40)	10
第7図	SK18遺構実測図 (1/40)	10

第8図	S K 12出土遺物実測図 (1/3)	11
第9図	S K 18出土遺物実測図① (1/3)	12
第10図	S K 18出土遺物実測図② (1/3)	13
第11図	S K 33遺構実測図 (1/40)	14
第12図	S K 33出土遺物実測図① (1/3)	15
第13図	S K 33出土遺物実測図② (1/3)	16
第14図	S K 37・44遺構実測図 (1/40)	17
第15図	S K 37出土遺物実測図 (1/3)	18
第16図	S K 44出土遺物実測図 (1/3)	19
第17図	S K 45遺構実測図 (1/40)	20
第18図	S K 51・52・53・59遺構実測図 (1/40)	21
第19図	S K 52出土遺物実測図 (1/3)	22
第20図	S K 61遺構実測図 (1/40)	23
第21図	S K 61出土遺物実測図 (1/3)	23
第22図	S K 62・70遺構実測図 (1/40)	24
第23図	S K 62出土遺物実測図 (1/3)	25
第24図	S K 70出土遺物実測図① (1/3・1/2)	26
第25図	S K 70出土遺物実測図② (1/3)	27
第26図	S K 71遺構実測図 (1/40)	27
第27図	S K 71出土遺物実測図 (1/3)	27
第28図	S K 28・31・43・55・56遺構実測図 (1/40)	29
第29図	S K 30・56出土遺物実測図 (1/2)	30
第30図	S Q 64遺構実測図 (1/40)	30
第31図	S K 58遺構実測図 (1/40)	31
第32図	S K 58出土遺物実測図 (1/3)	31
第33図	S B 16遺構実測図 (1/60)	32
第34図	S B 16出土遺物実測図① (1/3)	33
第35図	S B 16出土遺物実測図② (1/3)	34

第36図	S B 16出土遺物実測図③ (1/3)	35
第37図	S B 22遺構実測図 (1/60)	36
第38図	S B 22出土遺物実測図① (1/3)	37
第39図	S B 22出土遺物実測図② (1/4)	38
第40図	S B 25遺構実測図 (1/60)	39
第41図	S B 25出土遺物実測図 (1/3)	40
第42図	S B 26出土遺物実測図 (1/3)	40
第43図	S B 26遺構実測図 (1/60)	41
第44図	S B 65遺構実測図 (1/60)	42
第45図	S B 66遺構実測図 (1/60)	43
第46図	S B 67遺構実測図 (1/60)	44
第47図	S B 67出土遺物実測図 (1/3)	44
第48図	S B 68遺構実測図 (1/60)	45
第49図	S B 74遺構実測図 (1/60)	45
第50図	大溝及び掘立柱建物配置図 (1/400)	47
第51図	大溝〈S D 13・15・34・39・41〉断面実測図 (1/40)	48
第52図	S D 13出土遺物実測図① (1/3)	49
第53図	S D 13出土遺物実測図② (1/3)	50
第54図	S D 14・15出土遺物実測図 (1/3)	51
第55図	S D 34出土遺物実測図 (1/3)	52
第56図	S D 39・41・50出土遺物実測図 (1/3)	53
第57図	S D 5・6・7出土遺物実測図 (1/3)	54
第58図	S D 17・36・38出土遺物実測図 (1/3・1/2)	56
第59図	S D 57・72出土遺物実測図 (1/3)	56
第60図	S P 205・221・299・464出土遺物実測図 (1/3)	58
第61図	包含層出土遺物実測図 (1/3)	59
第62図	光岡六助遺跡出土須恵器実測図 (1/3)	60

# 図 版 目 次

- 図版 1 (1) S B 16出土遺物093 (2) S B 16出土遺物094
- 図版 2 (1) S P 221出土遺物201・202 (2) S K 70出土遺物083
- 図版 3 富地原森遺跡周辺の航空写真 (1/12,500) 昭和53年6月撮影
- 図版 4 (1) 調査区全景 (南から) (2) 調査区全景 (西から)
- 図版 5 (1) S K 11 (東から) (2) S K 12 (南から) (3) S K 18 (北から)  
(4) S K 33 (西から) (5) S K 37 (西から) (6) S K 44 (北から)
- 図版 6 (1) S K 44土層 (北から) (2) S K 45 (北から) (3) S K 51 (北から)  
(4) S K 53 (東から) (5) S K 61 (東から)
- 図版 7 (1) S K 62 (西から) (2) S K 70 (北から) (3) S K 28 (北から)  
(4) S K 29 (北から) (5) S K 30 (東から) (6) S K 31 (北から)
- 図版 8 (1) S K 43 (東から) (2) S K 55 (南から) (3) S K 56 (北から)  
(4) S Q 64墓坑検出面 (南から) (5) S Q 64 (北から)  
(6) S K 58 (南東から)
- 図版 9 (1) S K 58副葬遺物出土状況 (南東から) (2) S B 16 (北から)
- 図版10 (1) S B 16北西角遺物出土状況 (北から)  
(2) S B 22・S K 52 (北から)
- 図版11 (1) S B 25 (西から) (2) S B 26 (北から) (3) S B 65 (東から)  
(4) S B 66 (北から) (5) S B 67 (北から) (6) S B 68 (東から)
- 図版12 S K 12・33・37・44出土遺物
- 図版13 S K 52・61・62・70・71・30・56・58・S B 16出土遺物
- 図版14 S B 22・25・67・S P 299・S D 13出土遺物
- 図版15 S D 13・15・17・34・36・57出土遺物



# 第1章 序 説

## 1. 調査の経過

宗像市は、福岡市・北九州市の中間に位置しており、両大都市の通勤圏内にあつて急速なベッドタウン化が進み、宅地造成や道路整備など開発の波が押し寄せている。かつて純農村であつた本市においても農業経営に都市近郊型の複合経営を目指す生産基盤の整備が進められている。今回の調査は、農業基盤整備事業の一つである富地原地区県営圃場整備事業にともなう事前の緊急発掘調査である。事業規模が大型であるために、確認された遺跡の現状保存は困難を極めており、盛土等による可能な限りの保存対策を講じてきたが、消滅が必至の区域については記録保存という形で対処した。本書は平成3年度に実施された富地原地区県営圃場整備事業にともなう3件の発掘調査のうち富地原森遺跡についての報告である。

富地原森遺跡は、福岡県宗像市大字富地原（字森）1113-1番地ほかに所在し、新立山（標高325.7m）から北西に派生する舌状丘陵の緩斜面、標高28～26.5mの範囲に営まれている。調査は、圃場整備事業で切り盛り調整がとれず、削平される当丘陵について試掘調査を実施。遺構の確認された4,500㎡について調査区を設定し、緊急発掘調査を行う運びとなった。その結果、掘立柱建物跡5棟、方形住居跡4棟、土墳墓・木棺墓・石棺墓合計9基、中世大溝、土坑などを検出し、弥生時代中期初頭頃から中世前半期にかけて断続的に営まれた集落跡及び墓地であることが判明した。発掘調査は、平成3年10月28日から着手し同年12月27日で終了した。

なお事業は次の組織で行った。

## 組 織

### (1) 平成3年度発掘調査組織

総 括	宗像市教育委員会	教 育 長	森 下 照 清
		教 育 部 長	中 山 宏 基
		社会教育課長	吉 田 繁 利
		文化係長	尾 山 清
庶 務・会 計		主 事	原 俊 一
発掘調査担当		技 師	安 部 裕 久
		技 師	白 木 英 敏

## (2) 平成6年度報告書作成組織

総 括	宗像市教育委員会	教 育 長	森 下 照 清
		教 育 部 長	芹 野 温 亘
		社会教育課長	花 田 俊 六
		文化係長	原 俊 一
庶 務・会 計		文化係長	原 俊 一
発掘調査担当		主任技師	安 部 裕 久
		技 師	白 木 英 敏

今回の発掘調査に当たっては福岡農林事務所、宗像市農業振興課、富地原土地改良区の方々にご協力いただいた。また、調査を進める上で多くの方々のご指導・助言・応援をいただいた。この場を借りて心からお礼申し上げます。

## 2. 位置と環境

富地原森遺跡の所在する宗像市東南部には、新立山（標高325.7m）・摩山（標高296.9m）から複雑に派生し、富地原・名残・吉留・武丸地区にまたがる舌状丘陵群が、市内中央部を西流する釣川に向かって細長く延びており、それぞれの丘陵間に低地部へと続く谷水田を形成している。富地原地区においては現在のところ、このような谷水田は生活基盤を支える灌漑地として弥生時代前期後半以降開発され、丘陵上及びその裾部に集落を形成して行くことが観取される。

本遺跡は宗像市の東南部、鞍手郡宮田町との境にそびえる新立山から北西に派生する舌状丘陵上の緩斜面、標高28～26.5mの範囲に営まれている。周辺には富地原梅木遺跡、富地原岩野B遺跡、富地原川原田遺跡などがあり、遺跡の性格上関連が深いであろう。以下これらの遺跡について概観して行く。

### 富地原梅木遺跡（註1）

摩山から北へ派生する丘陵上に位置し、標高30～60mの範囲に分布する弥生時代から古墳時代にかけての集落跡及び墳墓地である。弥生前期後葉～中期の袋状竪穴、弥生中期の土壌墓群、弥生前期後葉～古墳時代前期にかけての住居跡、古墳時代の円墳などで構成される。住居跡は円形住居跡、2本柱でベッド状遺構を持つ方形住居跡などがあるが全般的に遺存状況はあまり良くない。

#### 富地原岩野B遺跡（註2）

標高29.5～32mほどの丘陵東緩斜面に営まれた弥生時代を中心とする集落跡である。弥生中期前葉～中頃の円形住居跡、弥生後期前半～後半の方形住居跡、古墳時代の円墳などで構成される。特徴的な遺構・遺物としてS B 18の松菊里型住居跡、S B 17から出土した正格子叩きを持つ朝鮮系軟質土器などがある。

#### 富地原川原田遺跡（註3）

新立山から北西に派生する丘陵の先端裾部、標高26～33mほどの緩斜面上に営まれた弥生中期後半から古墳時代後期にかけての集落跡である。弥生時代中期後半の円形住居跡、4世紀前後から6世紀後半代にかけての方形住居跡が40棟以上検出されており、中でも初期須恵器の壺などを出土したS B 27、庄内・布留式甕が共伴するS B 24、鳥足文叩きの百濟系陶質土器広口壺が出土したS B 14などが注目される。

以上3遺跡の概要を見てきたが、富地原地区ではこれまで希薄であった集落跡の調査例が増えており、現在整理中である富地原森崎遺跡（註4）・富地原古賀遺跡（註5）・富地原深田遺跡（註6）などの諸例を含めて集落立地の変遷、また墳墓地との相関関係が、今後具体化できそうである。

（註1）宗像市教育委員会「名残Ⅳ」宗像市文化財報告書第29集 1991

（註2）宗像市教育委員会「富地原上瀬ヶ浦」宗像市文化財報告書第38集 1994

（註3）宗像市教育委員会「富地原川原田」宗像市文化財報告書第39集 1994

（註4）宗像市教育委員会平成2年度調査

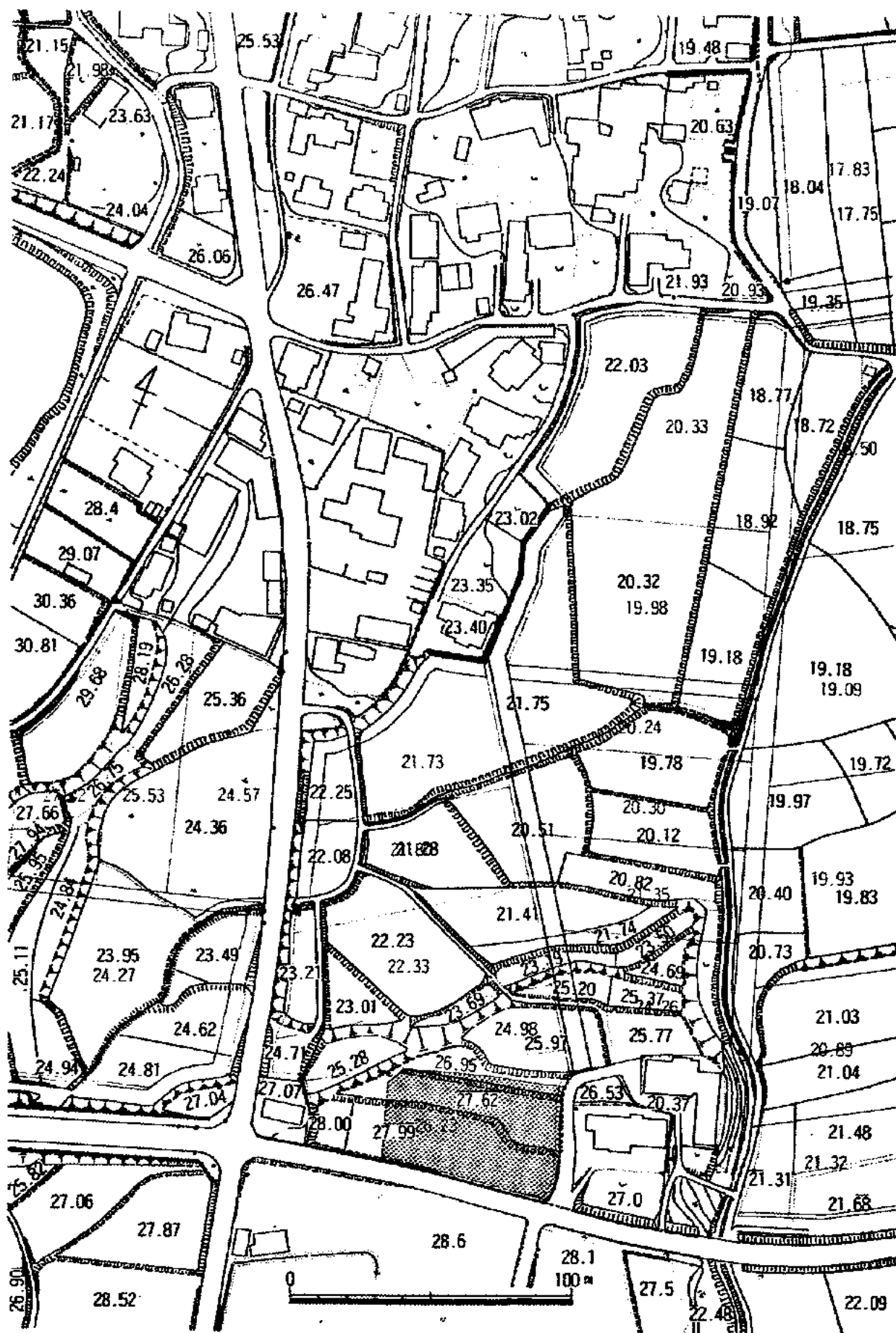
（註5）宗像市教育委員会平成4年度調査

（註6）宗像市教育委員会平成4年度調査

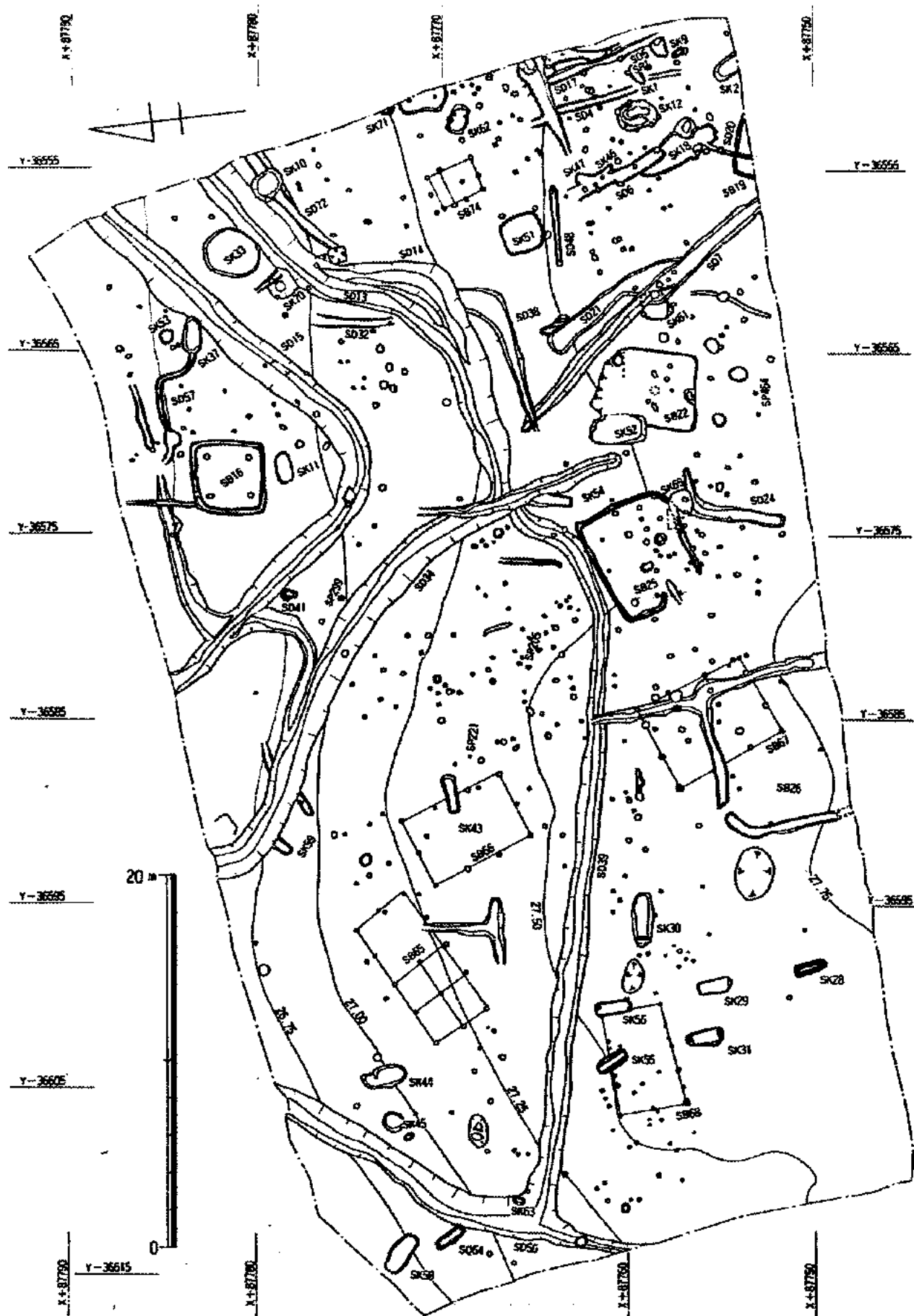


- |              |            |                    |
|--------------|------------|--------------------|
| 1 富地原森遺跡     | 6 武丸小伏遺跡   | 11 富地原古賀遺跡         |
| 2 富地原川原田遺跡   | 7 吉留京田遺跡   | 12 富地原明天寺遺跡        |
| 3 富地原上瀬ヶ浦遺跡  | 8 武丸大上げ遺跡  | 13 富地原森崎遺跡         |
| 4 富地原上瀬ヶ浦B遺跡 | 9 富地原神屋崎遺跡 | 14 富地原岩野B遺跡        |
| 5 武丸高田遺跡     | 10 富地原深田遺跡 | 15 富地原梅木遺跡 (名残遺跡群) |

第1図 周辺遺跡分布地図 (1/25,000)



第2図 事業計画図 (1/2,000)



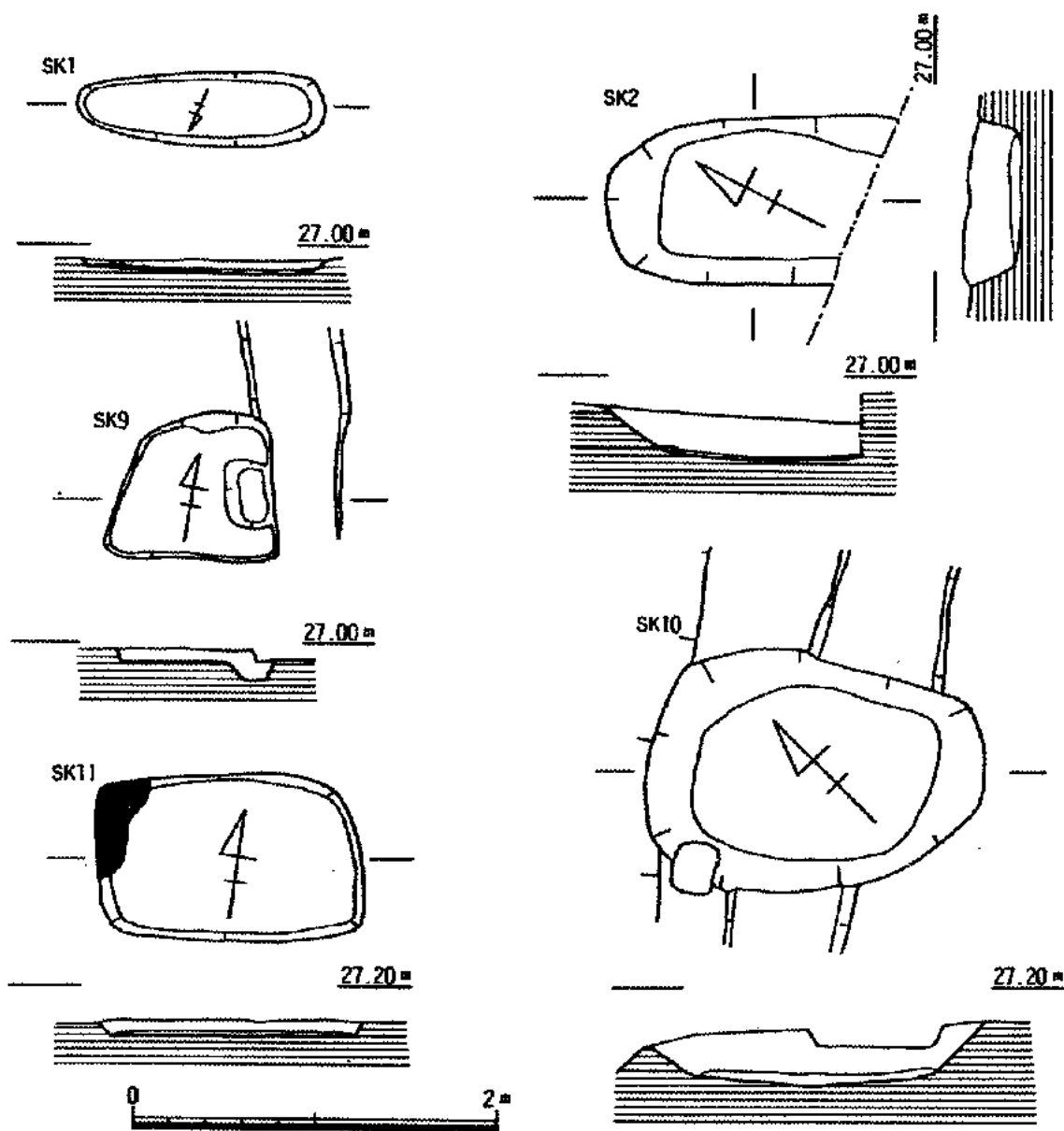
第3図 富地原森遺跡遺構配置図 (1/300)

## 第2章 調査の記録

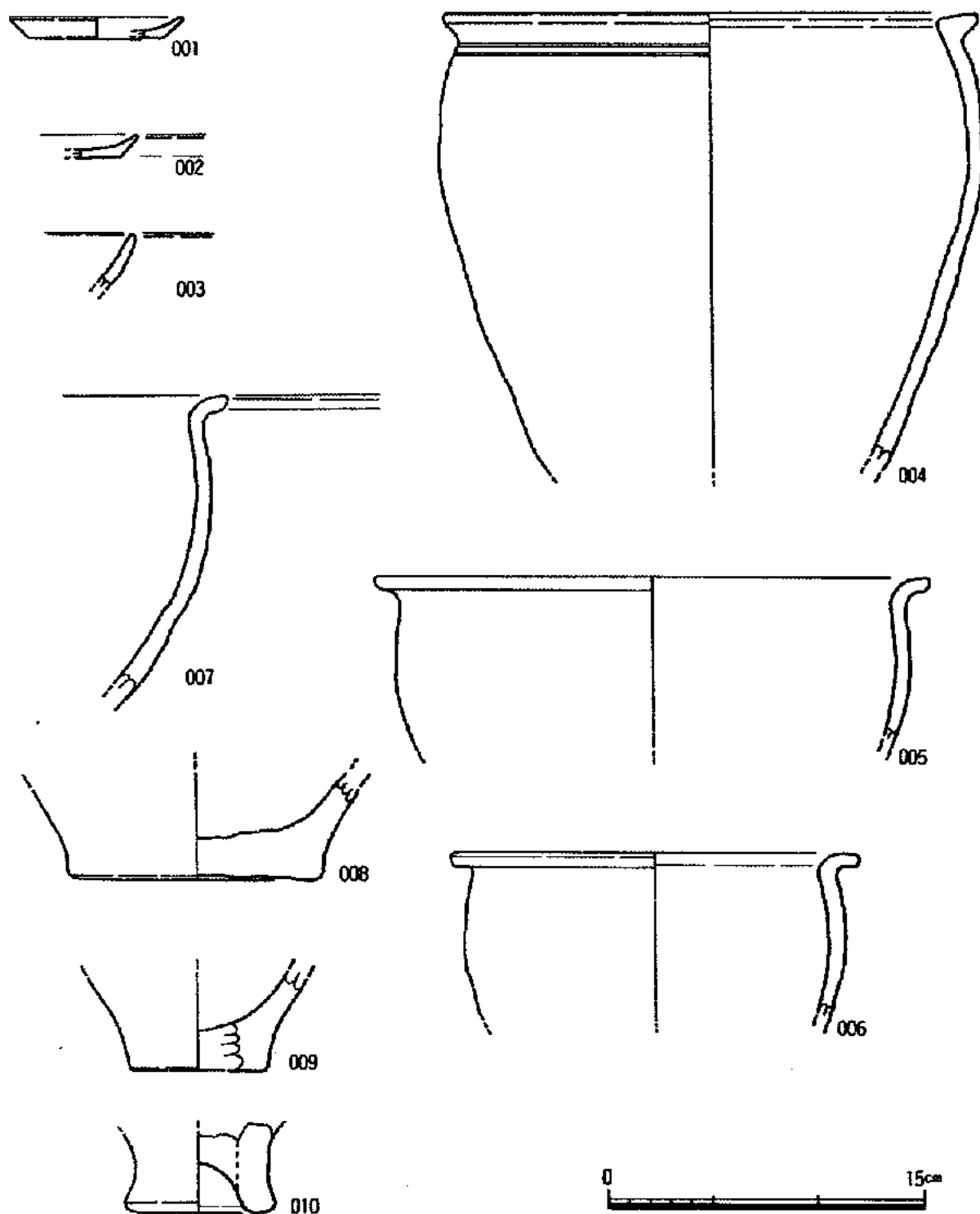
### 1. 土坑

#### SK1 (第4図)

調査区の南東角、SK12の東側で検出した。平面形は長楕円形を呈し、長さ135cm、幅40cm、深さ7cmを測る。出土遺物は僅かに青磁、瓦器などの小片があるのみで図化に耐えない。



第4図 SK1・2・9・10・11遺構実測図 (1/40)



第5図 SK9・10出土遺物実測図 (1/3)



#### SK2 (第4図)

調査区の南東角で検出し、遺構の南側は調査区外へ延びている。性格不明の土坑で、規模は現状で長さ164cm、幅92cm、深さ20cmを測る。出土遺物は僅かに弥生土器、土師器の小片があるのみで図化に耐えない。

#### SK9 (第4図)

調査区の南東角に位置し、SD5を切りSP1に切られる。平面形は隅丸台形で長さは東西83cm、南北82cm、深さ7cmを測る。

#### 出土遺物 (第5図)

土師器 (001・002) いずれも小皿である。001は復元口径8.4cm、復元底径6.4cm、器高1.1cmを測るが風化が進んでおり底部調整は不明。002は小片で器高は1.1cmを測る。

瓦器 (003) 口縁部小片である。焼成不良で風化が進んでいる。

#### SK10 (第4図)

調査区の東端中程に位置し、SD13・72に切られる。平面形は不整楕円形、断面形は逆梯形を呈し、長さ187cm、幅135cm、深さ32cmを測る。

#### 出土遺物 (第5図)

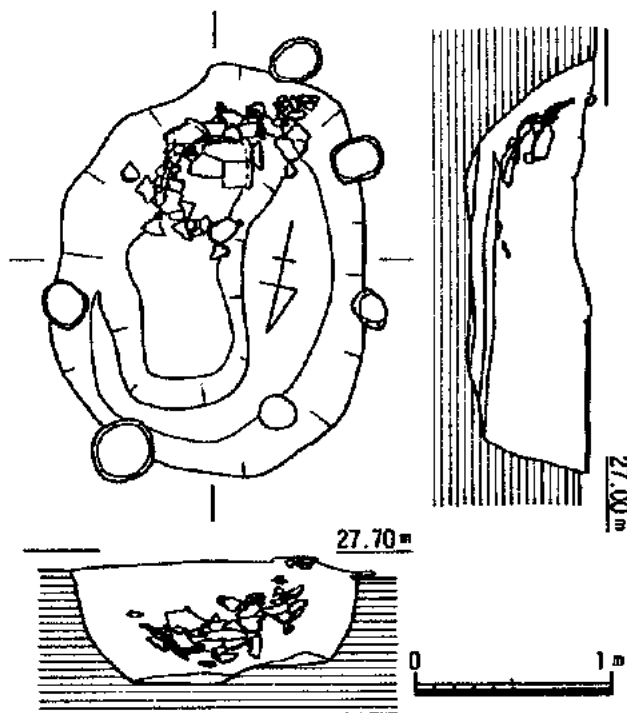
弥生土器 (004~010) 004は甕である。口縁部は断面三角形で、直下に幅の狭い沈線を2条巡らす。調整は風化が進んでおり判然としないが口縁部は横ナデ、胴部外面はハケ目が微かに残る。復元口径26.2cm。005~007は甕の口縁部である。口縁部は丸みをもって強く外反し、端部に面を作って収めるもので、005の復元口径は27.0cm、006は20.0cmを測る。008は大型甕の底部であろう。底径12.5cmを測る。009は肉厚で平底の甕底部片である。復元底径6.6cm。010は上げ底の甕底部である。底径7.5cm。

#### SK11 (図版5、第4図)

SB16の南に位置し、平面形は角丸長方形を呈する焼土坑である。長さ145cm、幅92cm、深さ10cmを測る。壁面の一部には火を受けた痕跡が明瞭に残り、炭を多く含んだ暗茶褐色土層が堆積していた。出土遺物はない。

#### SK12 (図版5、第6図)

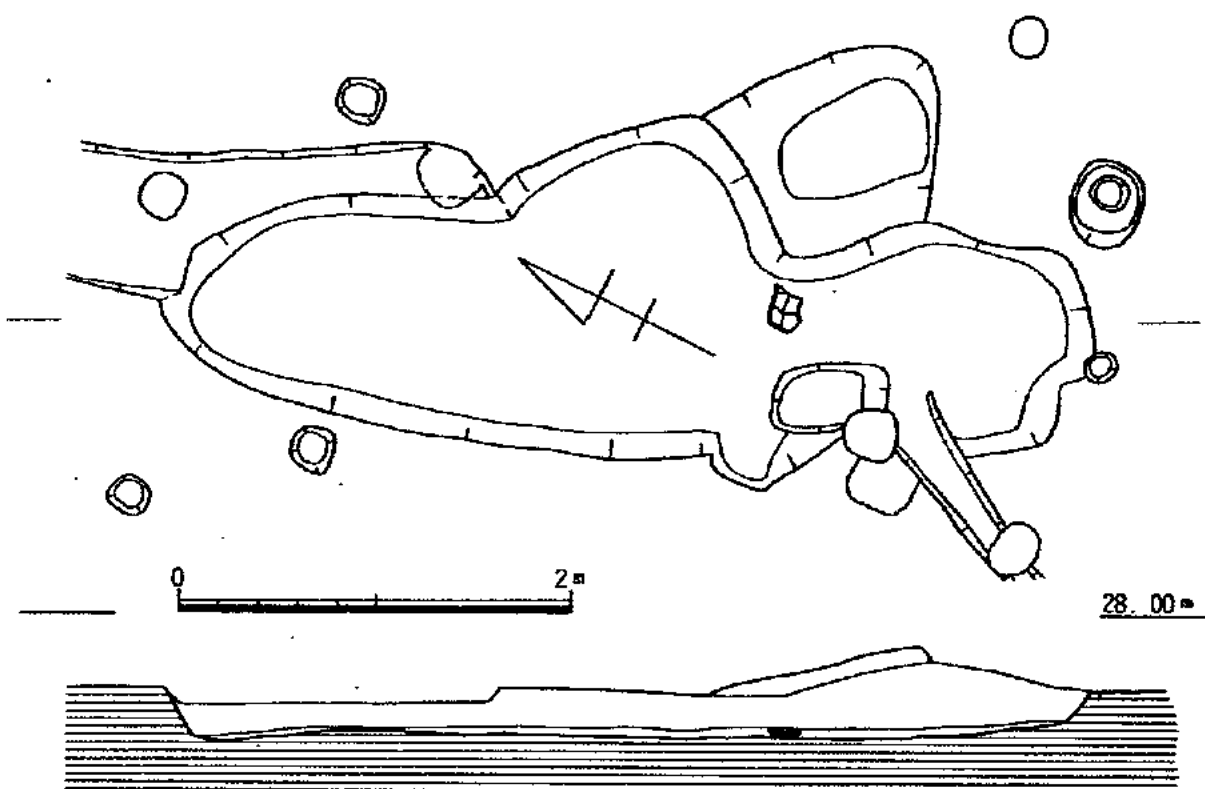
調査区の南東角、SK18の東側で検出した。平面形は不整楕円形、断面形は逆梯形を呈し、長さ215cm、幅150cm、深さ25cmを測る。



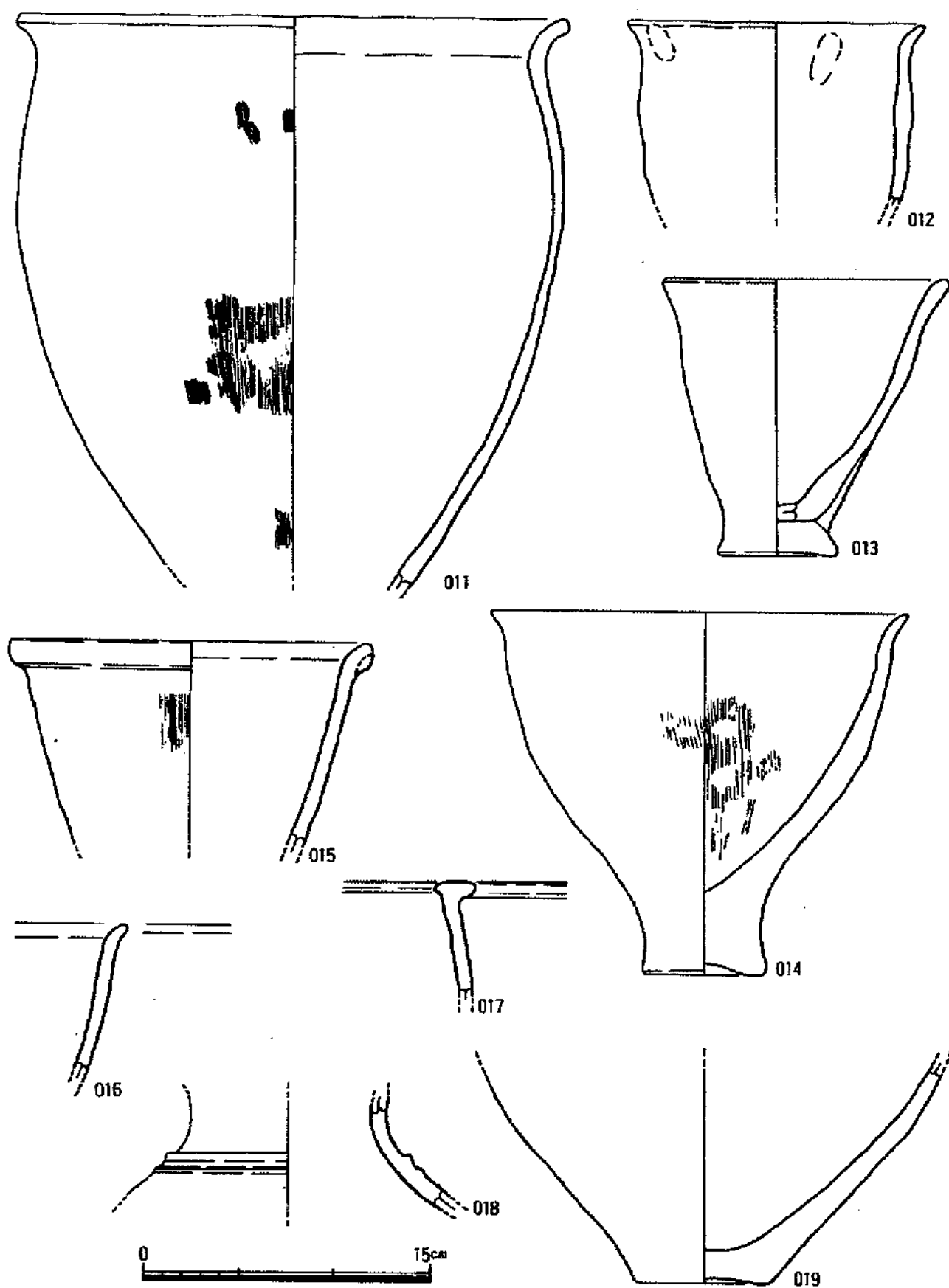
第6図 SK12遺構実測図 (1/40)

#### 出土遺物 (第8図)

弥生土器 (011~019) 011~017は甕である。011は胴部がやや張り、口縁部は如意形を呈する。調整は外面ハケ目、内面はナデで仕上げている。口径29.8cmを測る。012は如意形口縁で指頭痕が内外面に残る。復元口径16.0cmを測る。013は厚底で胴部は歪んでほとんど膨らみを持たずに開き、口縁はあまい如意形となる。復元口径15.4cm、器高14.7cm、底径6.6cmを測る小型品である。014は肉厚な上げ底で、胴部は緩やかに内弯しながら大きく開き、口縁部は如意形となる。内外面にハケ目調整が残る。



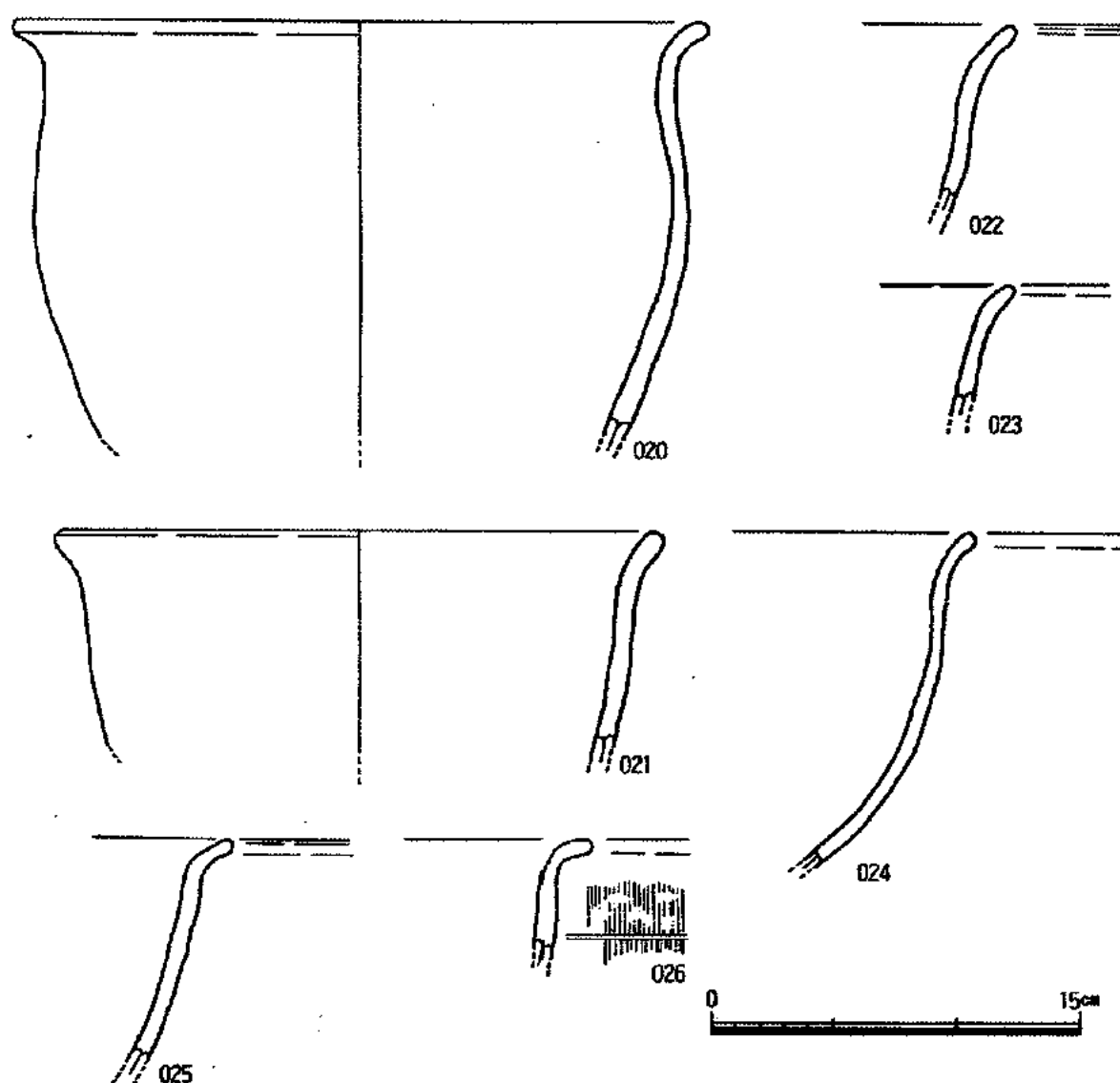
第7図 SK18遺構実測図 (1/40)



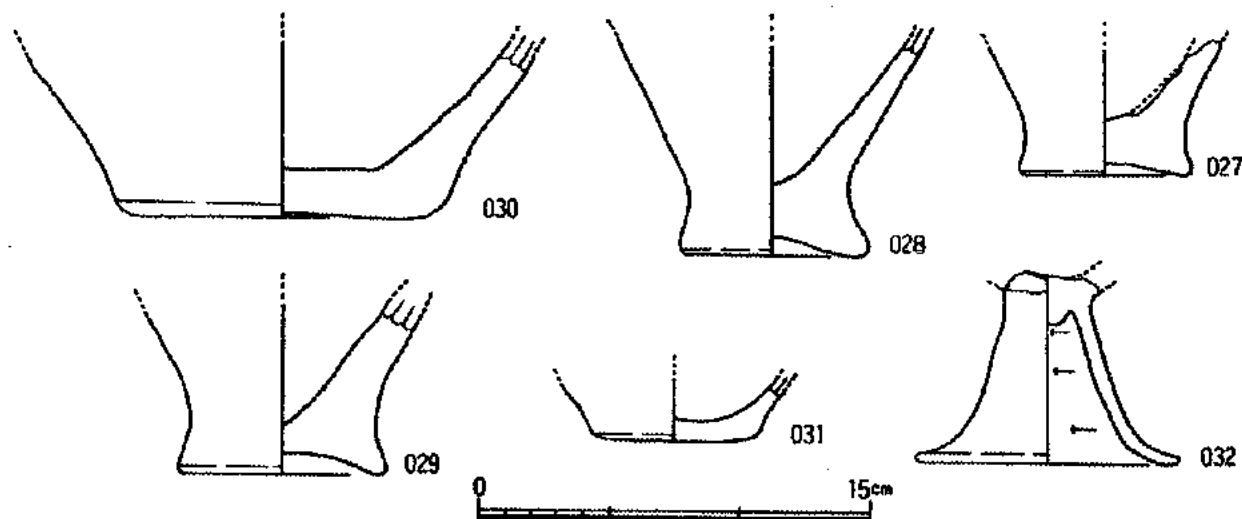
第8図 SK12出土遺物実測図 (1/3)

復元口径は22.3cm、器高19.0cm、底径6.6cmを測る。015は如意形口縁の口唇部直下に粘土を張り付けてタガ状に肥厚させている。風化が進んでいるが、外面に縦方向のハケ目が残る。復元口径19.4cmを測る。017は口縁部断面が三角形に近く、内側にやや張り出しを持つ。風化が著しい。

018・019は壺である。018は頸部付近の小片で、2条の三角突帯を巡らしている。頸部径は10.4cmを測る。019はやや上げ底気味の壺底部で、調整は内面をナデで仕上げているが、外面は風化が進んでおり判然としない。底径は7.0cmである。



第9図 S K18出土遺物実測図① (1/3)



第10図 SK18出土遺物実測図② (1/3)

#### SK18 (図版5、第7図)

調査区の南東角に位置し、SD6・20に切られる性格不明の土坑である。平面形は不整形楕円形、断面形は逆梯形を呈しており、規模は長さ475cm、最大幅は175cm、深さは最も残りの良いところで37cmを測る。検出当初は複数の土坑が切り合っていると考えていたが、切り合い関係は認められず、また掘り下げ後の床面も平坦であったためここでは同一遺構として取り扱う。

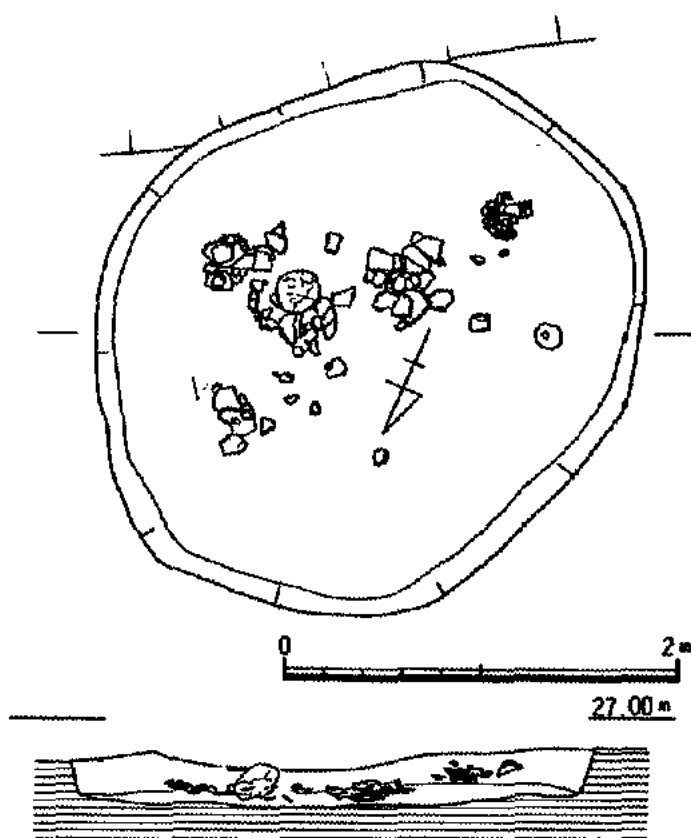
#### 出土遺物 (第9・10図)

**弥生土器 (020～031)** 020～029は甕である。020は胴部がやや張り口縁部は如意形を呈する。調整は風化が進んでいるため観察できない。復元口径は29.0cmを測る。021～026は如意形を呈する口縁部片である。021の復元口径は25.4cmを測る。026は口縁部直下に縦方向のハケ目の後、沈線を1条巡らす。

027～029は甕の底部である。底部の厚みに差があるが、すべて上げ底状を呈する。027の復元底径は6.8cm、028の底径は7.5cm、029の復元底径は8.2cmを測る。調整はいずれも風化が進んでおり判然としない。

030・031はここでは壺の底部として報告する。030の底径は12.6cm、031の復元底径は6.7cmである。

**その他の遺物 (032)** 土師器の高坏である。坏部を欠くが脚部はほぼ完形で、裾部は八字状に開く。脚内面は横方向のヘラ削り、外面は横ナデで仕上げている。脚底径は10.4cmで混入品であろう。



第11図 SK33遺構実測図 (1/40)

### SK33 (図版5、第11図)

調査区の北東に位置し、SD13に壁面の一部を切られている。平面形は不整円形、断面形は逆梯形を呈し、長径300cm、短径260cm、深さは25cmを測る。遺物は床面から僅かに浮いた位置から出土している。

### 出土遺物 (第12・13図)

弥生土器 (033~049) 033~045は甕である。033は底部を欠くが断面逆L字形の口縁部を持つ。外面は縦方向のハケ目、内面はナデで仕上げている。口径26.0cmを測る。034は肉厚で上げ底の底部を持ち、口縁部は断面逆L字形を呈する。

風化が進んでおり調整は判然としない。復元口径15.5cm、器高16.9cm、

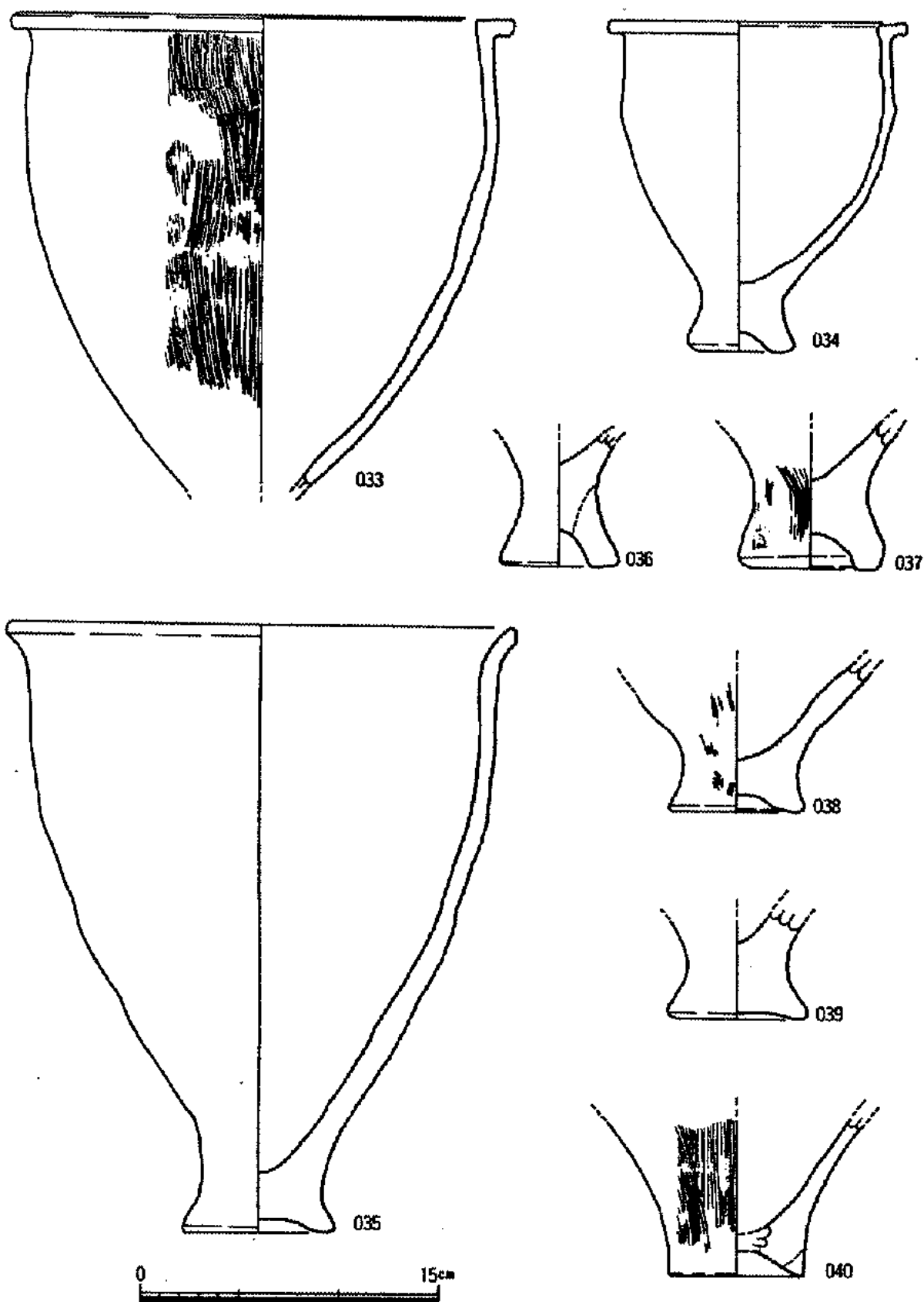
底径5.6cmである。035はやや上げ底の底部を持ち、口縁部は如意形である。復元口径26.3cm、器高30.8cm、底径7.8cmを測る。

036~040は程度の差があるが全て上げ底の甕底部片である。036・037は底部の厚みに差があるが、いずれも半球形状の上げ底を呈する。036の復元底径は62cmで、調整は風化が進んでおり観察できない。037は底径7.6cmを測り、外面に縦方向のハケ目を施す。038は底径7.8cmを測る。039は肉厚な底部で径は7.3cm。040は外面に縦方向のハケ目を施す。底径7.0cmを測る。

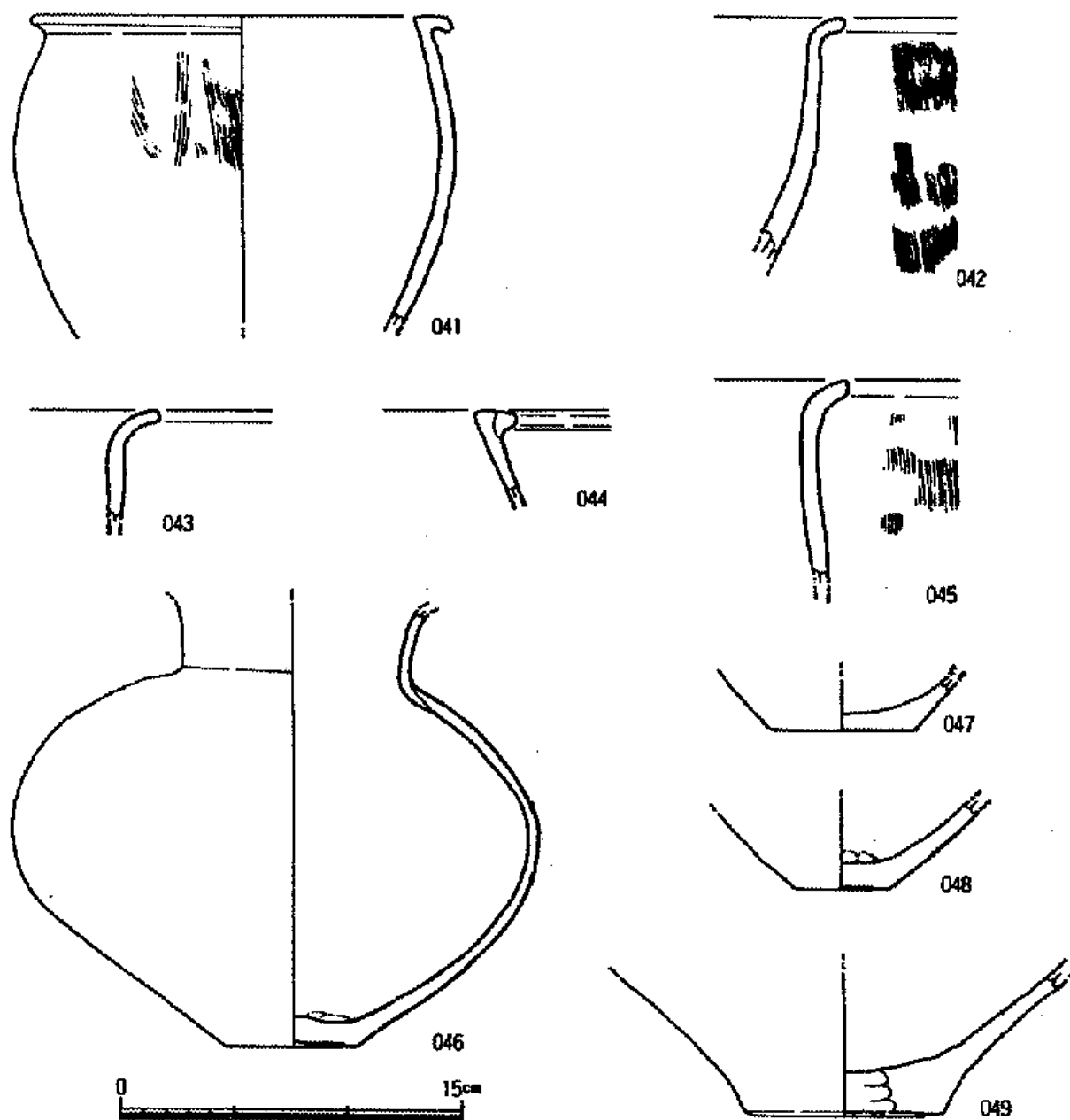
041~045は甕の口縁部片である。041・044は断面逆L字形を呈する。041はやや張り気味の胴部を持ち、復元口径は29.0cmを測る。042・043・045は如意形口縁である。

046~049は壺である。046は口縁端部を欠くがほぼ完形品である。胴部の中位に最大径を持ち、歪みもあろうが胴張りが強い。底径6.0cm、胴部最大径23.5cm、頸部径10.2cmを測る。

047~049は底部片である。047が復元底径6.6cm、048は内面に指頭痕が残り、底径は4.0cmを測る。049は風化が進んでいるが外面はハケ目で調整されているようである。底径は9.0cmを測る。



第12図 SK33出土遺物実測図① (1/3)



第13図 S K 33出土遺物実測図② (1/3)

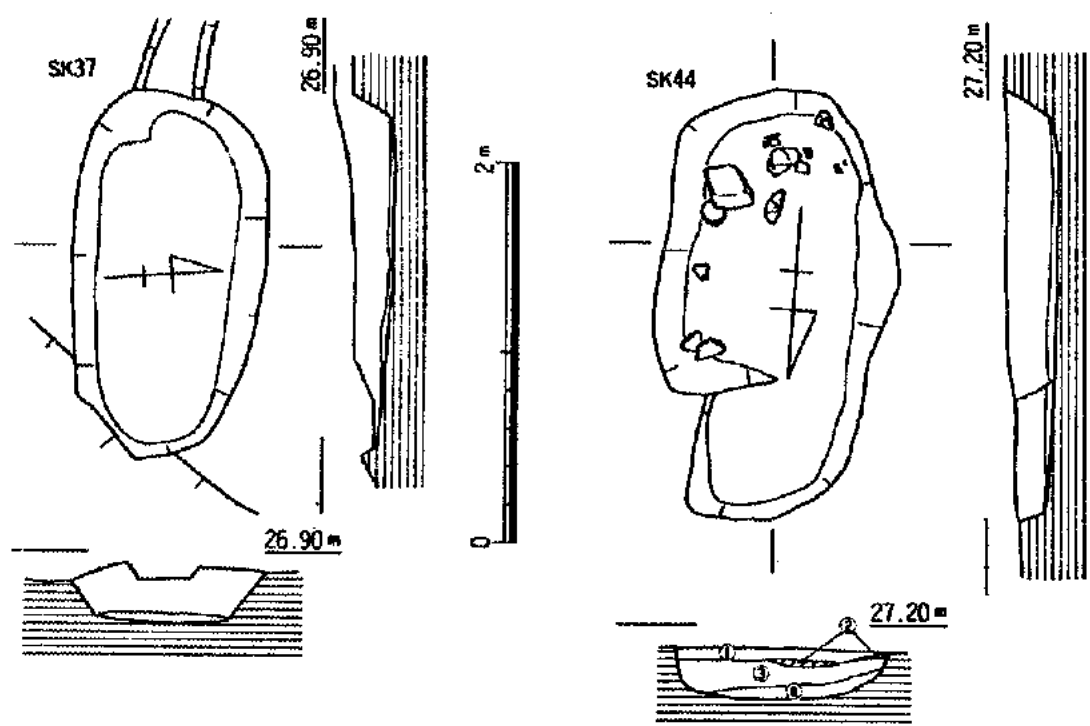
**S K 37 (図版5、第14図)**

調査区の北東に位置し、S D 15・57に切られる土坑である。平面形は長楕円形で、断面形は逆梯形を呈する。長さ195cm、幅100cm、深さ約30cmを測る。出土遺物は少ないが時期はおおむね弥生中期初頭である。

**出土遺物 (第15図)**

弥生土器 (050～057) 全て甕である。050は全体に風化が進んでいるが如意形口縁を呈する。復元口径29.6cm。051は如意形口縁で頸部下に1条の沈線を施す。調整は外面を縦方向





第14図 SK37・44遺構実測図 (1/40)

のハケ目、口縁部内面は横方向の粗いハケ目を施す。復元口径23.8cm。052・053は如意形に近いが直線的に外傾する口縁部を持つ。052は外面ハケ目であるが、内面は風化が進んでおり判然としない。復元口径は28.4cmを測る。054～057は程度に差があるが、全て上げ底の底部片である。復元底径は054が7.6cm、055は9.6cm、056は7.4cm、057は7.4cmを測る。

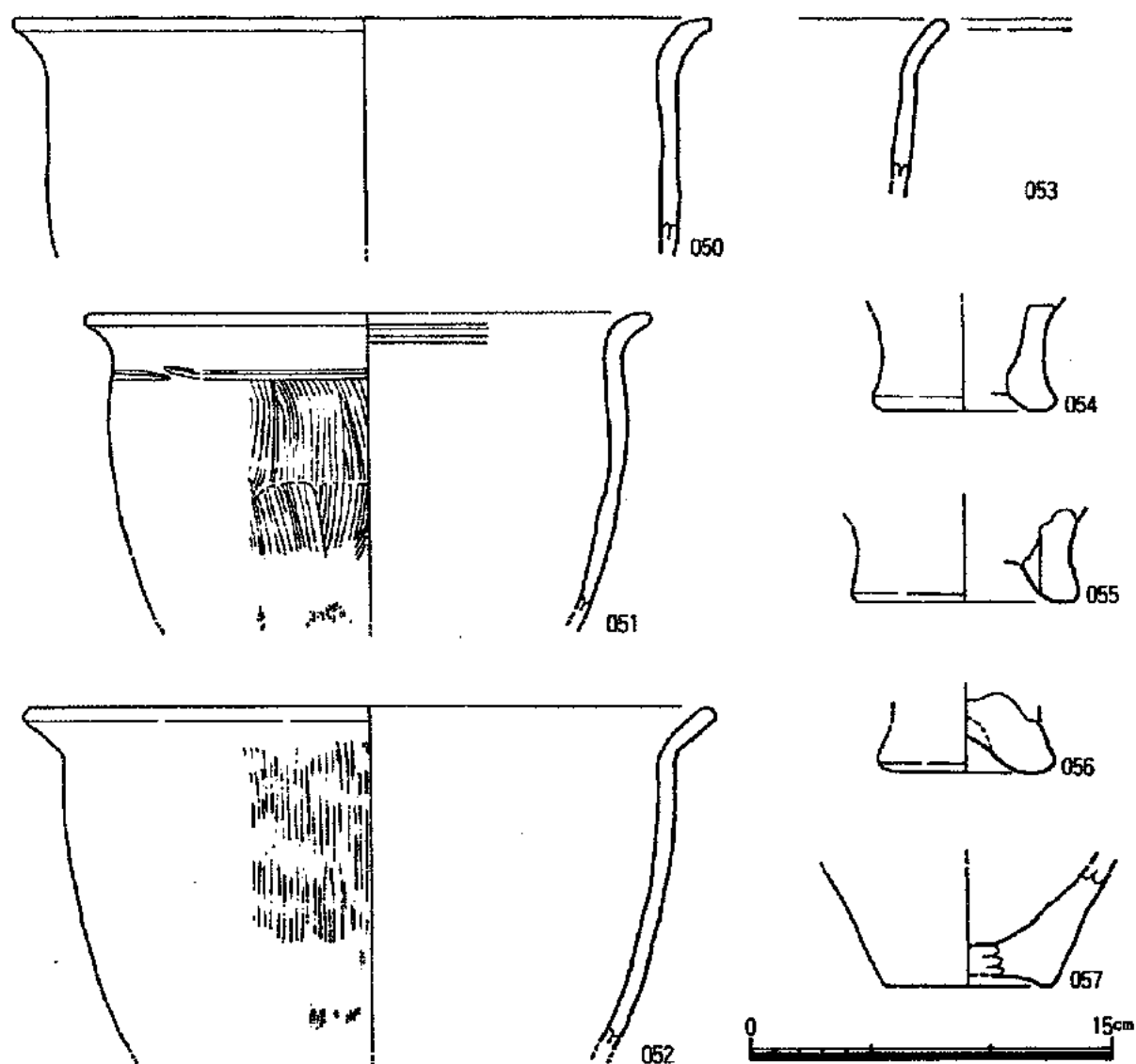
#### SK44 (図版5・6、第14図)

調査区の北東に位置し、SD50の2mほど東側で検出した。平面形は不整隅丸長方形、断面形は逆梯形を呈し、長さ225cm、幅120cm、深さは25cmを測る。覆土は①暗茶褐色粘質土、②黄茶色粘質土(地山と同)、③暗茶褐色粘質土(地山粒混じり)、④暗茶褐色粘質土(炭混じり)である。中世の土壌墓となる可能性もあるが遺物は全て破片であり、ここでは土坑として報告しておく。

#### 出土遺物 (第16図)

滑石製石鍋 (058) 外面は明瞭な横方向のノミ削り、内面はノミ削りの後、研磨で仕上げている。

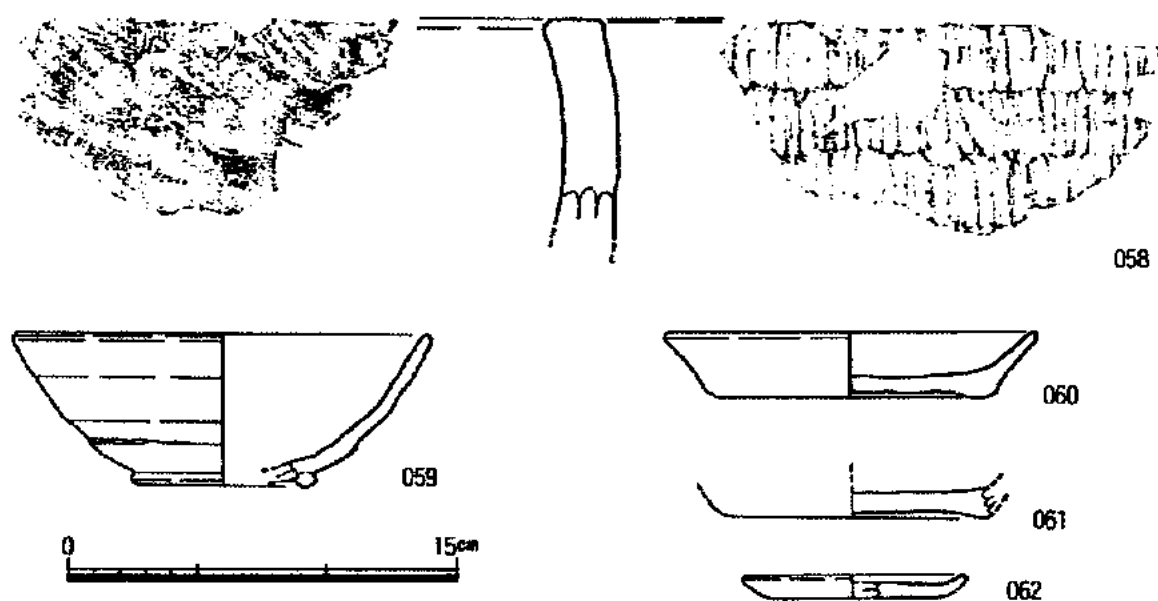
瓦器 (059) 碗の2分の1片である。高台は貼付けで断面形はややつぶれた方形を呈し、体部は緩やかに内湾しながら外へ開く。作りは雑で焼成はやや甘く、胎土は白灰色を呈する。



第15図 SK 37出土遺物実測図 (1/3)

また調整はかなり風化が進んでいるため判然としないが、外面はほとんどヘラ研磨されていないようである。2分の1程残存しており復元口径16.6cm、器高6.0cm、復元底径7.3cmを測る。

土師器 (060～062) 060・061は坏である。060は口縁部がやや外反気味に開く。風化が進んでおり、底部調整は不明。復元口径14.6cm、器高2.5cm、底径11.2cm。061は口縁部を欠き、底部のみの完形品である。底径11.4cm。062は小型で偏平な小皿である。復元口径8.8cm、器高0.9cm、復元底径6.8cmを測る。風化が進んでいるため底部調整ははっきりしないが、糸切りであろう。



第16図 SK44出土遺物実測図 (1/3)

**SK45 (図版6、第17図)**

調査区の北西角に位置し、S D50の東側で検出した。平面形は不整円形で、長径115cm、短径100cm、深さ100cmを測る。覆土は①暗茶褐色粘質土、②黄茶色粘質土（地山ブロック）、③暗黄茶色粘質土、④茶褐色粘質土、⑤暗茶褐色粘質土（地山粒混じり）、⑥暗茶褐色粘質土、⑦黄茶色粘質土、⑧黒褐色粘質土、⑨黄茶褐色粘質土である。出土遺物は微量で覆土から玉縁の白磁口縁、青磁、瓦器などの細片があるが図化し得ない。

**SK51 (図版6、第18図)**

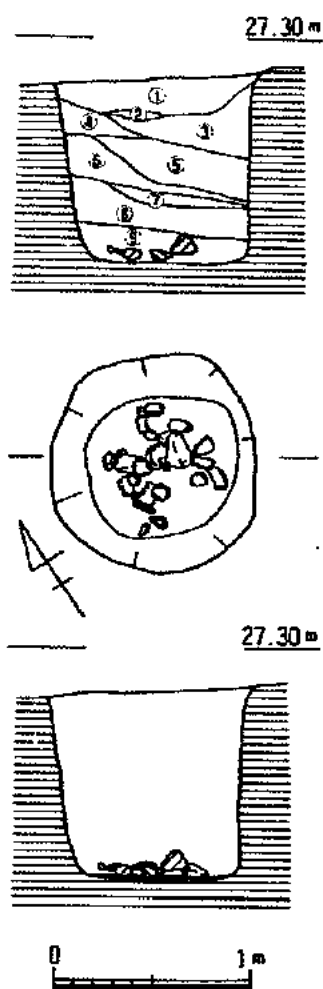
調査区の東に位置し、S D48の北側で検出した。平面形は隅丸方形で東西205cm、南北220cm、深さは10cm程である。出土遺物はなく性格不明。

**SK52 (図版10、第18図)**

調査区の東に位置し、S B22に切られる土坑である。平面形は隅丸長方形、断面形は逆梯形で、長さ300cm、幅約160cm、深さ35cmを測る。

**出土遺物 (第19図)**

弥生土器 (063～067) 063・064は如意形口縁の甕である。外面は縦方向のハケ目で調整している。065は壺の底部片である。復元底径7.6cmを測る。066・067は肉厚で上げ底の甕底部である。底径は067が7.3cm、067は7.4cmである。



第17図 SK45遺構実測図 (1/40)

#### 出土遺物 (第21図)

弥生土器 (068~071) 068・069は甕である。068はやや肉厚であり発達しない上げ底の底部を持ち、口縁部は如意形を呈する。底部内外にはナデが残るが、風化が進んでおり調整は判然としない。口径18.8cm、器高20.7cm、底径6.8cmを測る。069は上げ底の底部である。底径は6.0cmを測る。

070・071は壺である。070は完形品である。平底で肉厚の底部を持ち、胴部は偏平気味に膨らむ。口縁部は強く外反し、器壁は全体的に厚手である。調整は風化が著しく判然としないが、胴部の一部に僅かに研磨痕が残る。胴部下半と内底部には暗茶褐色の付着物が残る。口径11.8cm、器高16.4cm、底径6.4cm、胴部最大径19.9cmを測る。071は僅かに上げ底を呈する底部片である。復元底径10.6cm。

#### SK53 (図版6、第18図)

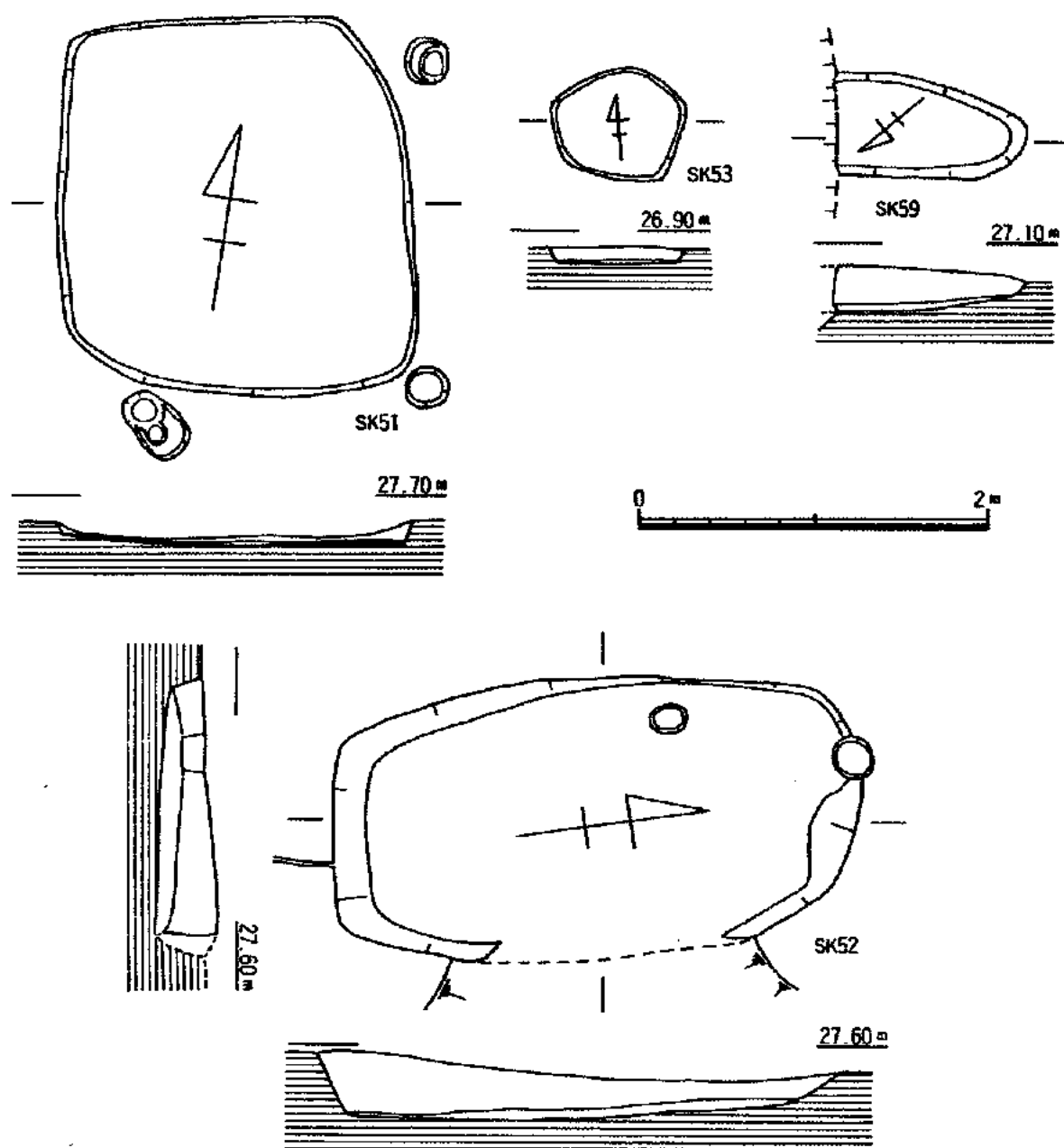
調査区の北東角に位置し、SK37の北側で検出した。平面形は不整円形で、東西75cm、南北67cm、深さ10cm程である。覆土には鉄滓および焼土が混じるが他に出土遺物はない。

#### SK59 (第18図)

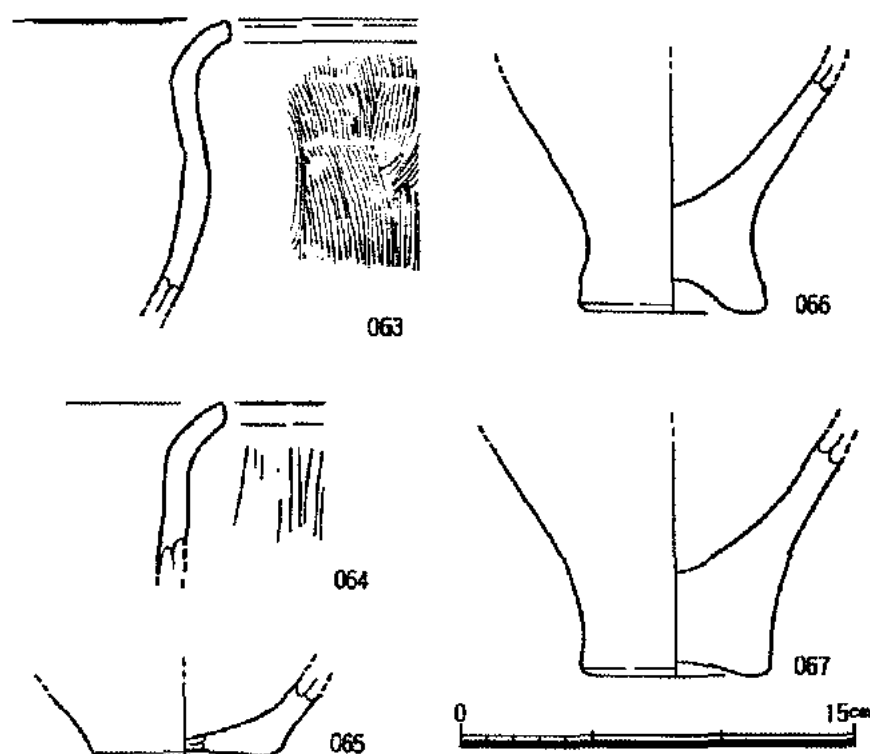
調査区の北端中程に位置し、SD34に切られる。全長は不明だが幅は60cm、深さ27cmを測る。出土遺物はない。

#### SK61 (図版6、第20図)

SB22の東側に位置し、SD7に切られる。平面形は不整円形で、長径150cm、短径130cm、深さ約57cmを測る。断面形は袋状を呈する部分もあり、いわゆる弥生の袋状竪穴の可能性が高い。覆土は①暗茶灰色粘質土、②暗茶灰褐色粘質土、③茶褐色粘質土、④暗茶褐色粘質土、⑤暗黄茶色粘質土、⑥暗黄灰色粘質土、⑦暗茶褐色粘質土、(④よりやや暗い) ⑧暗黄茶褐色粘質土である。



第18図 SK51・52・53・59遺構実測図 (1/40)



第19図 SK52出土遺物実測図 (1/3)

#### SK62 (図版7、第22図)

調査区の東端中程に位置し、平面形は隅丸長方形、断面形は逆梯形を呈し、長さ170cm、幅95cm、深さは30cmを測る。遺物は壁面近くの床面より僅かに浮いた位置からまとまって出土している。

#### 出土遺物 (第23図)

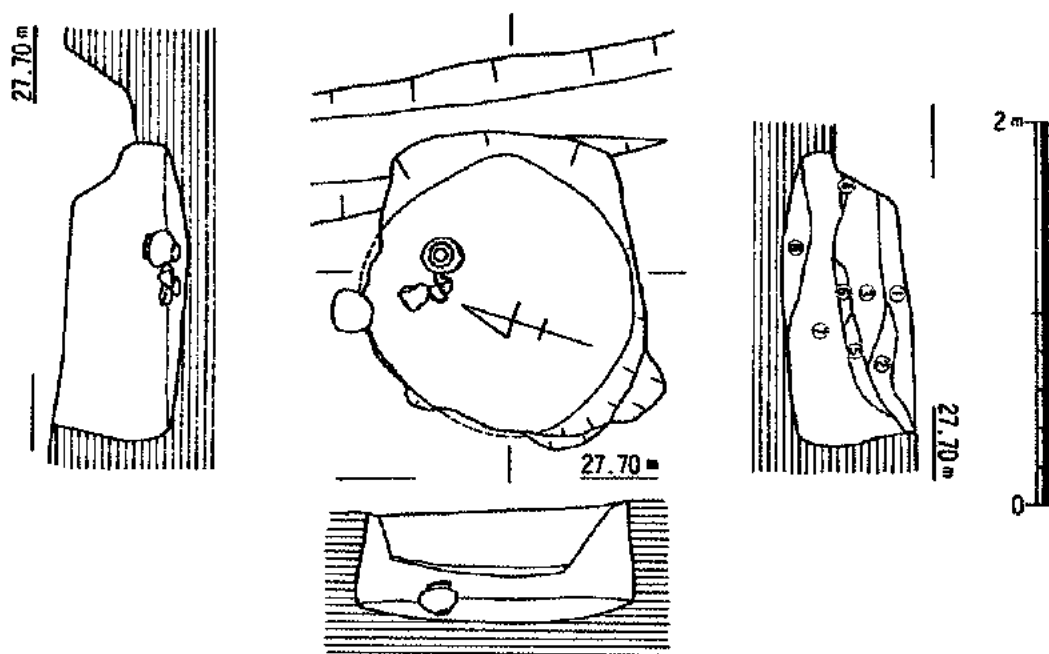
弥生土器 (072~076) 図化できたものはすべて甕である。072は断面逆凹形の底部を持ち、口縁部は如意形である。外面は縦方向のハケ目、内面はナデで仕上げている。口径25.2cm、器高26.1cm、底径7.3cmを測る。073は底部を欠くが、如意形口縁を呈し胴部外面には縦および斜方向のハケ目を施す。口径32.3cmを測る。

074は口縁部片である。口縁部は如意形に近く、調整は風化が進んでおり不明である。

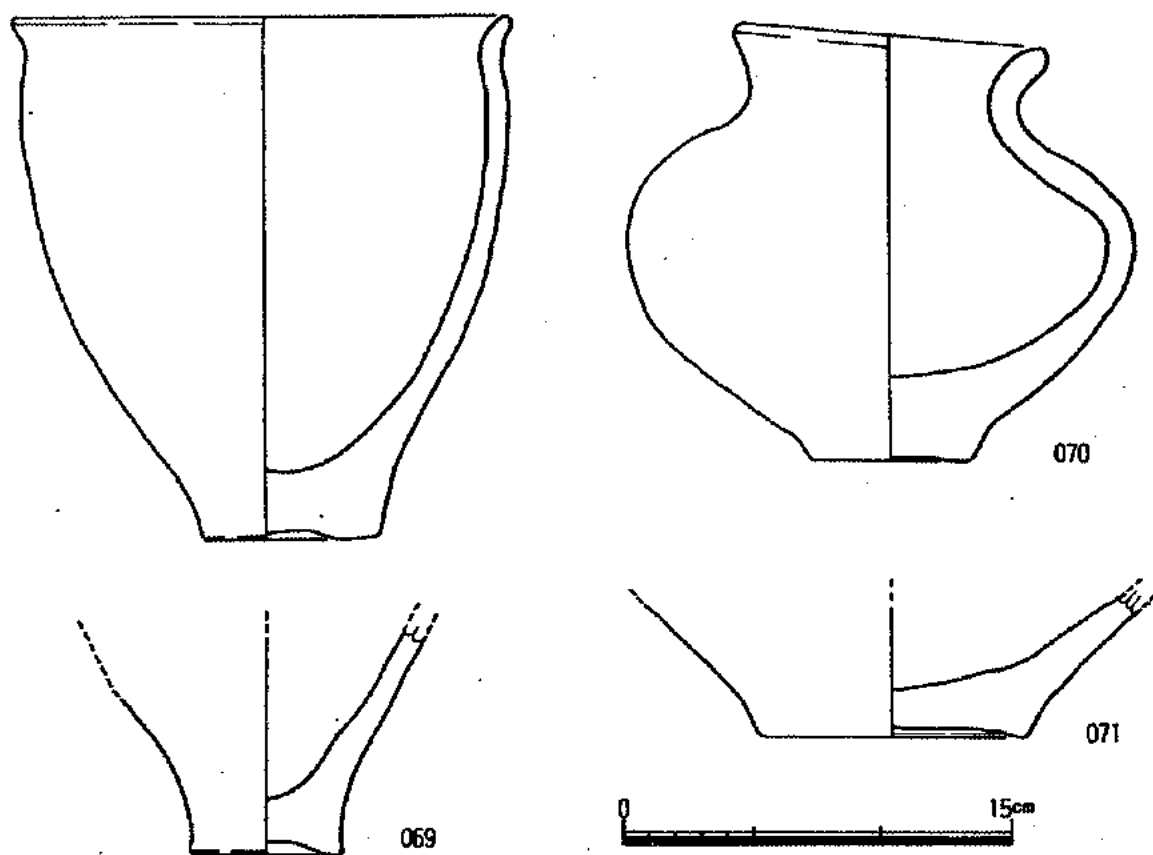
075・076は肉厚で上げ底の底部である。底径は075が8.0cm、076は7.8cm (復元) である。

#### SK70 (図版7、第22図)

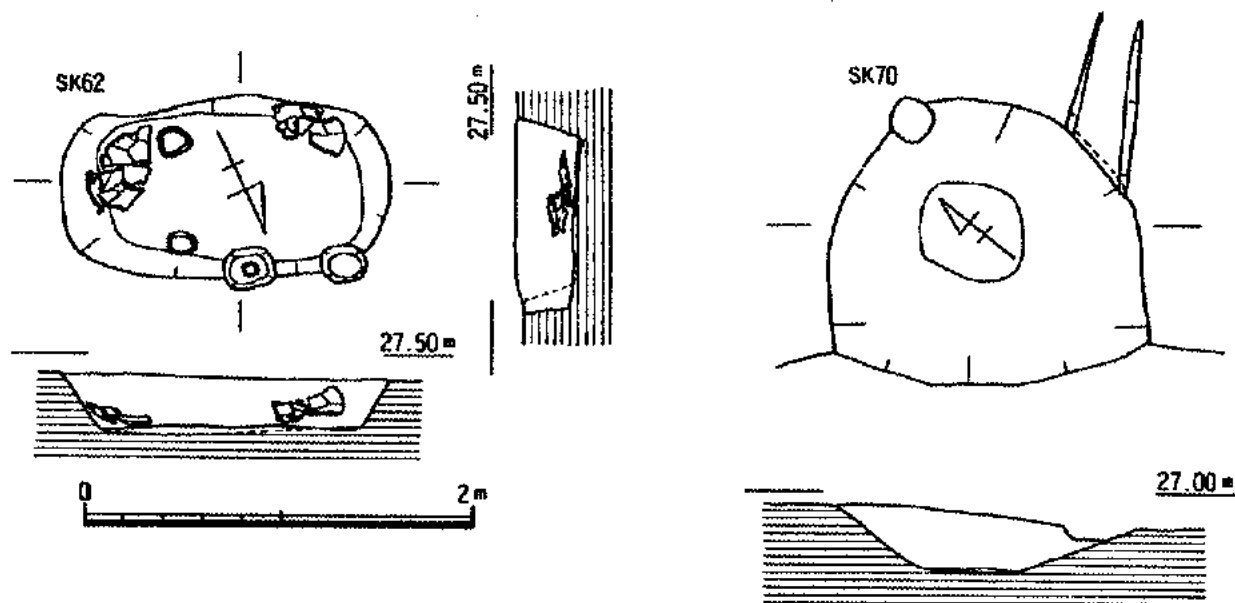
SD13に南東側を切られる土坑である。平面形は隅丸長方形、断面形は逆梯形を呈し、長さ169cm、幅は95cm、深さは最も残りの良いところで30cmを測る。



第20図 SK61遺構実測図 (1/40)



第21図 SK61出土遺物実測図 (1/3)



第22図 SK62・70遺構実測図 (1/40)

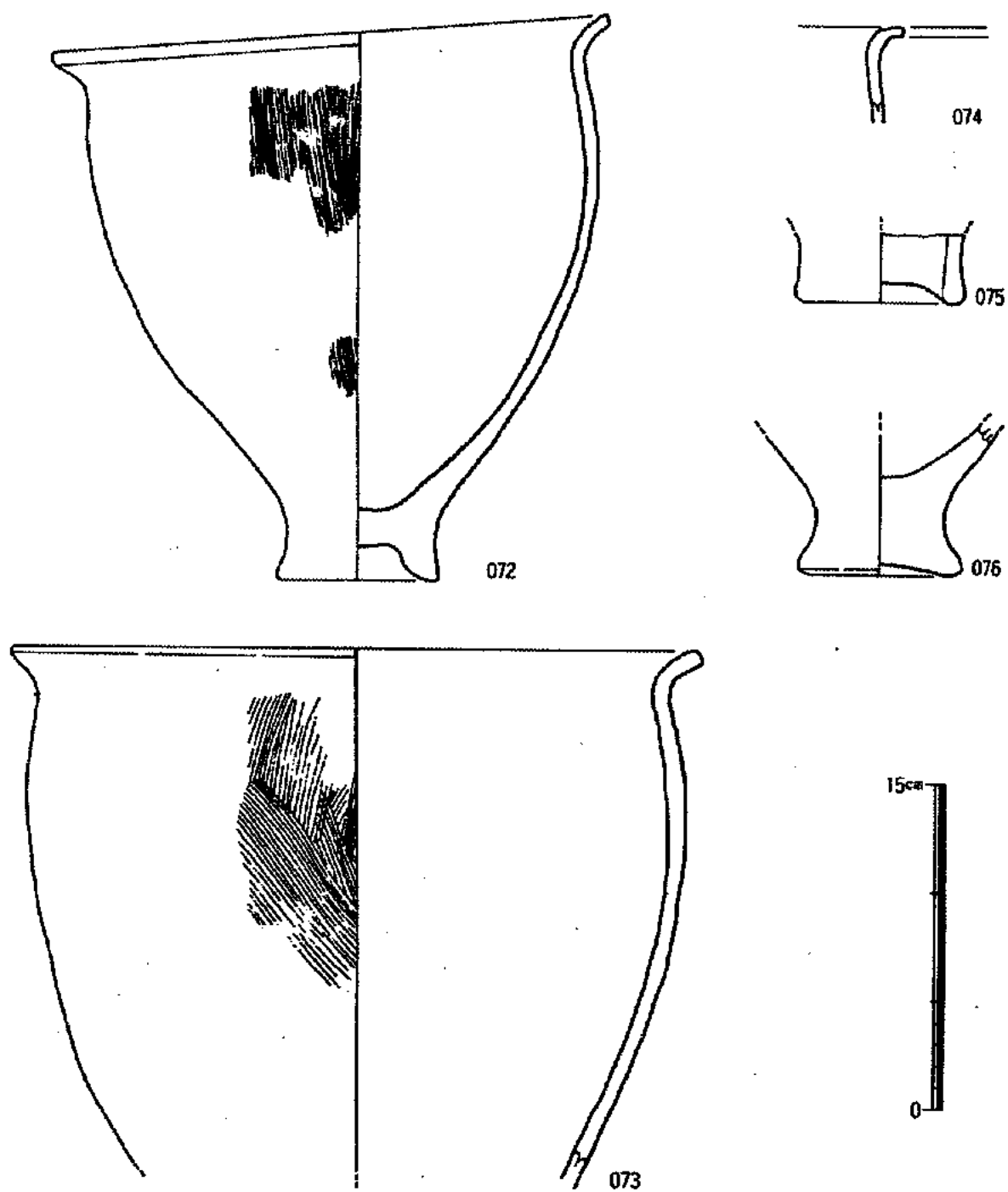
#### 出土遺物 (第24・25図)

弥生土器 (077~081・083・084) 077~081は甕である。077は厚みのある平底から胴部はあまり膨らまずに外傾しながら立ち上がり、口縁部は如意形を呈する。外面は荒い縦方向のハケ目で調整し、内面はナデで仕上げている。計測値は復元口径30.2cm、器高31.7cm、復元底径8.4cmを測る。078は口縁部を強く外反し、端部は断面方形を呈する。外面は細かな縦方向のハケ目を施し、内面はナデで仕上げている。復元口径26.0cmを測る。079は断面逆L字形の口縁部片である。080・081は僅かに上げ底の底部片である。080は底径5.8cm、081は復元底径9.3cmを測る。

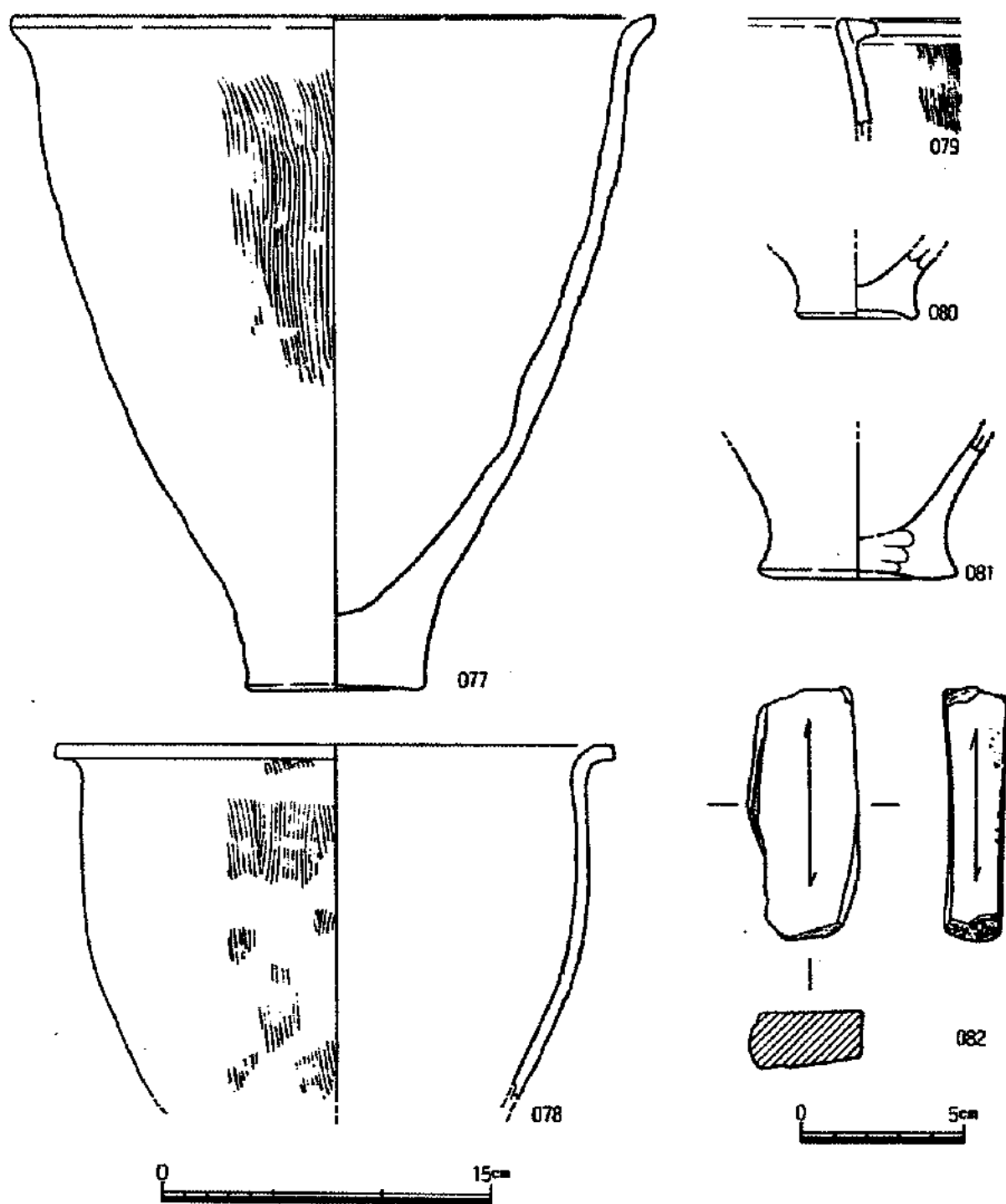
083・084は壺である。083はC字形にカーブする口縁部を持ち、頸部と胴部の境に断面三角形の突帯が2条巡る。文様はその直下からヘラ描きによる無軸の羽状文が施され、上下を区切る2条の沈線および下端を区切る1条の沈線によって文様帯を2段に画している。器壁は荒れており調整痕は判然としないが内面はナデで仕上げている。また外面の文様を画する沈線部分には赤色顔料の痕跡が僅かに残るが、全面に塗布されていたかは不明である。復元口径12.3cm、器高24.0cm、復元底径9.0cmを測る。084は肩部から胴部最大径付近までの2分の1片である。張りの強い偏平気味の胴部を持ち、肩部には断面三角形の突帯が3条巡る。風化が進んでいるが外面には僅かに丹塗が残り、内面は粗い横方向のハケ目の後ナデで仕上げている。

石器 (082) 粒子の細かい硬質砂岩製の砥石である。小形品で断面長方形を呈し、最大長

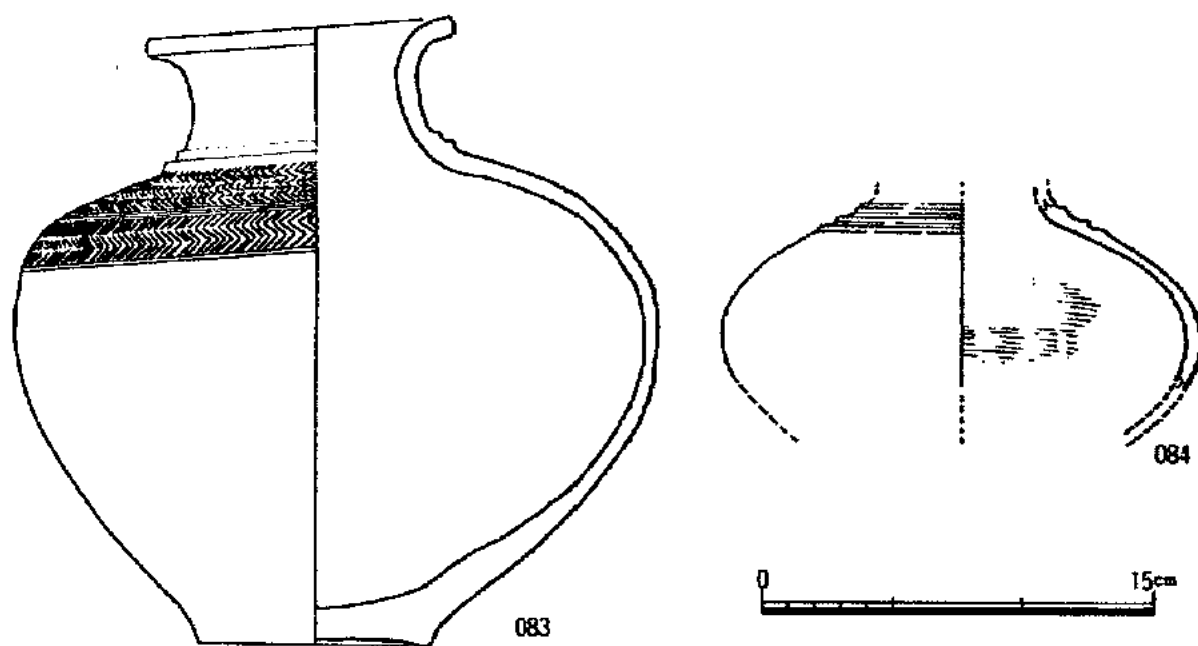




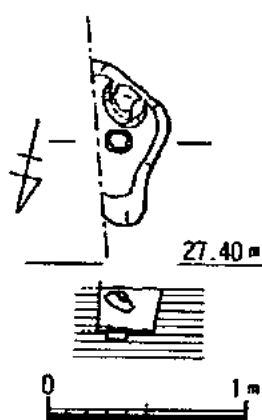
第23図 S K 62出土遺物実測図 (1/3)



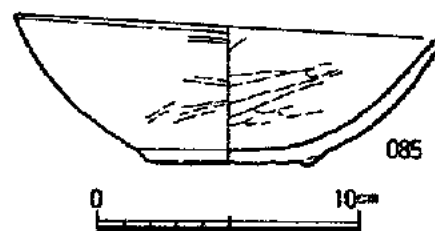
第24図 SK70出土遺物実測図① (1/3・1/2)



第25図 S K 70出土遺物実測図② (1/3)



第26図 S K 71遺構実測図 (1/40)



第27図 S K 71出土遺物実測図(1/3)

7.9cm、最大幅3.4cm、重量約66gを測る。色調は黒灰色で全体に火を受けた痕跡が残る。

#### S K 71 (第26図)

調査区の東端中程に位置し、東側が調査区外へと延びる不整形の土坑である。長さ85cm、深さは26cmで底部には直径13cm程の小穴が検出された。柱穴の可能性もあるがここでは土坑として報告する。遺物は瓦器碗が底から15cm程浮いた状態で出土している。

#### 出土遺物 (第27図)

瓦器 (085) 碗である。底部は高台貼付けで断面三角形に近く、体部は内湾しながら大きく開き端部を丸く収める。調整は内外面に雑なヘラ研磨を施し、色調は青灰色で胎土は粗く細かな砂粒を含む。口径16.7cm、器高5.7cm、底径6.9cmを測る。

## 2. 土墳墓・木棺墓・石棺墓

### S K 28 <木棺墓> (図版7、第28図)

墓墳の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ177cm、幅63cmを測る。棺の内法は長さ133cm、幅25cm、深さ20cmで側板および木口部には掘込みがあり、南木口にはさらに浅い掘込みを持つ。主軸方向はN-10°-Eで丘陵尾根線に平行する。副葬遺物はない。

### S K 29 <土墳墓> (図版7、第28図)

墓墳の平面形は隅丸長方形で長さ170cm、幅68cm、深さ10cmを測る。主軸方向はN-9°-Wで丘陵尾根線に平行する。副葬遺物はない。

### S K 30 <木棺墓> (図版7、第28図)

墓墳の平面形は隅丸長方形で、棺の内法は長さ230cm、幅70cm、深さ27cmを測る。頭位と考えられる西側小口には浅い掘込みを持つ。主軸方向はN-85°-Eで丘陵尾根線に直交する。副葬遺物は鉄斧が床面から20cmほど浮いた位置から出土している。他には埋土中より凸レンズ状平底になるような底部小片が出土しているが図化に耐えない。出土土器は全て細片であり、地山上には後期の包含層が覆っていたため流れ込みの可能性が高く、必ずしも当該木棺墓の時期を示すものとは言えないため、ここでは後期前半以降としておく。

#### 出土遺物 (第29図)

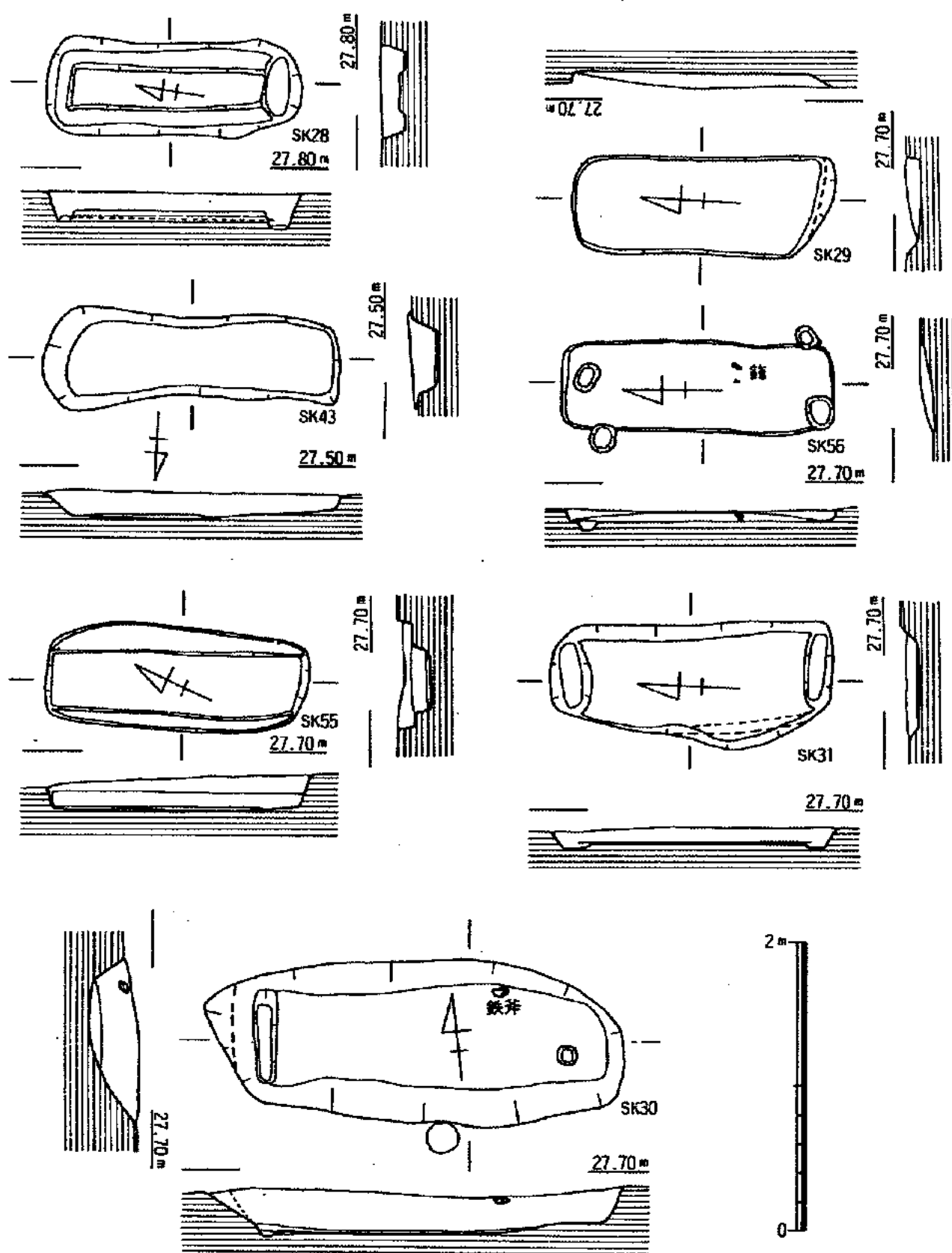
鉄斧 (086) 全長8.9cm、刃部幅4.7cmを測る有袋鉄斧である。

### S K 31 <木棺墓> (図版7、第28図)

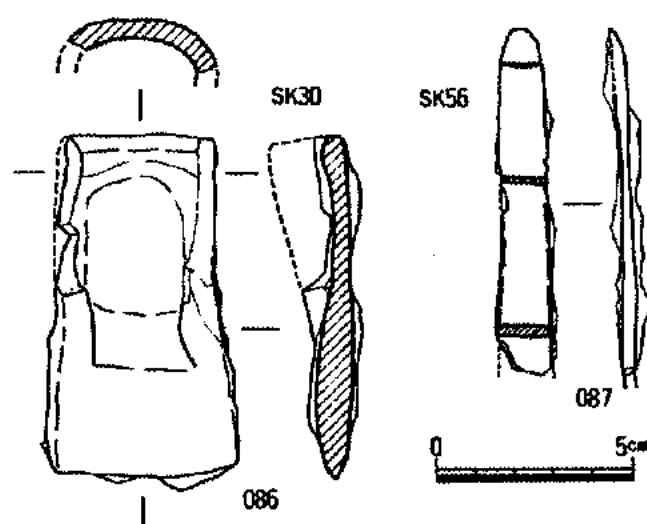
墓墳の平面形は隅丸長方形で、棺の内法は長さ157cm、幅59cm、深さ12cmを測る。木口部には浅い掘込みを持つ。主軸方向はN-1°-Eで丘陵尾根線に平行する。

### S K 43 <土墳墓> (図版8、第28図)

墓墳の平面形は不整隅丸長方形で長さ206cm、幅55cm、深さ18cmを測る。主軸方向はN-87°-Wで丘陵尾根線に直交する。



第28図 SK28-31・43・55・56遺構実測図 (1/40)

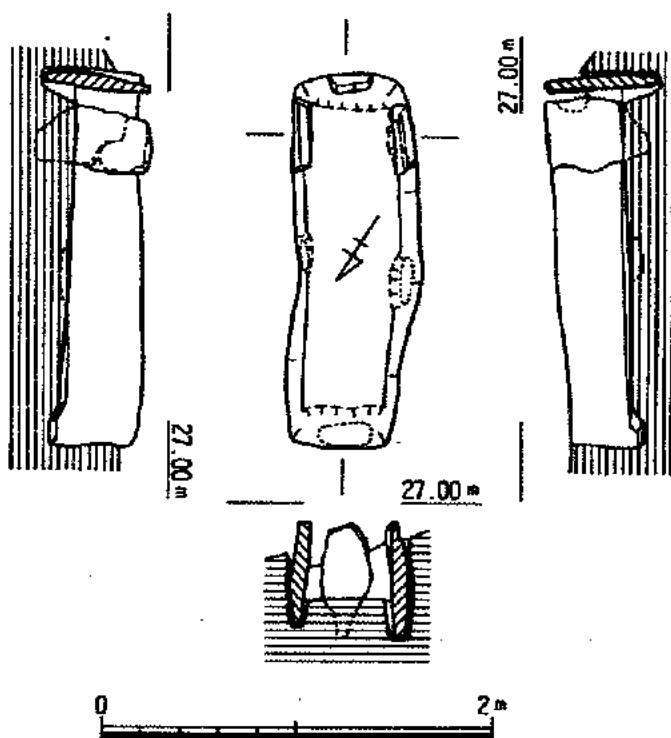


第29図 SK30・56出土遺物実測図 (1/2)

遺物は鉈が床面近くから出土している。

出土遺物 (第29図)

鉄器 (087) 鉈である。刃部は先端部にしか作られず、身部は矩形を呈する。現存長9.0 cm、幅1.4 cmを測る。



第30図 SQ64遺構実測図 (1/40)

#### SK55〈木棺墓〉 (図版8、第28図)

墓墳の平面形は隅丸長方形で、長さ182 cm、幅71 cmを測る。二段目の掘込みは12 cm程と浅く、木棺を取めたのであろう。棺の内法は長さ133 cm、幅43 cm、深さ22 cm。主軸方向はN-26°-Eで丘陵尾根線に平行する。

#### SK56〈土墳墓〉 (図版8、第28図)

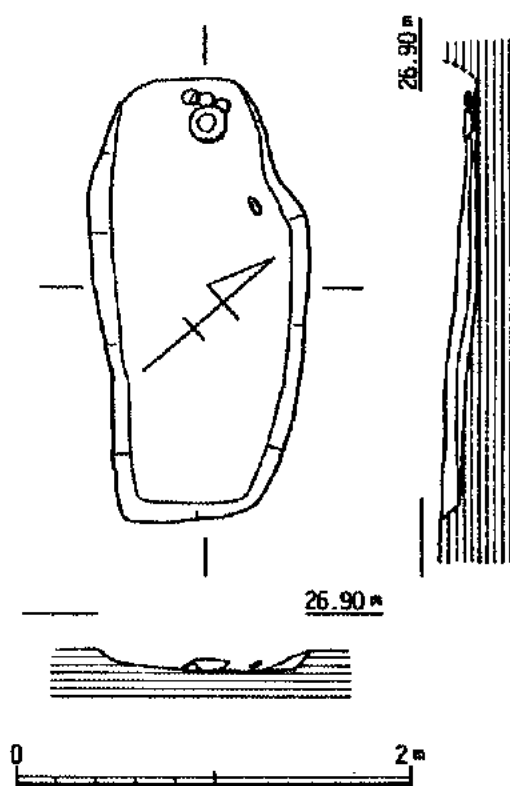
墓墳の平面形は隅丸長方形で長さ188 cm、幅64 cm、深さ9 cmを測る。主軸方向はNSで丘陵尾根線に平行する。副葬

#### SQ64〈石棺墓〉 (図版8、第30図)

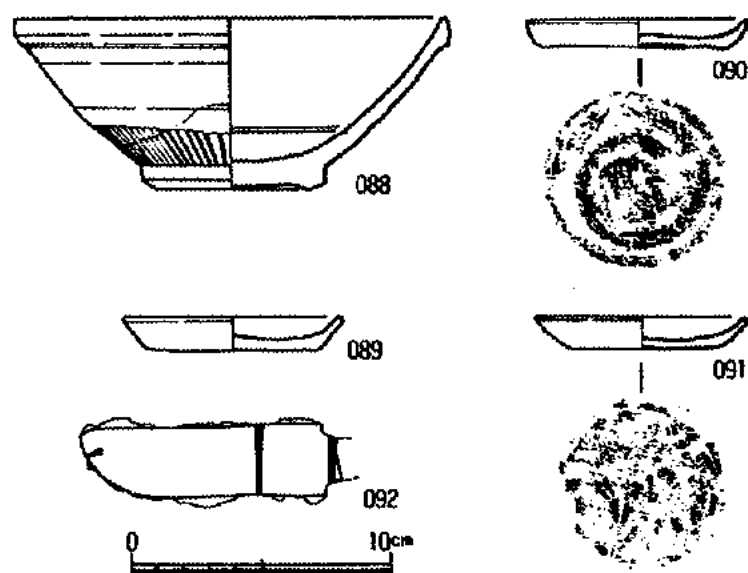
墓墳の平面形は隅丸長方形で、長さ193 cm、幅60 cmを測る。棺の内法は長さ170 cm、幅40 cm、深さ40 cmである。主軸方向はN-33°-Eで丘陵尾根線に平行する。石材が残存するのは頭位と考えられる南東小口およびその両側、また間隔をおいて腰部両壁、足位小口に板状の石材の抜き痕が残る。棺内を全て石材で囲っていない可能性がある。

#### SK58〈土墳墓〉 (図版8・9、第31図)

中世の土墳墓である。墓墳の平面形は不整隅丸長方形で、長さ230 cm、幅107 cm



第31図 SK 58遺構実測図 (1/40)



第32図 SK 58出土遺物実測図 (1/3)

を測る。主軸方向はN-48°-Eで丘陵尾根線に平行する。北西端には白磁碗と3枚の土師器小皿が配されていた。時期は12世紀中頃である。

#### 出土遺物 (第32図)

白磁 (088) 完形品の白磁Ⅳ-1・a類である。釉調は灰黄色で、外面中位下半には施釉されない。計測値は口径17.0cm、器高6.7cm、底径7.2cmを測る。

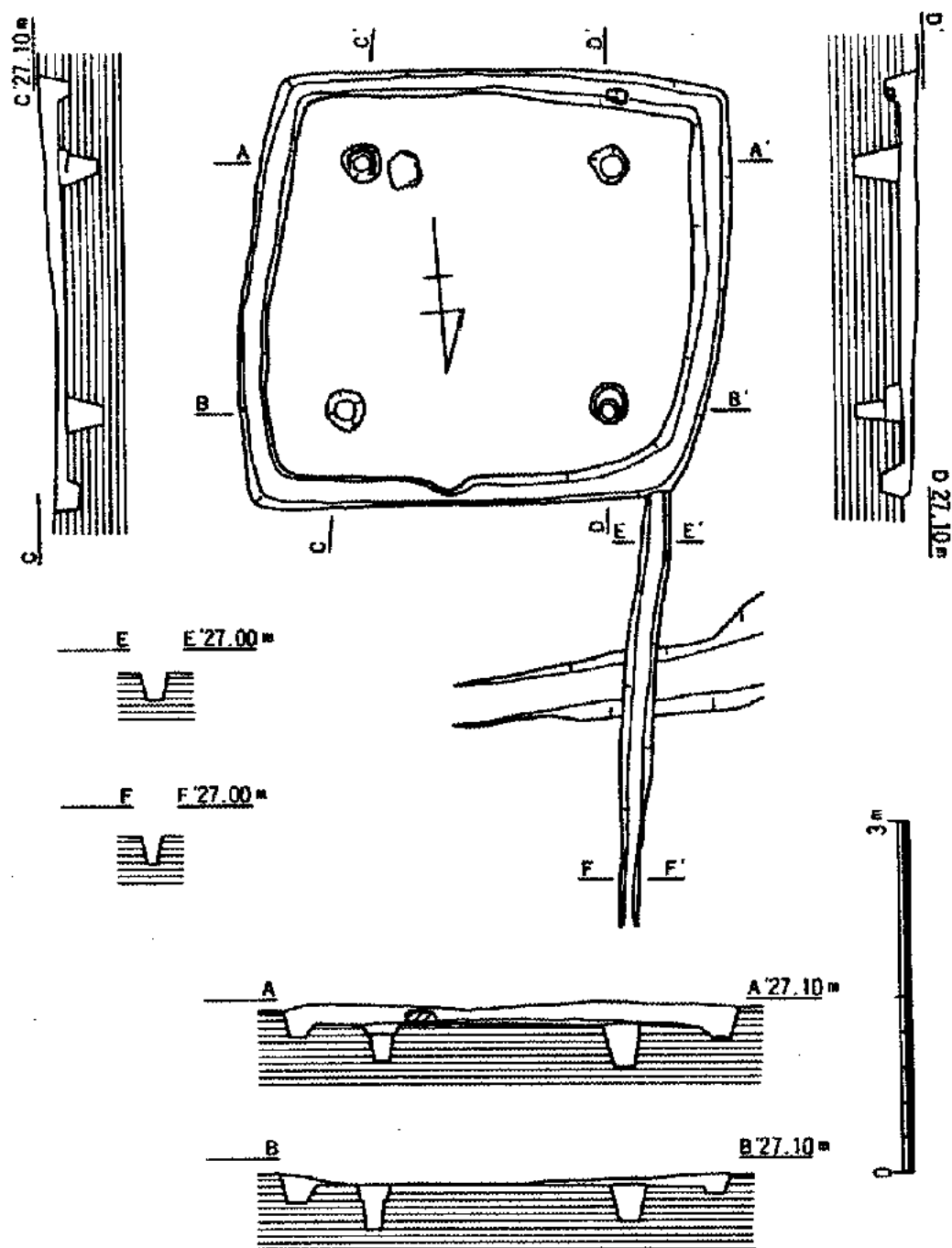
土師器 (089-091) すべて小皿で、底部の切り離しはヘラと糸が混在する。089は風化のため底部の切り離しは不明である。口径8.6cm、器高1.4cm、底径6.6cmを測る。090は回転ヘラ切りである。口径8.7cm、器高1.2cm、底径7.3cm。091は回転糸切りである。口径8.4cm、器高1.3cm、底径5.9cm。

鉄器 (092) 茎を欠くが小刀である。身長9.5cm、身幅2.7cm、背幅0.2cm、茎幅2.0cmを測る。

### 3. 竪穴式住居跡

#### SB16 (図版9・10、第33図)

調査区の北東、SK 11の北側に位置しSD 14に排水溝を切られる住居跡である。平面形は方形で、規模は東西4.0m南北3.8mである。主柱穴は4本で周壁溝が巡り、北西角からは排水溝が北へ伸びる。また南東角に長径30cm短径26cmほどの偏平な石材が据えられている。

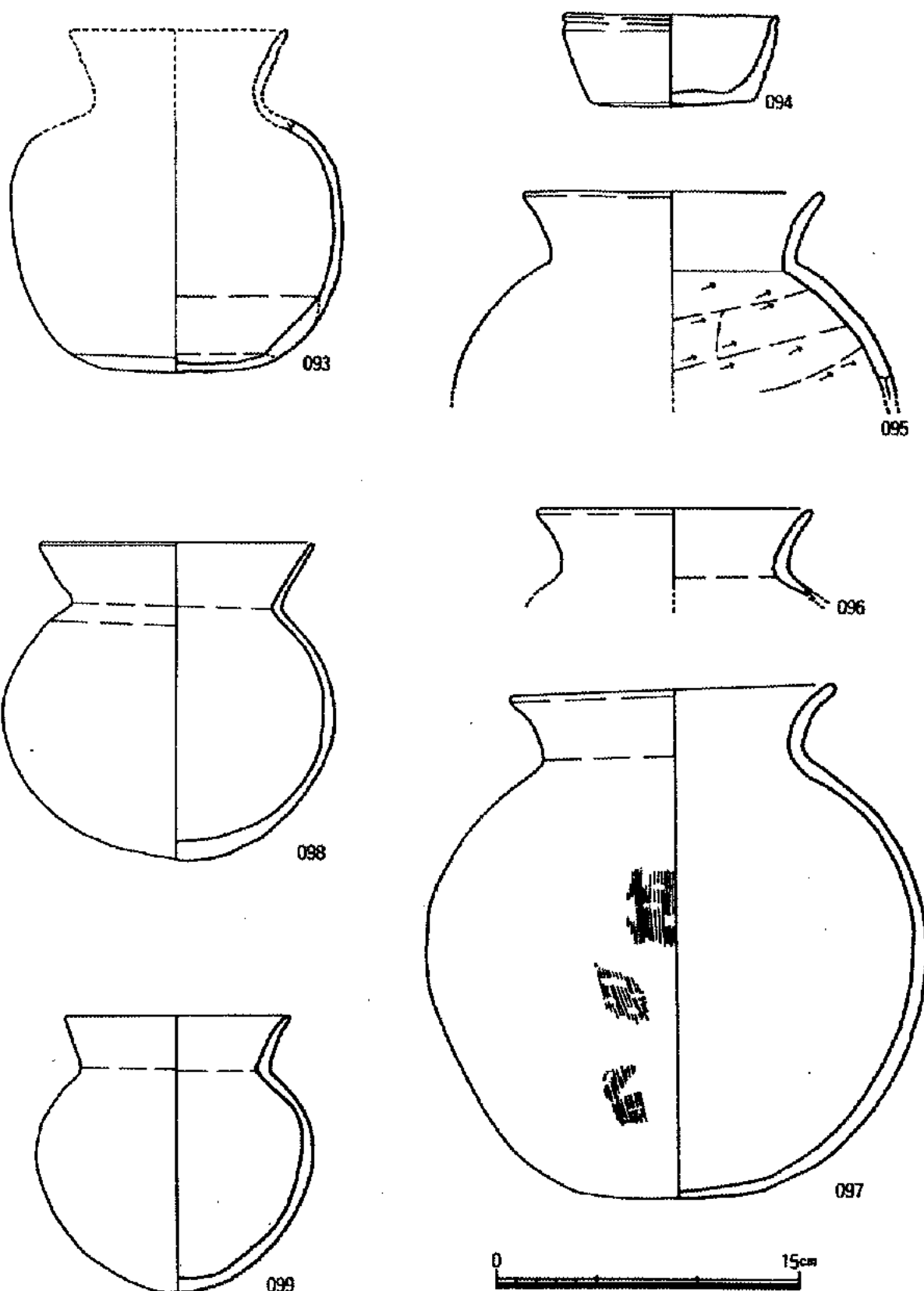


第33図 SB16遺構実測図 (1/60)

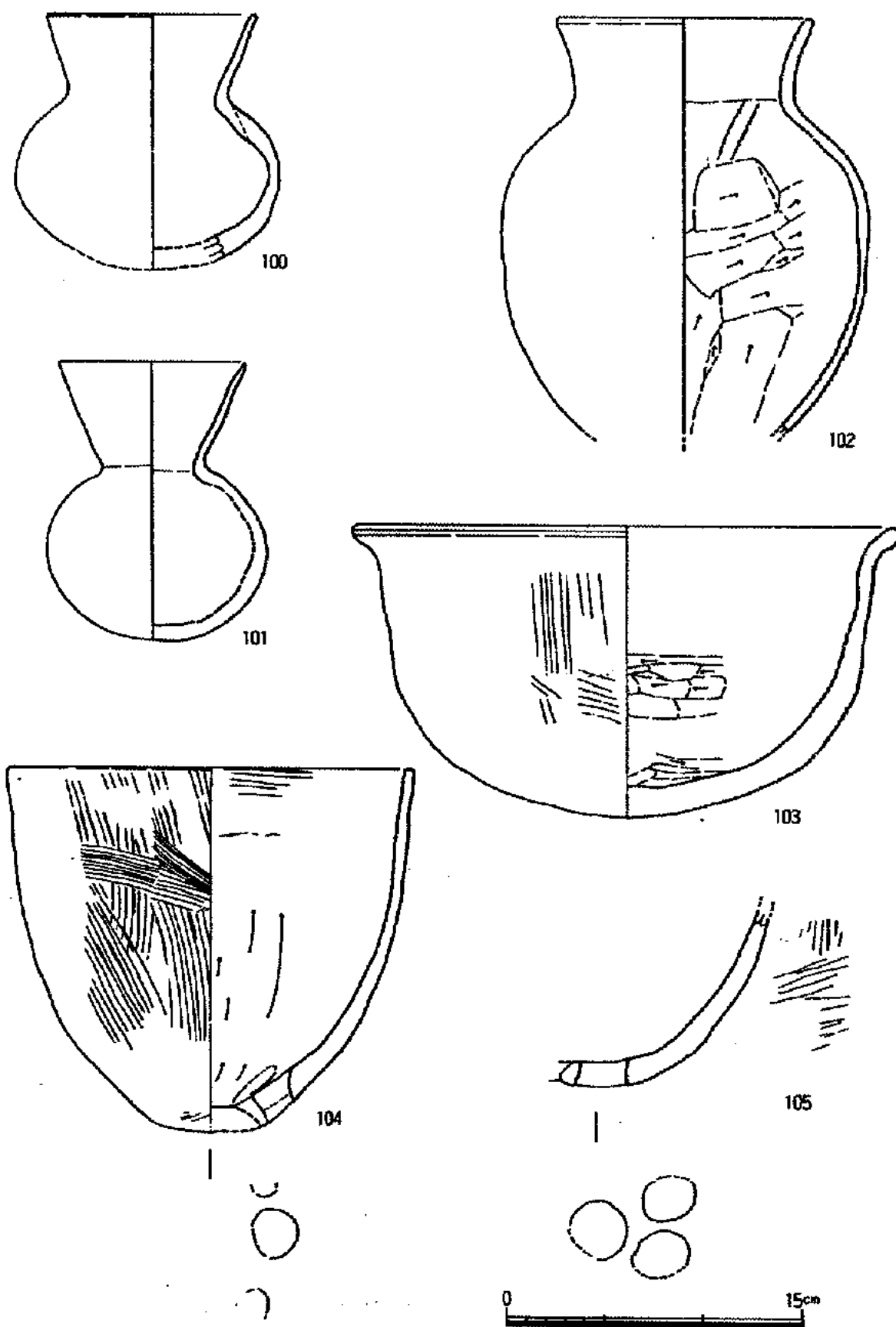
出土遺物 (第34・35・36図)

須恵器 (093・094) 093は口縁部を欠くが広口壺であろう。底部は平底で、胴部は内弯しながら立ち上がり肩部はやや張る。調整はかなり風化が進んでいるがナデで仕上げており、叩きは用いられていない。また底部には接合痕が確認できる。色調は青白灰色、胎土はやや粗で砂粒を多く含み、焼成は不良で瓦質である。胴部最大径17.0cm、現存高12.8cmを測る。

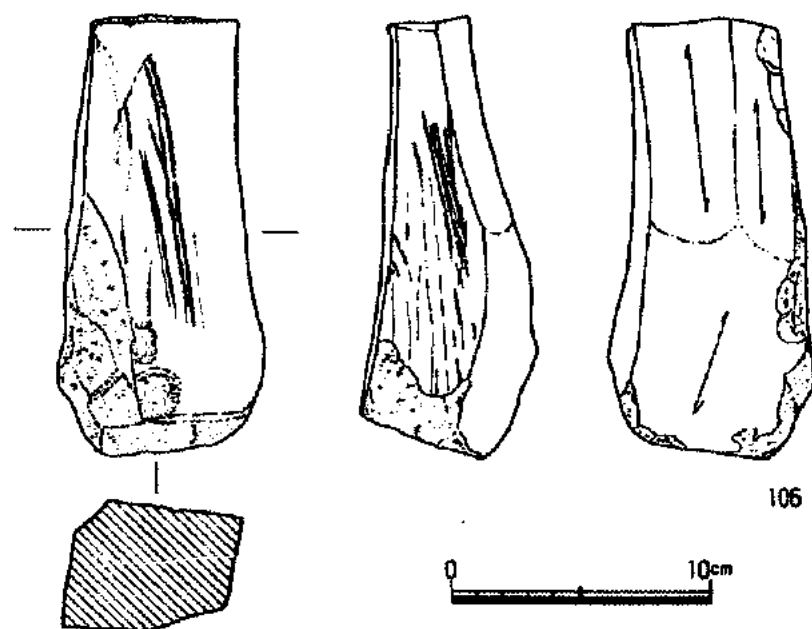




第34図 SB16出土遺物実測図① (1/3)



第35図 S B16出土遺物実測図② (1/3)



第36図 SB 16出土遺物実測図③ (1/3)

094は坏である。平底で体部は外傾してほぼ直状に立ち上がり、口縁端部は沈線状の窪みを作って短く外反する。色調は白灰色、胎土には砂粒を含み、焼成は不良で瓦質である。

土師器 (095~105) 095~102は壺として報告する。095は内面に横方向のヘラ削りを施すが、外面は風化のため調整不明。復元口径15.2cm。096は「く」字形に外反する口縁部である。口径14.4cm。097は丸みの強い胴部を持ち、口縁部は「く」字形に外反して端部をやや外傾させる。内面はナデ、外面は縦方向のハケ目を施す。復元口径16.1cm、器高26.0cm、頸部径12.8cm、胴部最大径24.4cm。098はやや偏球形の胴部を持ち、口縁部は直状に外傾して立ち上がり、端部は小さく断面方形に収める。口径14.0cm、器高15.8cm、頸部径10.6cm、胴部最大径16.8cm。099は丸みの強い胴部から口縁部を「く」字形に外反する。口径11.4cm、器高13.7cm、頸部径9.7cm、胴部最大径14.1cmを測る。100は偏球形の胴部から外傾して直状に開く口縁部を持つ。口径10.2cm、復元器高13.1cm、頸部径8.3cm、胴部最大径13.6cmを測る。101は完形品である。球形に近い胴部から大きく直状に開く口縁部を持ち、胎土は精良、色調は淡黄茶色を呈する。調整は風化が進んでいるが胴部内面はヘラ削り、他はナデであろう。口径9.6cm、器高14.2cm、頸部径5.3cm、胴部最大径11.3cmを測る。102は長胴で外反する口縁部を持ち、外面はナデ、胴部内面はヘラ削りを施す。胎土は砂粒を含むが良好で色調は茶橙色を呈する。復元口径13.0cm、頸部径11.0cm、胴部最大径18.0cmを測る。

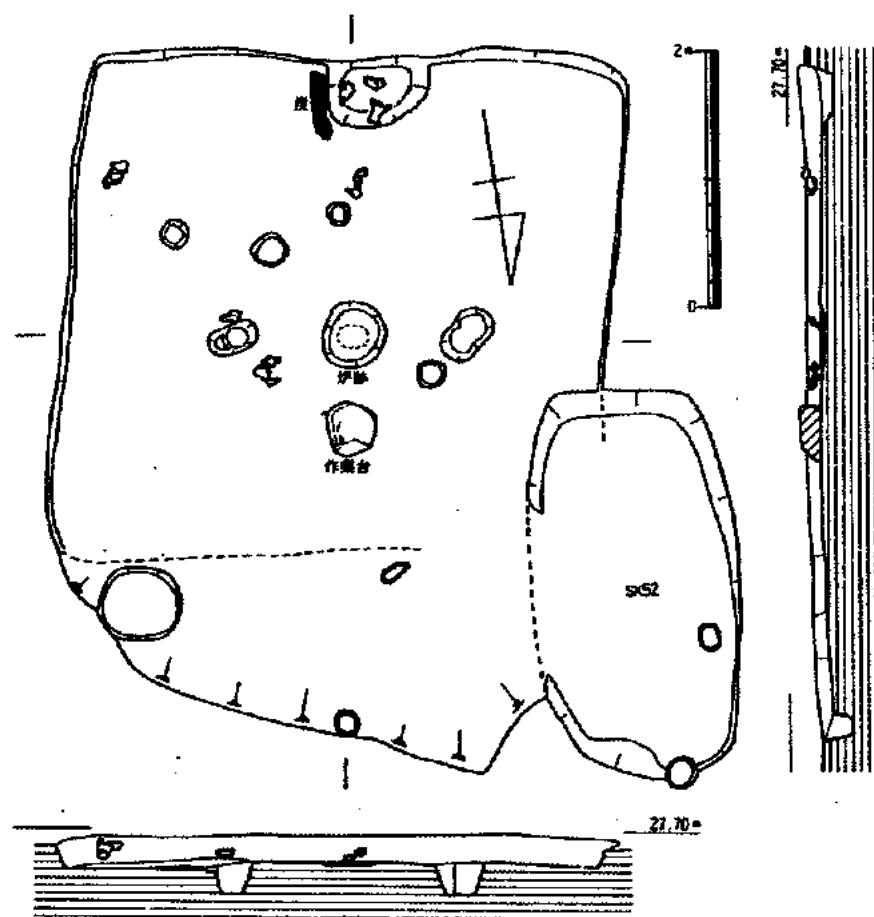
103は鉢である。外面は荒いハケ目、内面は横方向のヘラ削りを施す。底部付近の風化が著しい。復元口径28.4cm、器高14.8cm。

104・105は甌である。砲弾形を呈し、口縁端部は平坦に収める。底部には3ヶ所に穿孔が残るが総数は不明。外面および口縁部内面に荒いハケ目を施し、内面は縦方向の削り後ナデで仕上げる。復元口径21.0cm、復元器高は18.5cmとなる。105は小片であるが104とは別個体である。外面は荒いハケ目、内面は斜方向の削りの後、ナデで仕上げている。

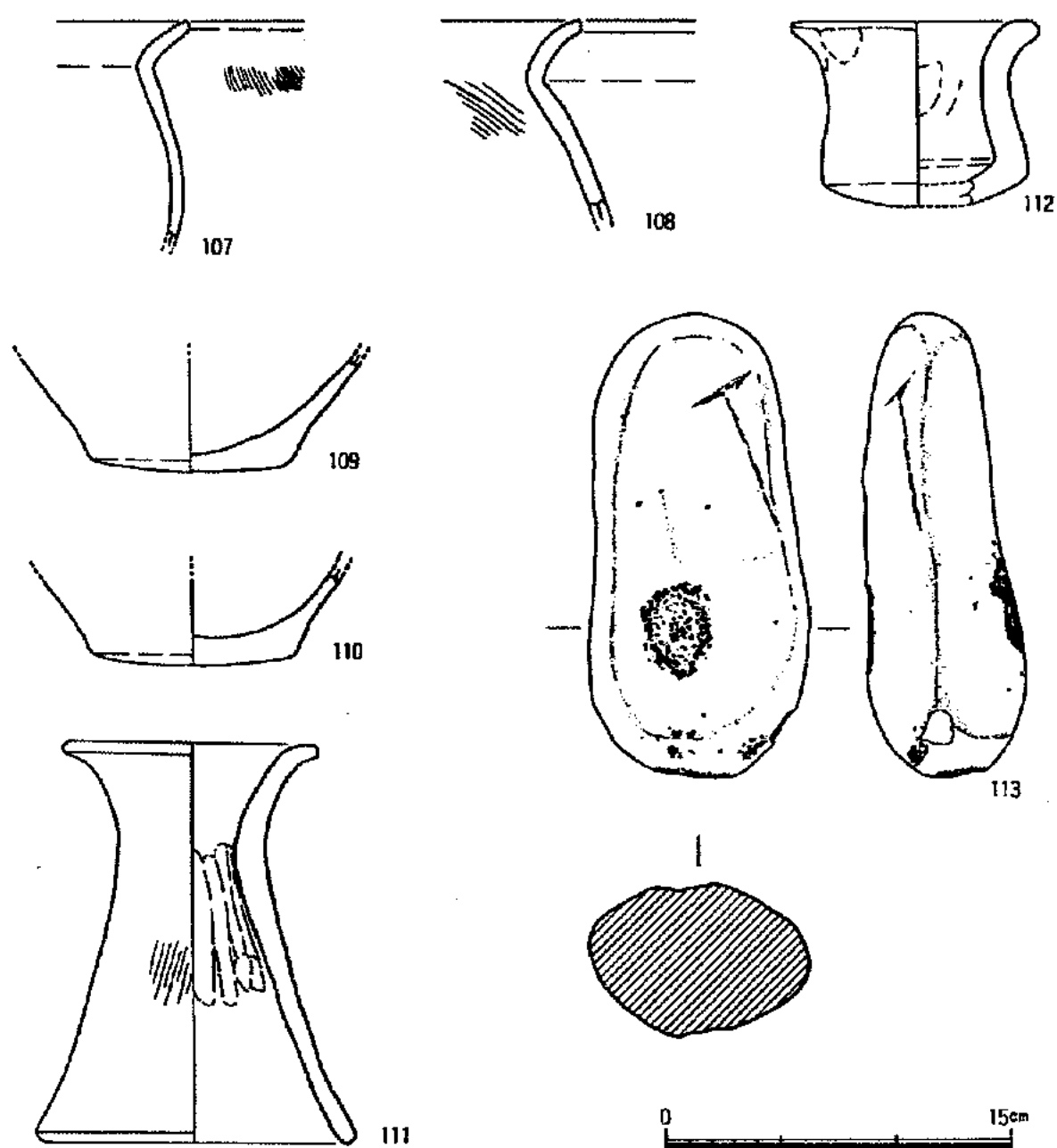
石器 (106) 硬質砂岩製の砥石である。4面を使用しており、断面半円形や楔状の荒い研ぎ痕が目立つ。中砥石として使用したものか。最大長16.3cm、重量約860 gを測る。

#### S B 22 (図版10、第37図)

S B 25の東側に位置し、S K 52に切られる住居跡である。北側の攪乱部は大きく掘りすぎてしまい北壁の立ち上がりを確認できなかったが、平面規模は長辺4.2mで、短辺は3.8mに復元でき、壁高は20cmを測る。平面形はほぼ方形で支柱穴は2本である。床面のほぼ中央部に炉跡が残り、その北側に作業台と考えられる偏平な石材が据え置かれている。また作業台とセットになると思われる敲石が出土している。南辺中央には屋内土坑を設けており、その東端に沿うように炭が残っているがその意味は不明である。



第37図 S B 22遺構実測図 (1/60)

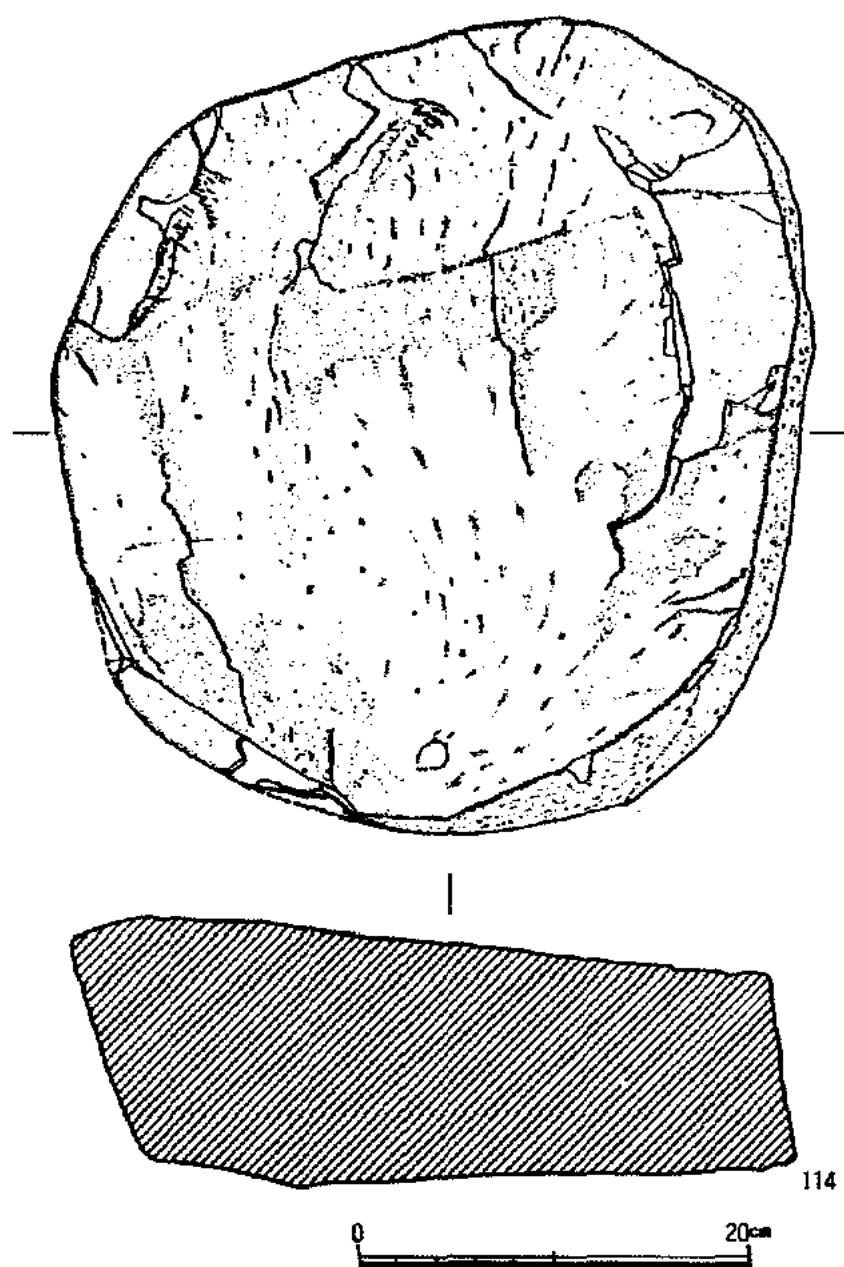


第38図 S B 22出土遺物実測図① (1/3)

出土遺物 (第38・39図)

弥生土器 (107～112) 107・108は甕の口縁部である。「く」字形に外反する。109・110は凸レンズ状平底の底部で、いずれも外面に2次焼成を受けており、風化が進んでいる。底径は109・110とも9.0cmを測る。

111は器台である。上下に大きく開き口縁部は強く外反する。調整は外面にハケ目痕が僅かに残り、内面は指押さえ及びナデを施す。口径11.3cm、器高17.4cm、底径14.2cmを測る。



第39図 S B22出土遺物実測図② (1/4)

112は手づくね風の作りの粗い鉢である。器壁は厚く主に指押えとナデによって仕上げている。色調は黄茶灰色を呈し、口径11.1cm、復元器高8.2cm、復元底径9.2cmを測る。

石器 (113・114) 113は敲石である。先端及び平坦面の両側に使用痕が残る。最大長19.2cm、最大幅9.2cm、重量約1.65kgを測る。

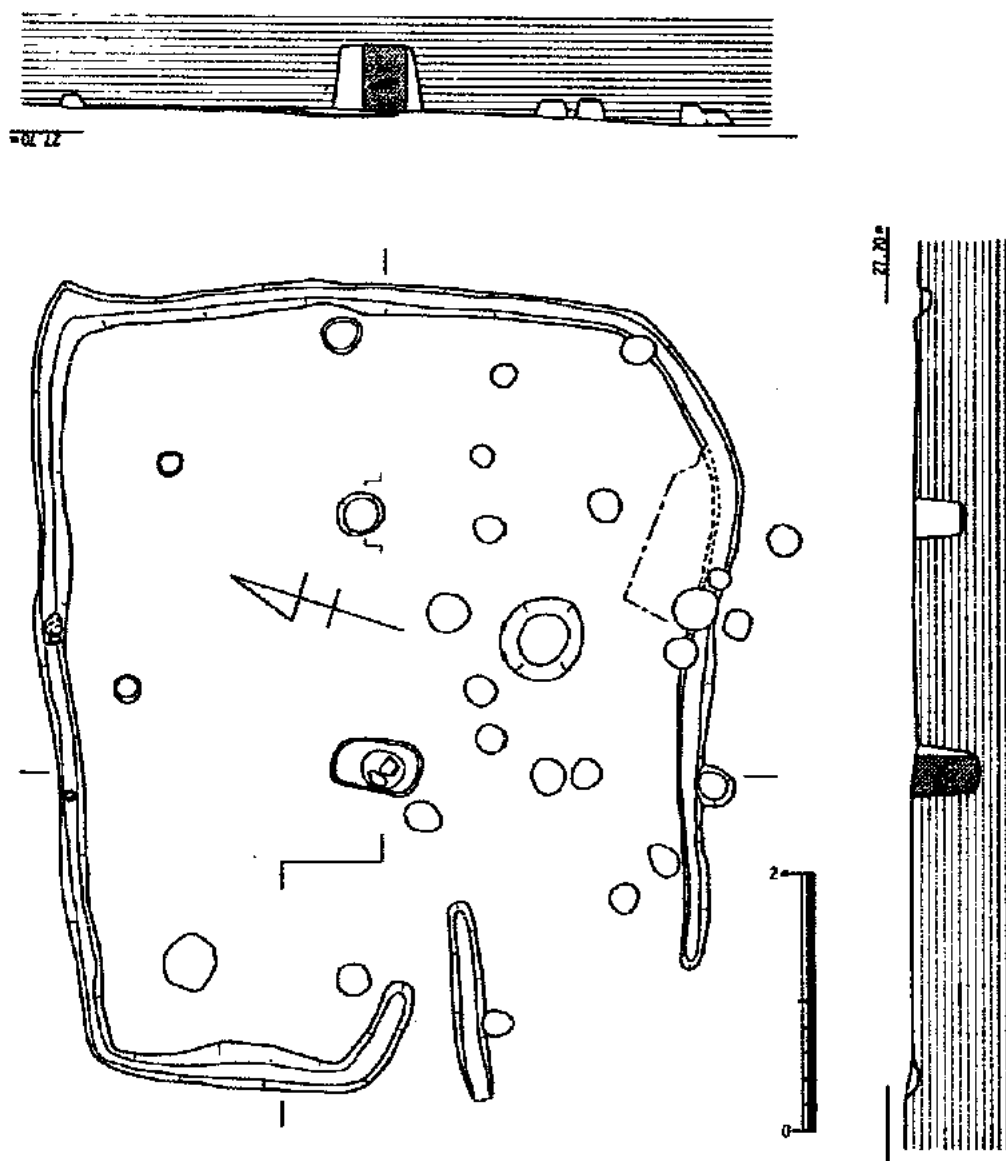
114はここでは作業台として報告する。上面は研磨及び敲打痕が残る、かなり使い込まれている。また側面の一部には火を受けて灰桃色に変色している。長径42.8cm、短径37.8cm、

重量約34kgを測る。

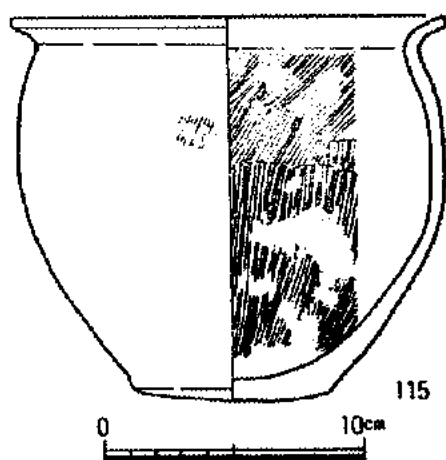
なお113・114はセット関係であろう。

#### S B 25 (図版11、第40図)

調査区の南、S B 26の東側に位置する。平面形は長方形を呈し、規模は東西6.35m、南北5.0mを測る。削平のため壁高は失われており、周壁溝によってその存在が確認された。西周壁溝が中程までで内側に折れているが壁面は巡っていたであろう。溝の巡らない部分が出入口となるものか。主柱穴は2本である。



第40図 S B 25遺構実測図 (1/60)



#### 出土遺物 (第41図)

弥生土器 (115) ほぼ完形の甕で周壁溝から出土した。凸レンズ状平底の底部を持ち、口縁部は「く」字形に強く外反して端部を断面方形に収める。調整は内面の上半を右上がりのハケ目、下半は縦方向のハケ目を施し、外面は風化が進んでいるが僅かにハケ目が残る。色調は桃茶灰色を呈し、口径17.2cm、器高15.0cm、底径9.8cmを測る。

第41図 S B 25出土遺物実測図 (1/3)

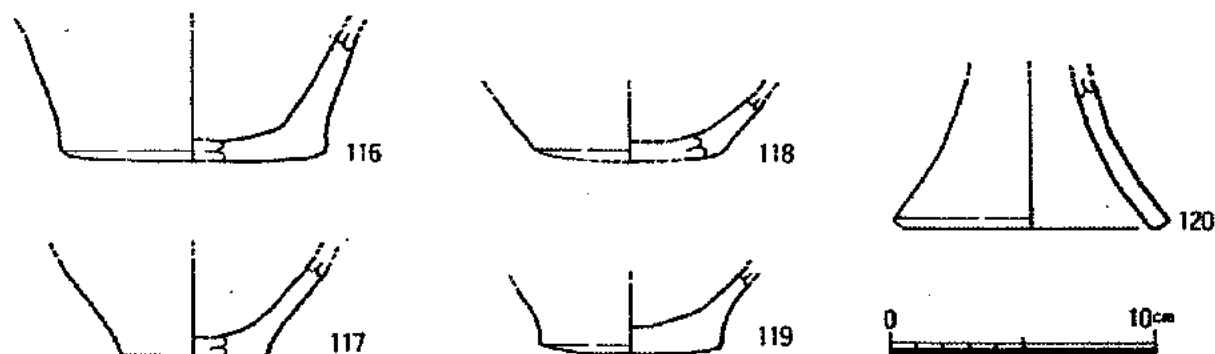
#### S B 26 (図版11、第43図)

調査区の南端中央に位置し、S B 67・S D 39に切られる住居跡である。平面規模は東西9.0m、南北は南辺が調査区外へと延びるため不明であるが、本遺跡中最大の規模である。削平のため壁高は失われており、周壁溝によってその存在が確認されたが、支柱穴、炉跡等については不詳である。残存状況は不良であるが構造的な特徴として、排水溝が北東角から低位である北へ向かって延びること、また北辺の西端では長さ50cmほど周壁溝が途切れており、出入り口の可能性を持つことが挙げられる。

出土遺物 (第42図) 出土遺物は少なく、判別可能なものはすべて弥生土器である。

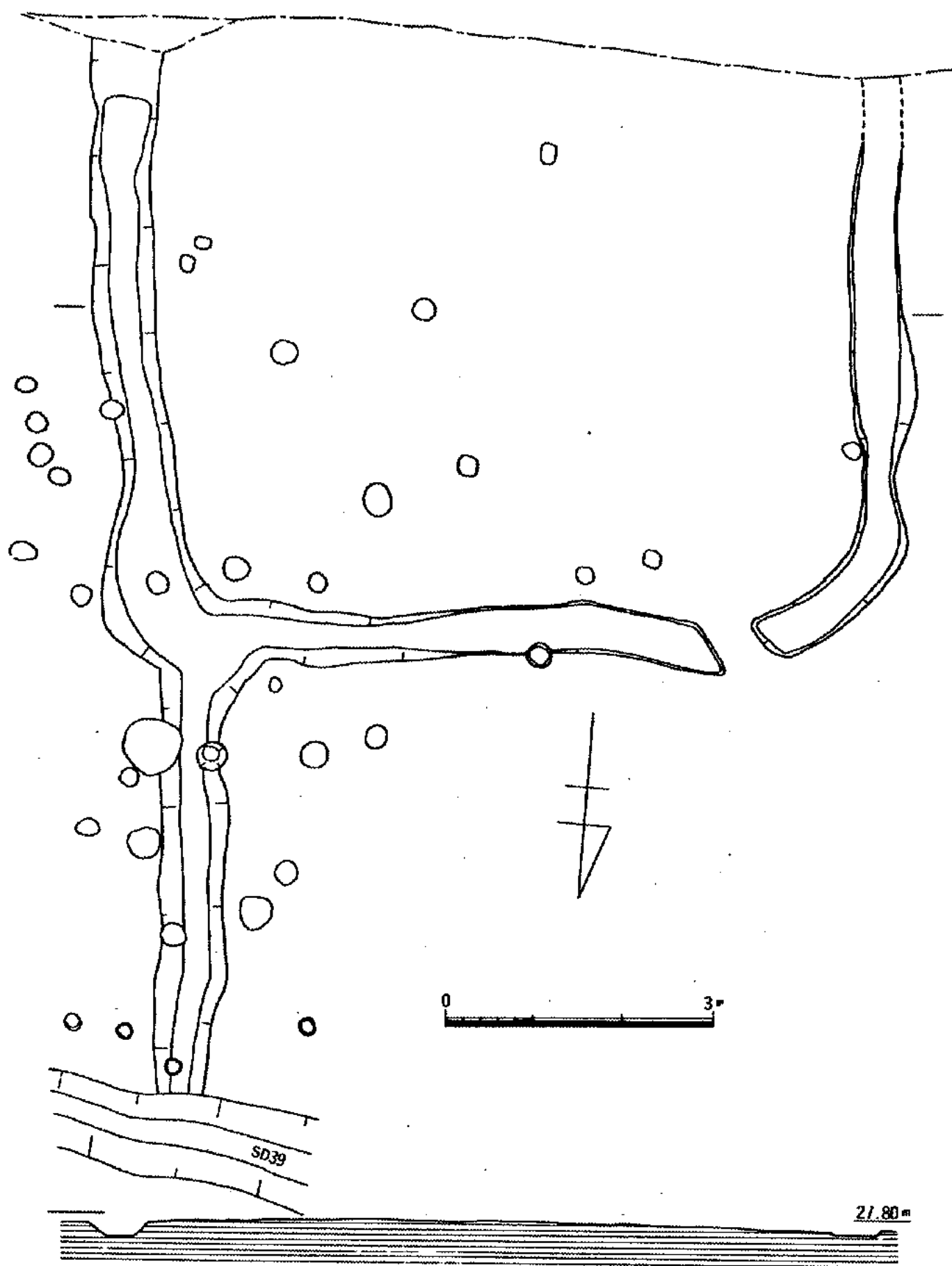
弥生土器 (116~120) 116~119は底部片である。117は平底だが他は僅かに突出する。復元底径は116が10.4cm、117は5.8cm、118は7.2cm、119は7.0cm。

120は器台である。底径10.6cmを測る。

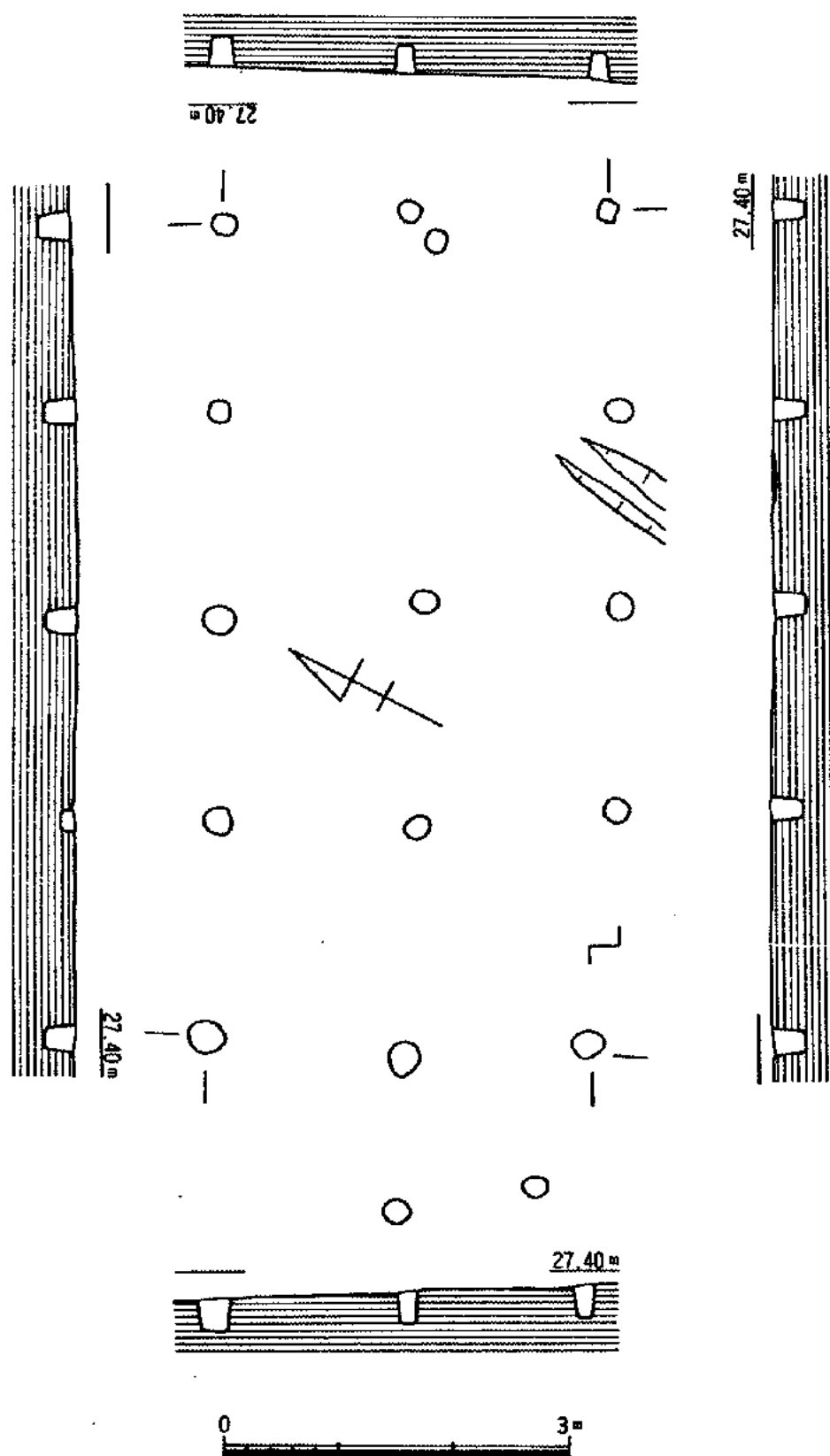


第42図 S B 26出土遺物実測図 (1/3)





第43図 SB26遺構実測図 (1/60)



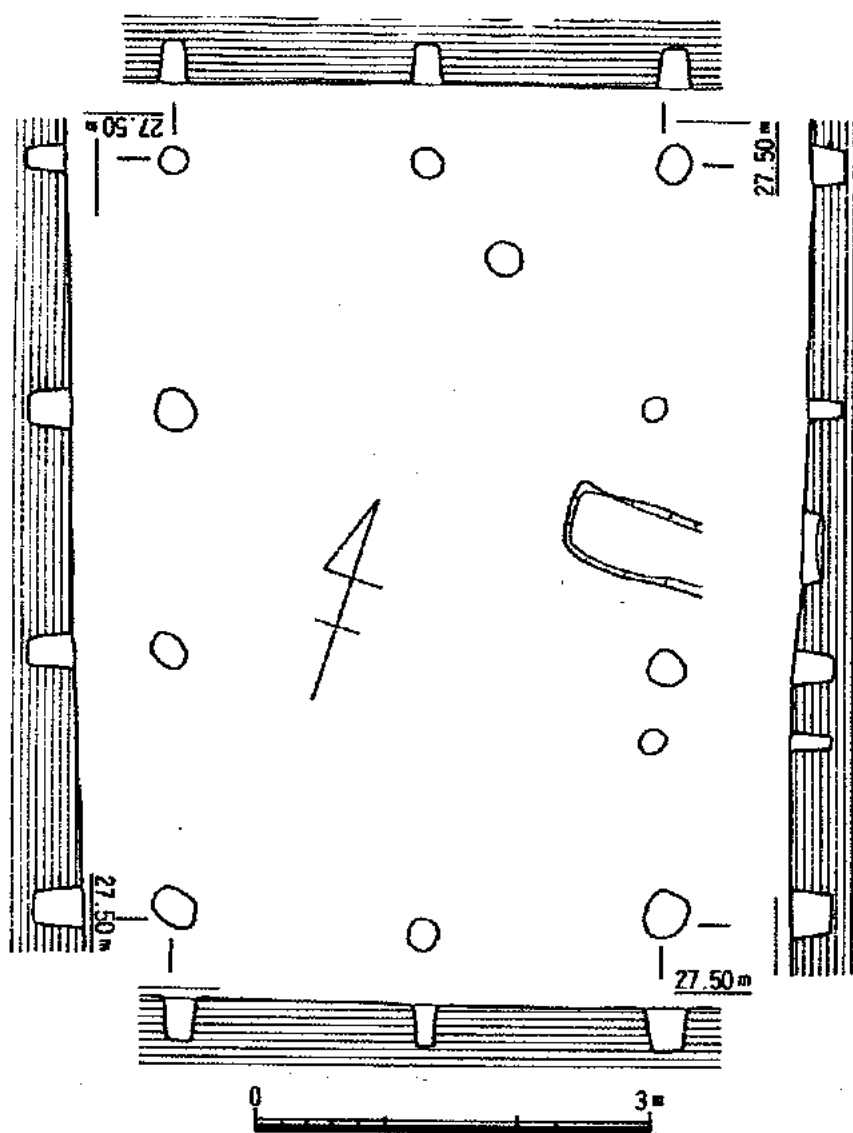
第44図 SB65遺構実測図 (1/60)

#### 4. 掘立柱建物跡

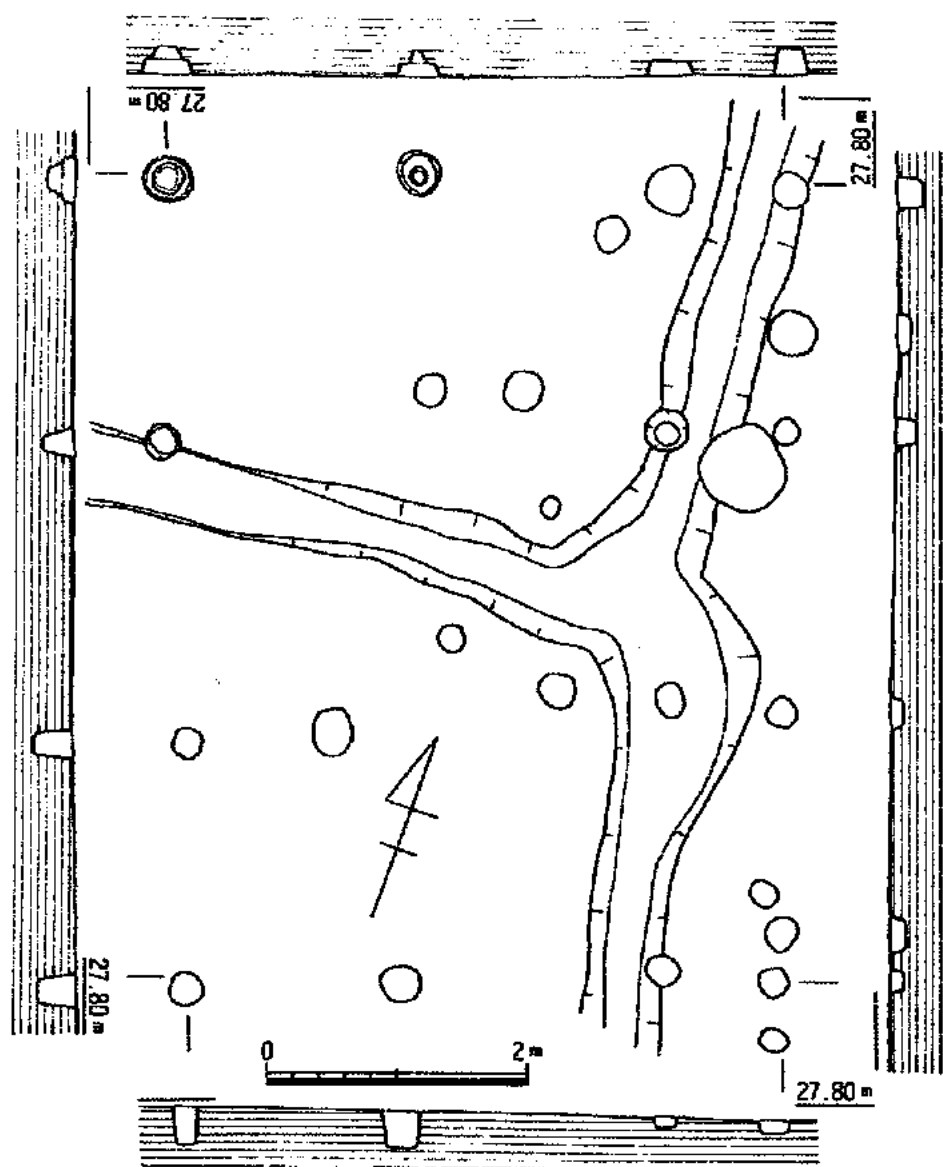
調査区全体でS B 65～68・74の5棟の掘立柱建物を検出した。

##### S B 65 (図版11、第44図)

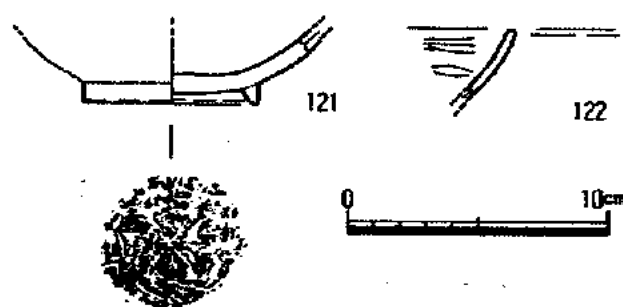
主軸方位をN-64°-Wに取り、S B 66と主軸方向がほぼ直交する。身舎は桁行4間、梁間2間の建物で、桁行750 (730) cm、梁間340cmを測る。柱根、根固め石は遺存せずその痕跡もない。



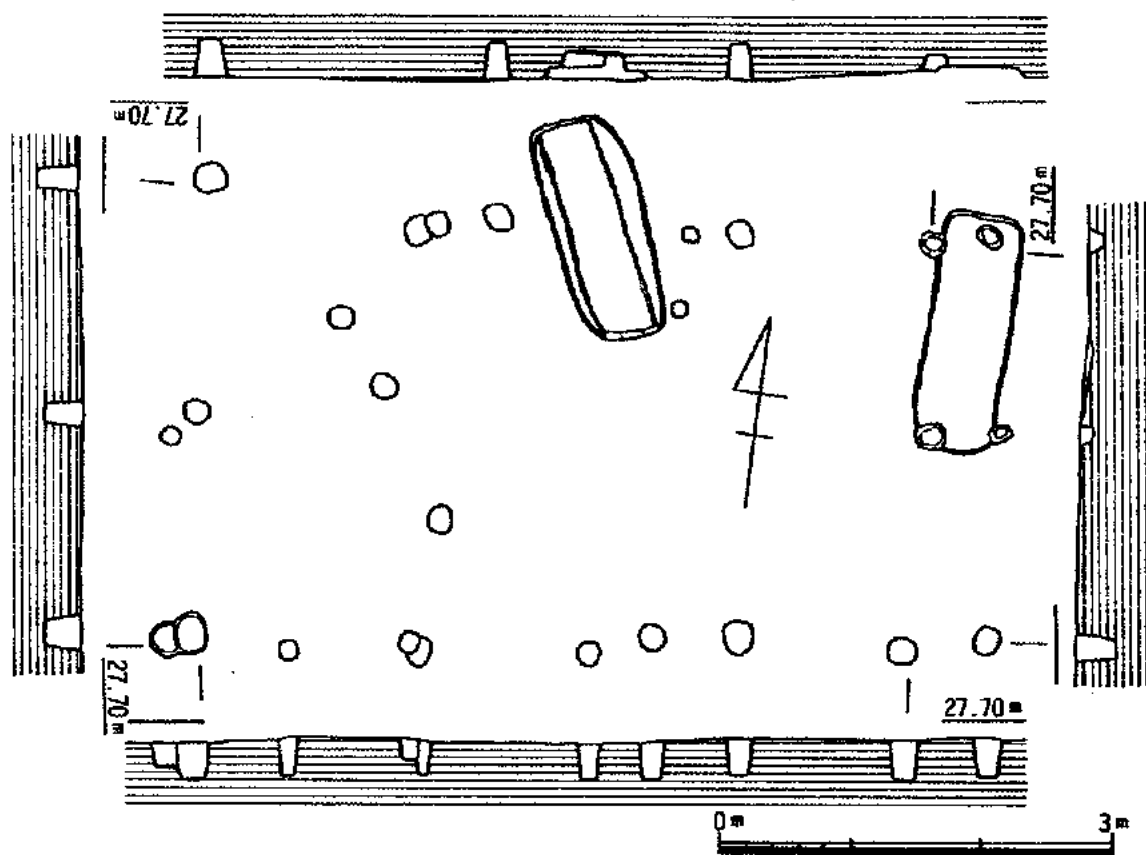
第45図 S B 66遺構実測図 (1/60)



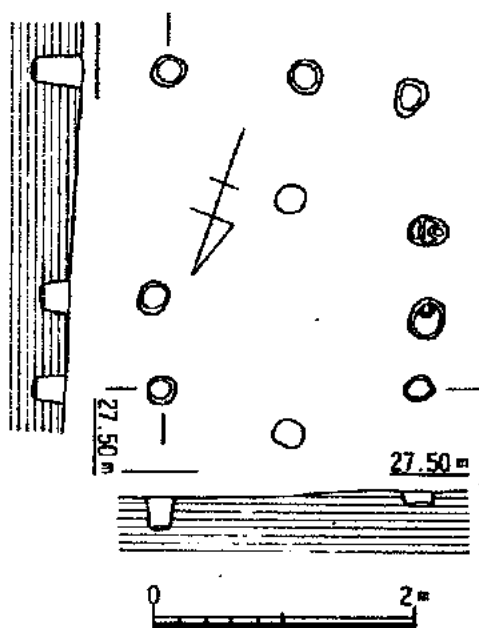
第46図 SB67遺構実測図 (1/60)



第47図 SB67出土遺物実測図 (1/3)



第48図 SB68遺構実測図 (1/60)



第49図 SB74遺構実測図 (1/60)

**SB66 (図版11、第45図)**

主軸方位をN-20°-Eに取り、SB65と主軸方向がほぼ直交し、SB67とは東面の柱筋が通る。身舎は桁行3間、梁間2間の建物である。規模は桁行585(580)cm、梁間380cmを測る。柱根は遺存せずその痕跡もない。

**SB67 (図版11、第46図)**

調査区の南端中程、SD39の南に位置し、SB26を切る。主軸方位はN-21°-Eに取り、SB66とは東面の柱筋が通る。身舎は桁行3間、梁間2間で東面には廂が付く建物である。規模は桁行620cm、梁間395(365)cm、廂まで含めて480(460)cmを測る。

出土遺物 (第47図) 柱穴からの出土遺物である。

黒色土器 (121) いわゆる黒色土器A類の碗底部である。高台は貼り付けで、外底部にはかすかだが「X」のヘラ記号を施している。風化が進んでおり外面は調整不明だが、内面には丁寧なヘラ研磨が観察できる。胎土は緻密で微細な砂粒を含み、露胎部の色調は淡橙色を呈する。底径6.9cm。

瓦器 (122) 碗の口縁部片である。内外面にはヘラ研磨を施し、胎土は緻密で色調は銀味を帯びた暗灰色を呈する。

#### S B 68 (図版11、第48図)

S D 39の南に位置し、S K 55・56を切る。主軸方位をN-82°-Wに取り、身舎は桁行3間、梁間2間の建物である。規模は桁行555 (540) cm、梁間360 (320) cmを測り、平面形はやや歪んでいる。柱根は遺存せずその痕跡もない。

#### S B 74 (第49図)

調査終了後に通構配置図を検討する中で確認した。調査区の東端中程に位置し、主軸方位をN-20°-Eに取り、身舎は桁行1間、梁間1間で北面には廂が付く建物である。規模は桁行180cm、梁間175cm (廂部まで含めて240cm) を測る。柱根は遺存せずその痕跡もない。

### 5. 大溝 (第50図)

古代末期から中世前半期にかけての大溝で、S D 13・14・15・34・39・41・50によって構成される。溝相互間の切り合い関係は、S D 14がS D 13の拡幅であることが確認できたが他には認められなかった。また覆土は黒褐色土層でほとんど分層することができない。

#### S D 13 (第51図)

S D 14によって拡幅されているが、明確な切り合い関係を土層断面でしか確認できなかったため、かなりS D 14の遺物が混入していると思われる。

#### 出土遺物 (第52・53図)

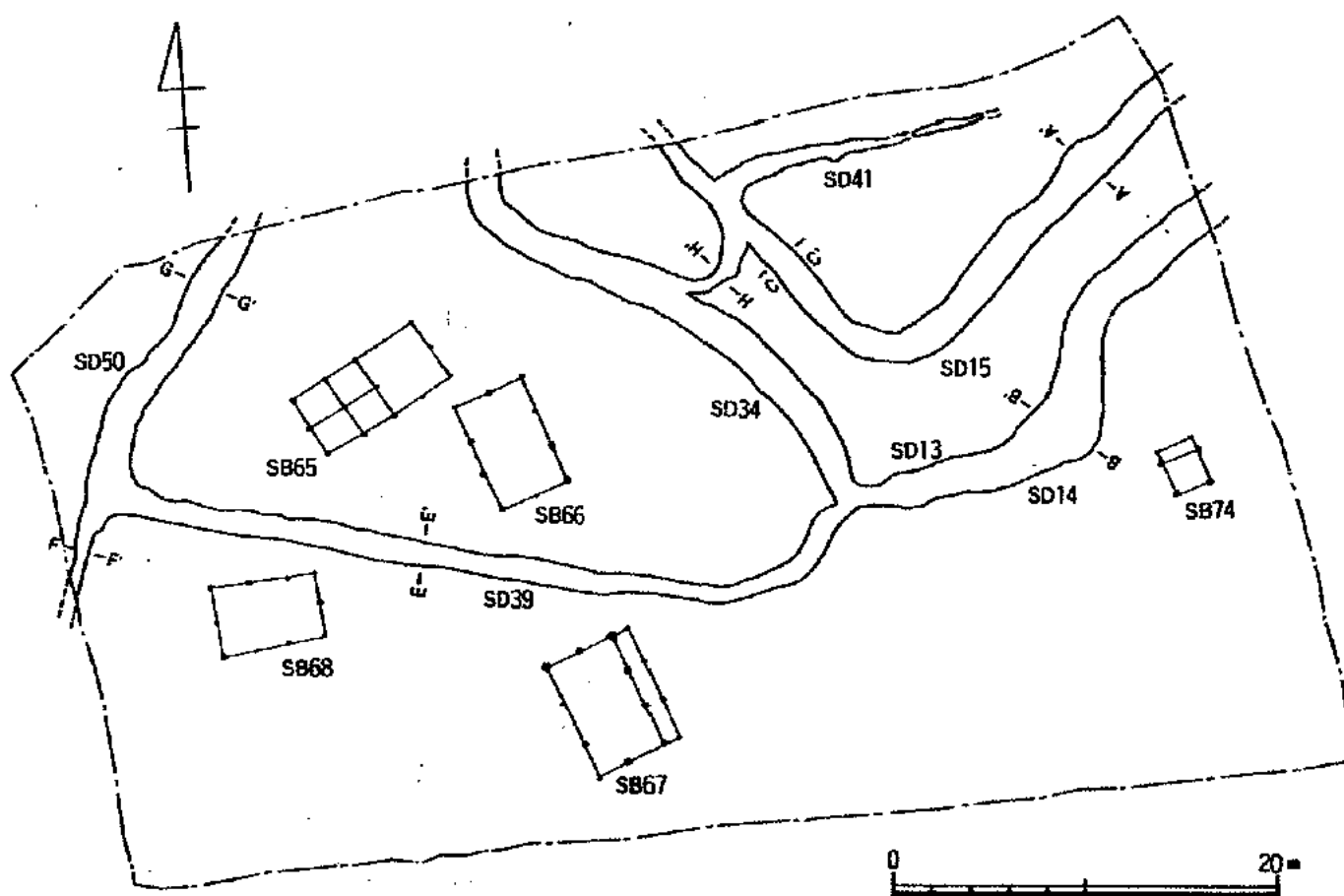
土師器 (123~125) 123・124は小皿、125は坏である。123は復元口径7.1cm、器高1.8cm、復元底径5.3cmを測る。124は糸切りの底部である。125は淡灰色を呈し、瓦質に近い焼成である。復元口径12.2cmを測る。

瓦器 (126~132) 126~128は口縁部小片。129~132は底部片である。129は貼り付け高台

で内面は丁寧な研磨、外面は横ナデでほとんど研磨されていない。色調は暗灰色で焼成は良好、胎土は緻密で微細な砂粒を僅かに含む。復元底径6.8cm。130は貼り付け高台で、底部の切り離しは糸切りである。風化が進んでいるが内底部の調整は研磨である。色調は白灰色を呈し焼成不良、復元底径6.4cmを測る。

瓦質陶器 (133) 鉢の口縁部片である。色調は白灰色を呈し胎土には若干の砂粒を含み堅緻である。

青磁 (134~137) 134は鎗連弁を持つ龍泉窯系碗Ⅰ-5・b類の口縁部片である。136は碗の底部である。高台は削りだして断面逆台形を呈する。内面のみについた水色の釉を施し、見込みにはドーナツ形の目跡が残る。また畳付にも目跡を掻き落とした痕跡が残る。底径6.8cmを測る。137は碗の底部片であろう。底部と体部の境があまり明瞭でなく、作りも雑である。全面施釉を行っており、畳付け部及び見込みには4箇所の目跡が残る。釉調は灰色がかったブルーに発色し、胎土はやや粗く砂粒を多く含んでいる。底部は完存し、底径4.0cmを測る。



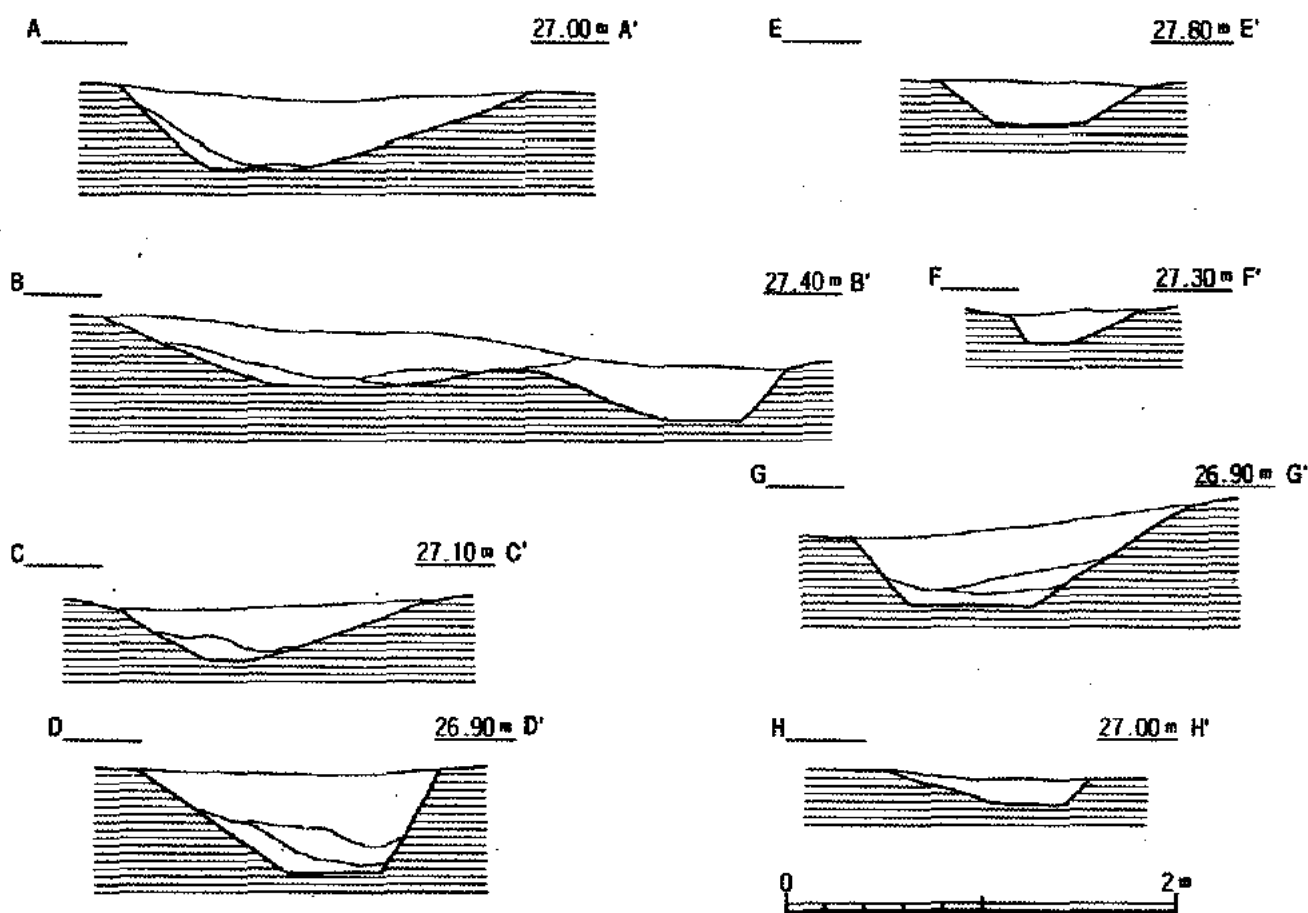
第50図 大溝及び掘立柱建物配置図 (1/400)

白磁 (138~145) 138・139は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。140・141は白磁碗Ⅴ類の口縁部である。142は白磁碗Ⅴ類の底部である。復元底径5.8cmを測る。143・144は白磁碗Ⅳ類の底部である。143は復元底径6.6cm、144は6.7cmを測る。145の高台は削りだして断面逆台形を呈する。内面に薄く施釉されており、艶のない汚れた白灰色を呈する。底径5.4cmを測る。

褐釉陶器 (146) 壺の口縁部片である。釉調は艶のない黄灰色で胎土はやや粗く、復元口径10.2cmを測る。口縁部上面には目跡が2箇所残り、復元すると4ヶ所となろう。

天目茶碗 (147) 底部は削り出しの平底で体部は直状気味に立ち上がり、端部は段をもって内側に肥厚する。釉調は柿茶色で体部下半及び外底部には施釉されない。胎土は微細な砂粒を含むが比較的精良で露胎部は黄灰色を呈する。復元口径10.6cm、器高5.9cm、復元底径3.2cmを測る。

滑石製石鍋 (148~150) 148は長方形の把手が縦に付くタイプである。外面はノミ痕が明瞭に残り、口縁部上面から内面にかけては丁寧な研磨を行っている。



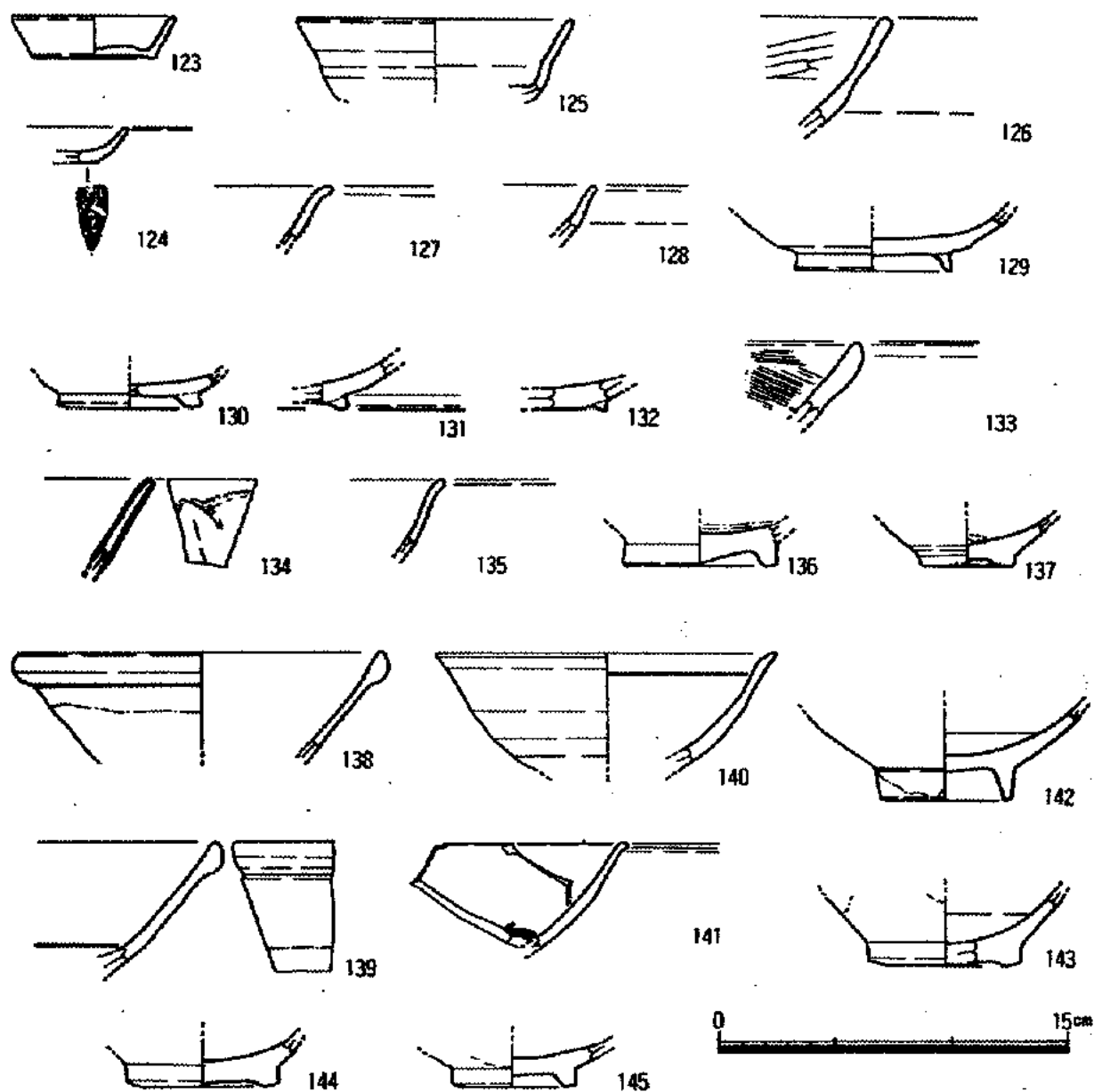
第51図 大溝 (S D 13~15・34・39・41) 断面実測図 (1/40)



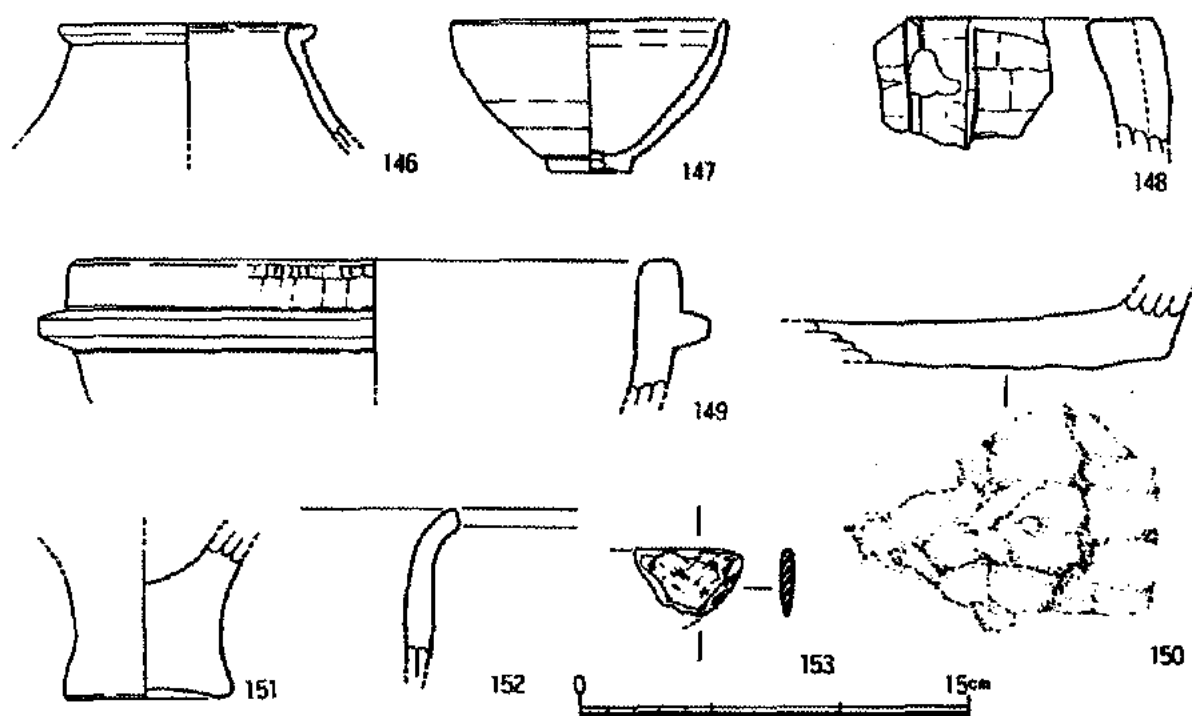
149は口縁部直下に鋳の付くタイプである。外面はノミ痕が明瞭に残り、口縁部上面から内面にかけては丁寧な研磨を行っている。また外面には煤が付着が著しい。復元口径23.8cmを測る。150は底部片である。外面はノミ痕が明瞭に残りまた煤が付着が著しく、内面はノミ削りの後丁寧な研磨を行っている。

その他の遺物（151～153） すべて混入品である。

151は厚底の弥生土器甕の底部である。152は緩い如意形口縁の弥生土器甕である。153は石包丁の端部片である。



第52図 S D 13出土遺物実測図① (1/3)



第53図 S D 13出土遺物実測図② (1/3)

#### S D 14 (第51図)

S D 13の拡幅部分でS D 34・39と連接する。底面はS D 13より20cmほど高いレベルで掘り終えており、本流に接合する部分では明瞭な段が残っている。

#### 出土遺物 (第54図)

土師器 (154) 小皿である。偏平でほとんど立ち上がりを持たない。

白磁 (155・156) 155・156は白磁碗Ⅳ類の底部であろう。155は底径7.0cm、156は7.1cm

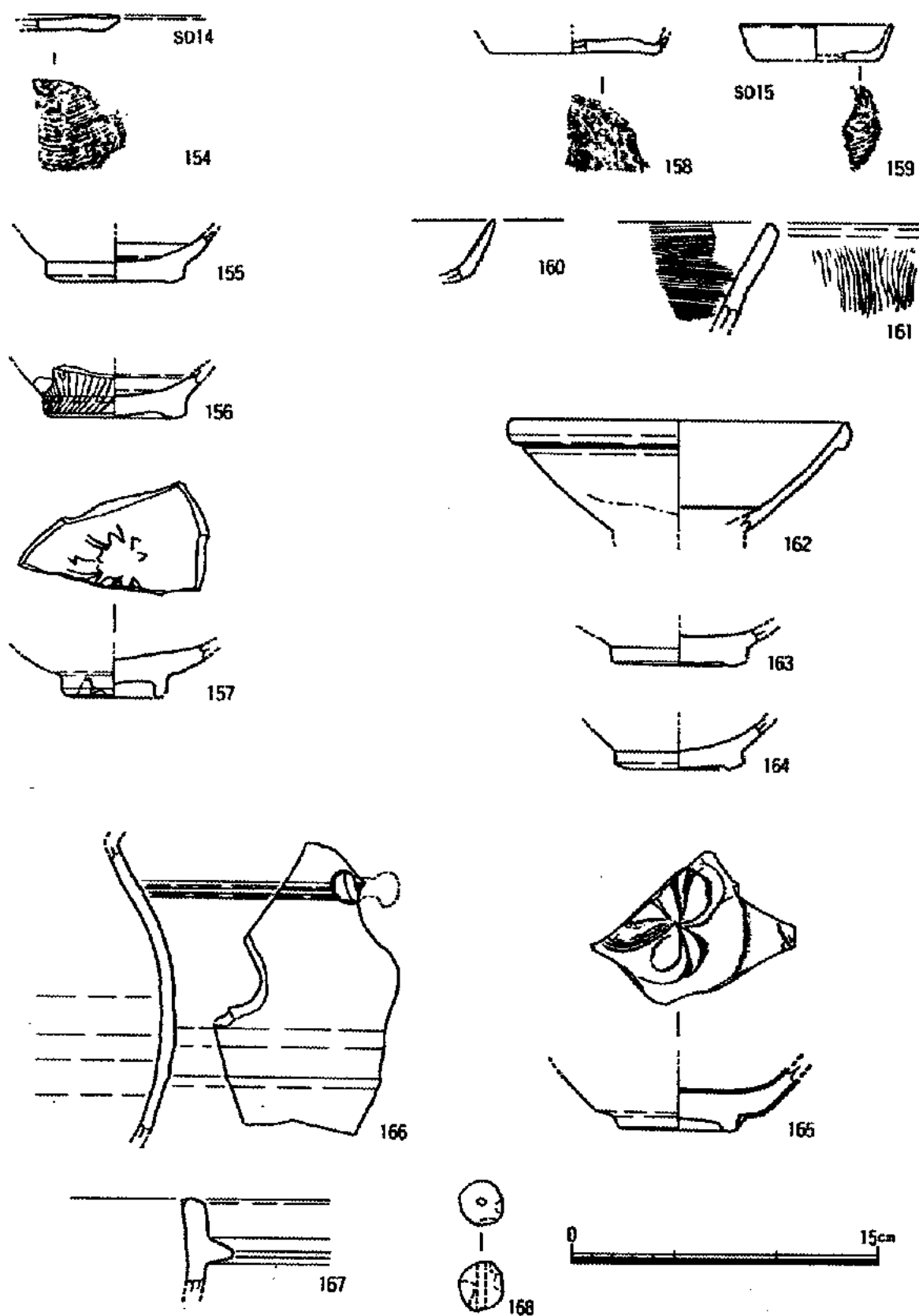
青磁 (157) 碗の底部片である。高台は削り出しで外端を斜めに面取りしている。釉調は淡緑色で畳付きと高台内面には施釉されない。胎土は微細な砂粒を含むが比較的精良で露胎部は淡青灰色を呈する。見込みには花文のスタンプが施されるが、その意匠は不明瞭である。復元底径5.3cmを測る。

#### S D 15 (第51図)

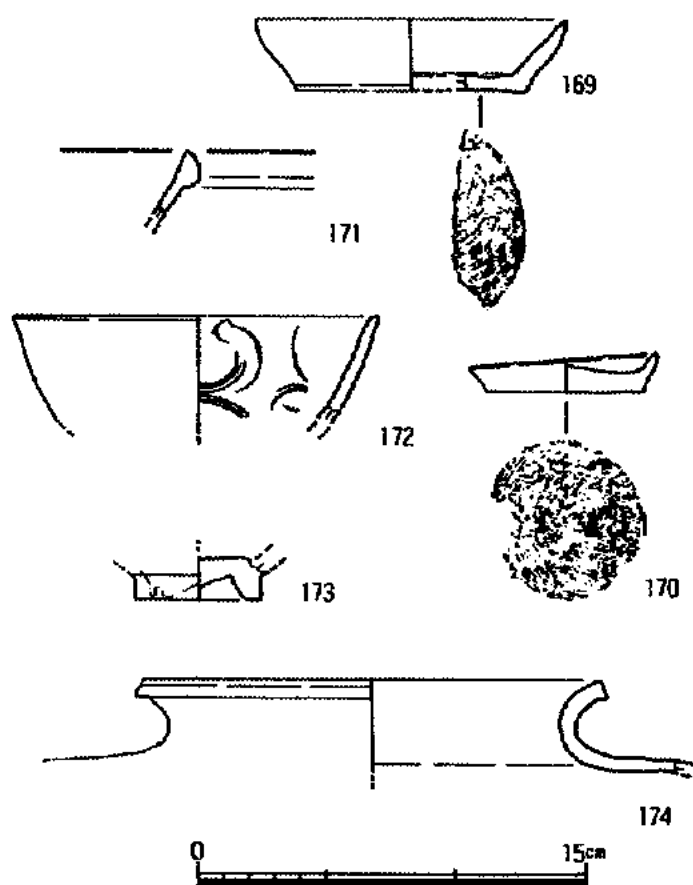
L字型に屈曲しており、S D 14・34に平行するように走向する。単独で区画を形成するのか、あるいは並走する溝に接続するのかは現状では明らかにできない。

#### 出土遺物 (第54図)

土師器 (158～160) 158・159は糸切り底の小皿、160は坏の口縁部片である。158は復元底径8.6cm、159は復元口径7.8cm、器高1.8cm、復元底径6.2cmを測る。



第54図 S D 14・15出土遺物実測図 (1/3)



第55図 S D34出土遺物実測図 (1/3)

瓦質陶器 (161) 鉢の口縁部小片である。

白磁 (162~164) 162は白磁碗Ⅳ-1・a類である。釉調は僅かに緑味を帯びた灰白色を呈し、復元口径16.8cmを測る。163・164は白磁碗Ⅳ類の底部であろう。163は釉調がやや青みがかった灰色を呈し底径6.8cm、164は釉調が灰白色を呈し復元底径6.4cmを測る。

青磁 (165) 龍泉窯系統Ⅰ-2類の底部である。底径6.0cmを測る。

褐釉陶器 (166) 四耳壺あるいは双耳壺の胴部片で、耳部には2条の沈線を施し胴部下位にはあまい稜を作る。釉調は艶のない黄茶褐色を呈し、胎土は細かな砂粒を含むが比較的精良である。

滑石製石鍋 (167) 口縁部直下に鑄の付くタイプ出ある。内外面ともノミ削りの後丁寧な研磨を行っている。また外面には煤が付着が著しい。

土玉 (168) 外面には指頭痕が微かに残り、長径2.4cm、短径2.2cmを測る。

#### S D34 (第51図)

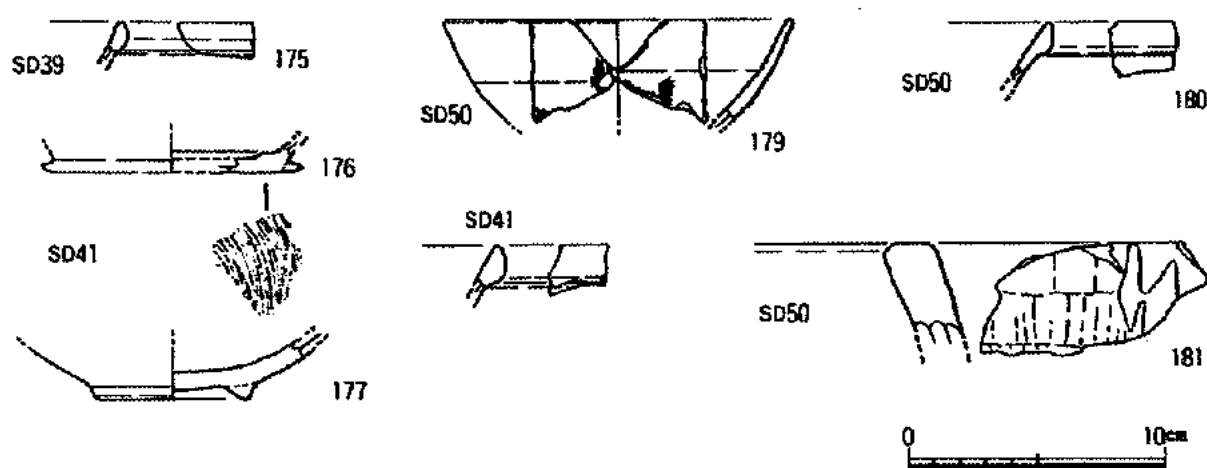
S D14・39・41に接続する。緩やかにカーブしながら北西向に走向し、調査区境付近で北へと屈曲しており、S D50と接続する可能性がある。

#### 出土遺物 (第55図)

土師器 (169・170) 169は坏である。底部の切り離しは糸切りで、復元口径12.2cm、器高2.8cm、復元底径9.0cmを測る。170はほぼ完形品の小皿である。底部の切り離しは糸切りで、口径7.5cm、器高1.6cm、底径6.4cmを測る。

白磁 (171) 白磁碗Ⅳ類の口縁部片である。

青磁 (172・173) 底部を欠くが龍泉窯系統Ⅰ-2・a類である。復元口径14.4cmを測る。



第56図 S D 39・41・50出土遺物実測図 (1/3)

須恵器 (174) 甕の口縁部片である。肩部は水平に近く、口縁部は強く外反し、調整は全て横ナデである。復元口径18.0cm。

#### S D 39 (第51図)

中央付近が最も高位で東西方向に走向しており、S D 50とは直角に接合し、東端では緩やかに屈曲してS D 14・34に接続する。

#### 出土遺物 (第56図)

白磁 (175) 碗の口縁部小片で、あまり発達しない玉縁である。

この他には図化し得なかったが土師器の糸切り底部片などがある。

#### S D 41 (第51図)

S D 15・34と接続し切り合い関係は認められなかったが、大溝埋没前に付設されたものであろう。

#### 出土遺物 (第56図)

土師器 (176) 坏の底部片である。底部の切り離しは糸切りで粘土が横にはみ出している。復元底径は8.6cmを測る。

瓦器 (177) 碗の底部である。高台は張り付けで断面三角形を呈する。焼成不良で軟質だが、2次焼成を受けているようである。胎土には微細な砂粒を若干含み、色調は灰桃色である。復元底径6.0cmを測る。

白磁 (178) 碗の口縁部小片で、玉縁である。

SD50 (第50図)

北東へほぼ直状に走向し、SD39と接続する。

出土遺物 (第56図)

青磁 (179) 同安窯系青磁碗Ⅰ-1・b類である。釉調は透明感のある灰緑色で復元口径13.6cmを測る。

白磁 (180) 碗の口縁部小片で、玉縁である。釉調は灰白色を呈する。

滑石製石鍋 (181) 外面はノミ削りが明瞭に残り、口縁部上端から内面にかけては研磨である。

## 6. その他の遺構・遺物

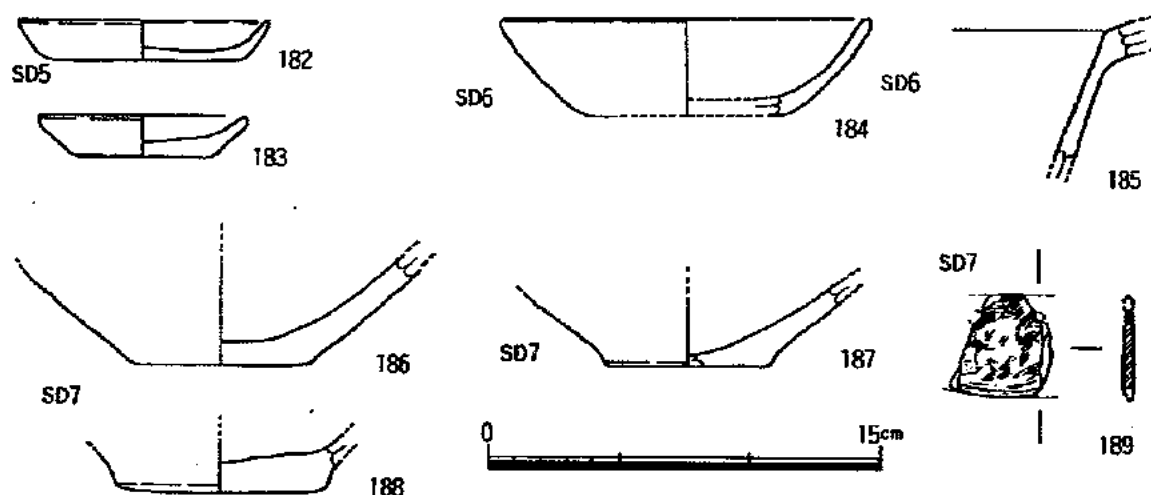
### I) 溝状遺構

SD5 (第3図)

調査区の南東部で検出した。ほぼ南北に直状に延び、北端をSD17に切られている。

出土遺物 (第57図)

土師器 (182・183) 182・183とも小皿である。いずれも風化が進んでおり底部の切り離しは不明である。182は復元口径10.0cm、器高1.5cm、復元底径7.6cmを測る。183は復元口径8.2cm、器高1.6cm、復元底径7.0cmを測る。他には図化し得なかったが瓦器の小片がある。



第57図 SD5・6・7出土遺物実測図 (1/3)

### SD6 (第3図)

調査区の南東部で検出した。先後関係はSK47→SK46→SD6となる。

#### 出土遺物 (第57図)

土師器 (184・185) 184は坏である。底部の切り離しは糸切りで、復元口径14.4cm、器高3.7cm、復元底径8.0cmを測る。

184は鍋の口縁部片であろう。体部は薄い口縁部は内面に稜を持って屈曲し端部を肥厚させる。胎土はやや粗く、砂粒および赤褐色粒を含み、色調は黒褐色で煤が付着している。

### SD7 (第3図)

調査区南東部で検出した。南北に直状に延び、SK61・SD21を切っている。

#### 出土遺物 (第57図)

須恵質陶器 (186) 鉢の底部であろう。色調は灰褐色で、胎土はやや粗く砂粒を含む。復元底径6.6cmを測る。

弥生土器 (187・188) 185は壺の底部である。薄底で復元底径6.6cmを測る。186はやや突出気味の底部である。復元底径8.4cm。

石器 (189) 石包丁の中央部片である。両端に穿孔が残る。

### SD17 (第3図)

調査区の南東部で検出した。東西に直状に延び先後関係はSD5→SD17→SD4となる。

#### 出土遺物 (第58図)

瓦器 (190) 底部を欠くが碗である。口縁端部はヘラ削りで断面方形に収め、調整は外面が雑なヘラ研磨、内面は比較的丁寧なヘラ研磨を施す。色調は暗灰色を呈し胎土は微細な砂粒を含むが比較的良好である。復元口径15.0cmを測るが小片であるため疑問が残る。

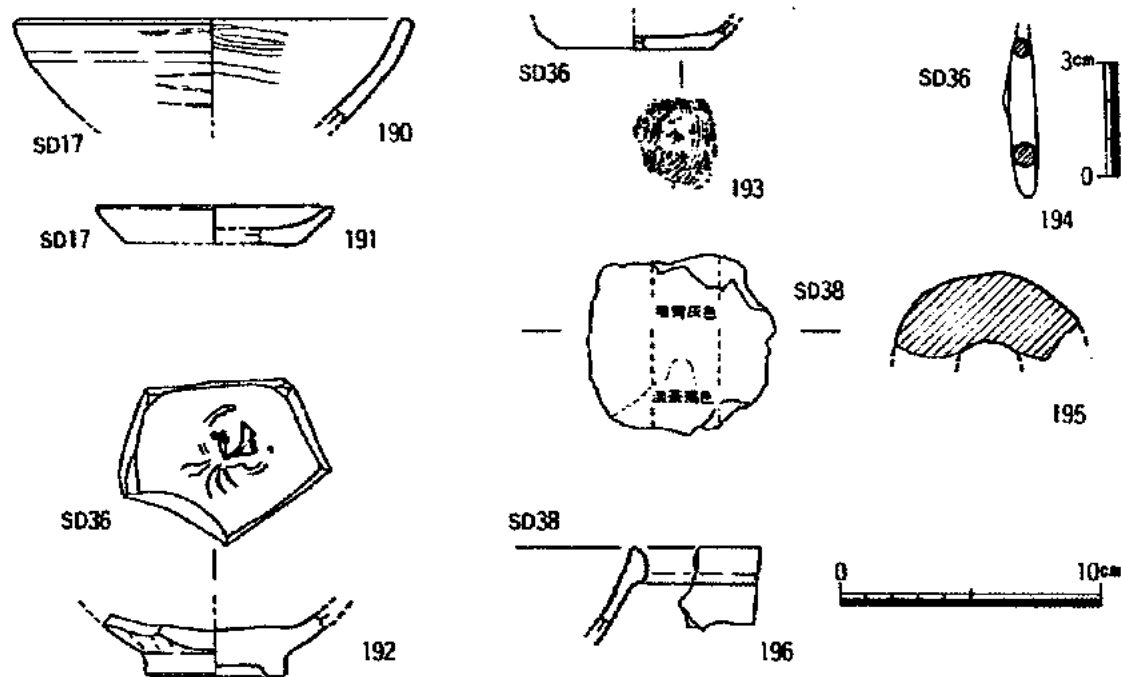
土師器 (191) 小皿である。底部の切り離しは糸切りで、復元口径9.3cm、器高1.4cm、復元底径7.0cmを測る。

### SD36 (第3図)

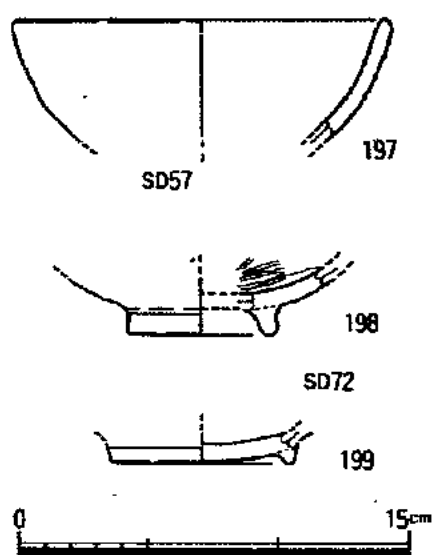
調査区の東部で検出した。大溝SD14・34・39の接続部及びSK54を切る。

#### 出土遺物 (第58図)

青磁 (192) 龍泉窯系碗Ⅰ-5・c類の底部である。外面は鎔を施し、見込みに花文様をスタンプする。釉調は灰味を帯びた緑色で、畳付およびその内面は無釉である。底径5.5cmを測る。



第58図 SD 17・36・38出土遺物実測図 (1/3・1/2)



第59図 SD 57・72  
出土遺物実測図 (1/3)

土師器 (193) 小皿の底部片である。底部の切り離しは糸切りで、復元底径6.0cmを測る。

鉄器 (194) 残存長は4.2cm、直径は0.4～0.6cmを測り、現状では用途不明である。

#### SD 38 (第3図)

調査区の南東部で検出した。SD 14に切られる。

#### 出土遺物 (第58図)

白磁 (196) 碗の口縁部小片で、玉縁である。

縄羽口 (195) 胎土は白色砂粒を多く含み、色調は外面が強い2次焼成を受けているため青灰褐色、内面は橙色を呈する。

#### SD 57 (第3図)

調査区の北東部で検出した。東西にクランク状に延び、SK 37を切る。SD 41とは接続する可能性が高い。



出土遺物（第59図） このほかに碗形鉄滓が出土している。（図版15）

瓦器（197） 底部を欠くが碗である。焼成は甘く、色調は淡茶灰色を呈する。調整は風化が進んでいるため不明瞭であるが、外面には研磨痕が僅かに残る。復元口径15.0cm。

#### S D 72（第3図）

調査区の北東部で検出した。東西に延び、S K 10を切る。

出土遺物（第59図）

瓦器（198・199） 198は比較的高い貼り付けの高台を持ち、内面は丁寧な研磨、外面は横ナデを施す。胎土は精良、緻密で色調は暗灰色を呈する。復元底径6.0cm。199は焼成不良のため風化が著しい。復元底径7.2cm。

## Ⅱ）柱穴出土遺物

#### S P 205（第3図）

調査区のほぼ中央部、S D 39の北側で検出した。

出土遺物（第60図）

瓦器（200） 断面三角形に近い貼り付け高台を持ち、体部は中程で屈曲して立ち上がり口縁部を僅かに外反させる。内面は丁寧なヘラ研磨、外面は中位以上に研磨を施す。胎土は微細な砂粒を含むが精良で、色調は暗灰色を呈する。復元口径15.4cm、器高6.0cm、復元底径7.0cmを測る。

#### S P 221（第3図）

調査区のほぼ中央部、S B 66の東側で検出した。

出土遺物（第60図）

須恵器（201・202） 201・202は接点はないが同一個体であろう。外面には縄席文叩きを施し、内面は当て具痕を丁寧にナデ消している。胎土は微細な砂粒を含むが精良で、色調は暗灰色、断面は淡小豆色を呈する。

#### S P 299（第3図）

調査区の北東部、S D 34の東側で検出した。石包丁が2枚重なった状態で出土している。

出土遺物（第60図）

石包丁（203・204） 輝緑凝灰岩質でいずれもかなり使い込まれている。203は長さ10.2cm、

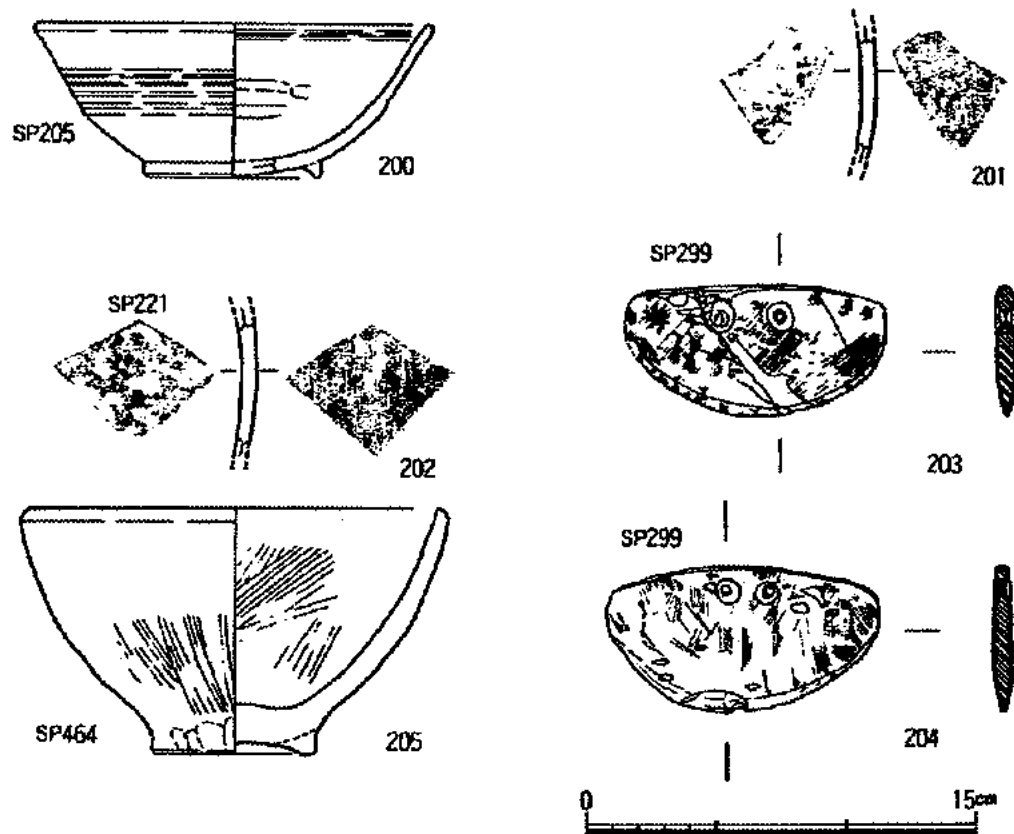
幅5.0cm、204は長さ10.7cm、幅5.6cmを測る。

# S P 464 (第3図)

調査区の南東部、S B 22の南側で検出した。

## 出土遺物 (第60図)

弥生土器 (205) 鉢の2分の1片である。底部はやや上げ底で体部は内湾しながら立ち上がり、口縁は端部外面に面を持って収める。調整は内面が粗い斜および縦方向のハケ目の後ナデ、外面は縦方向のハケ目を行い、外底部の接合部付近は指抑えを施す。外面には僅かに赤色顔料が残存する。復元口径16.0cm、器高9.5cm、底径6.6cmを測る。



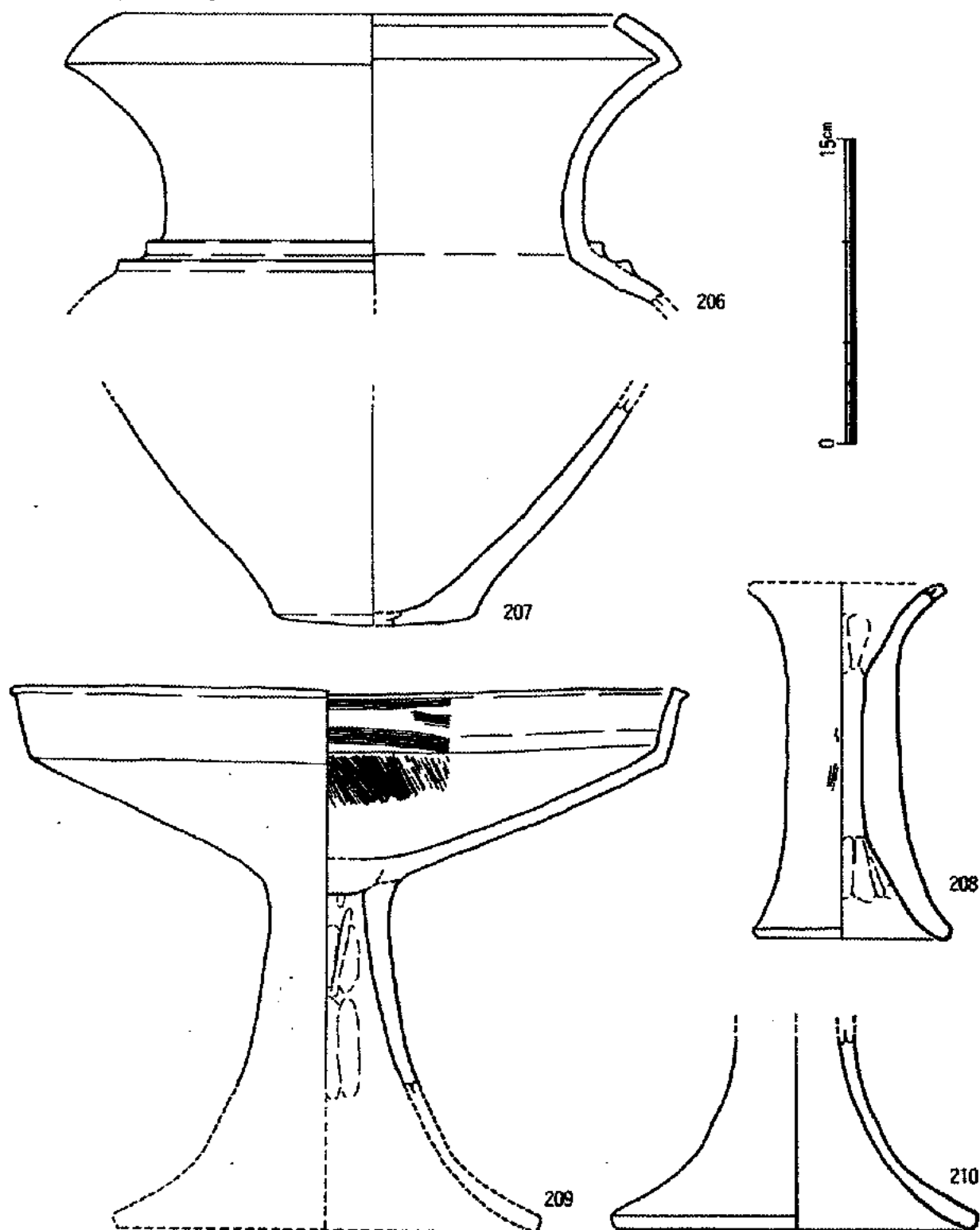
第60図 S P 205・221・299・464出土遺物実測図 (1/3)

### Ⅲ) 包含層出土遺物

調査区の西端緩斜面上に、弥生後期中頃を中心とする包含層が堆積している。

#### 出土遺物 (第61図)

弥生土器 (206~210) 206は複合口縁の壺、復元口径24.8cm。207は206と同一個体、底径10.0cm。208は器台、底径9.2cm。209は丹塗の高坏、口径33.3cm。210は209と同一個体であろう。復元底径17.2cm。



第61図 包含層出土遺物実測図 (1/3)

### 第3章 ま と め

ここでは主な遺構・遺物について整理し、不十分ながらもまとめとしたい。

#### 1) 弥生時代

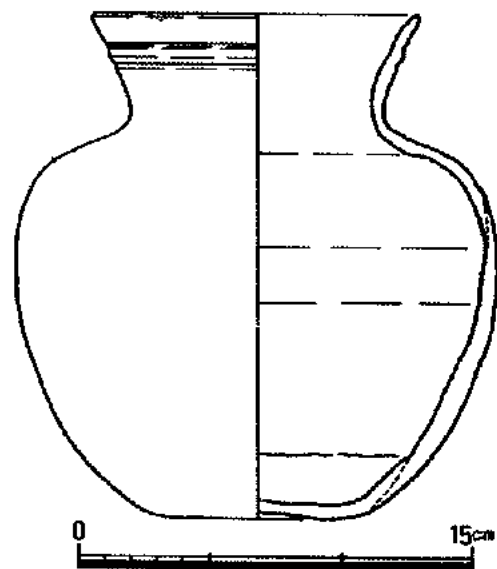
遺構の時期は(註1)ほとんどが中期初頭から後期にかけてのものだが、前期末に遡る可能性を持つものとしてS K18がある。中期初頭と考えられるものは殆ど土坑であり、S K10・S K12・S K33・S K37・S K52・S K61・S K62・S K70・S P464がある。

後期ではS D7・S B26が後期前半頃と考えているが底部片の資料のみで確定し難い。またS B22・25は土器底部が明瞭な凸レンズ状平底を呈していることなどから後期中頃であろう。

土墳墓・木棺墓・石棺墓は丘陵尾根筋の西側に偏在しており、なかでもS K28・29・31・55・56の5基は小規模ながらも2列埋葬の形態を採っている。副葬遺物はS K56からは鉈が出土しているが、身部の断面が矩形を呈しており弥生時代では瀬戸内以東に普及するb類である(註2)。時期については土器の出土が皆無であるため判然としないがここでは弥生後期以降、降っても古墳初と幅を持たせておきたい。

#### 2) 古墳時代

古墳時代ではS B16から初期須恵器と考えられる広口壺(093)と坏(094)が出土していることが注目されよう。広口壺は叩きの痕跡がなく内外面ともナデ調整で、宗像市光岡六助遺跡の試掘調査で出土した広口壺(第62図)と器形および技法などが酷似していることから口縁部の推定復元の資料とした。いずれも伽耶系陶質土器の習作の様な感があり、時期は共伴の土師器から5世紀の前半代に収まるであろう。宗像地域では甘木・朝倉地域で見られるものや陶邑産とも異なる初期須恵器の出土例が増加しており、当地域での初期須恵器窯跡の存在(註3)を示唆する遺物の1つと言える。



第62図 光岡六助遺跡出土須恵器 (1/3)

異論もあるが宗像地域（宗像市郡）で現在、陶器編年Ⅰ-3段階（TK208）以前と考えられる須恵器（陶質土器）を出土する遺跡を下表にまとめて今後に備えたい。

宗像地域の初期須恵器地名表

遺 跡 名	出 土 遺 構	器 種	所 在 地	備 考
富地原森遺跡	SB16	広口壺・平底杯	宗像市大字富地原字森 1113-1他	
〃	SP221	胴部片	〃	外面に縄縹文叩き
富地原川原田遺跡	SB27	壺	宗像市大字富地原字川原田 936他	(註4)
野坂一町間遺跡	3号住居跡	杯蓋	宗像市大字野坂字一町間	(註5)
〃	6号住居跡	甕	〃	(註5)
久戸古墳群第12号墳	墳丘	子持甕・甕	宗像市大字河東字久戸	(註6)
光岡六助遺跡	溝状遺構	広口壺	宗像市大字光岡字六助	平成6年度試掘資料
新原・奴山古墳群 1号墳	墳丘	大甕・把手付高杯	津屋崎町大字勝浦字新原 3736-1	(註7)
〃 7号墳	墳丘表探	甕	津屋崎町大字勝浦字月花 3862-1・2	(註7)
〃 20号墳	墳丘表探	甕・器台・把手付 高杯	津屋崎町大字勝浦字新原 3773	(註7)
〃 21号墳	周溝	(広口壺)	津屋崎町大字勝浦字新原 3783	(註7)
〃 25号墳	墳丘表探	高杯	津屋崎町大字奴山字原 1321	(註7)
〃 34号墳	墳丘表探	甕	津屋崎町大字奴山字伏原 1351	外面に縄縹文叩き (註7)
津屋崎13号墳 (奴山5号墳)	墳丘	器台	津屋崎町大字奴山字正園 1174	(註8)
宮司井手ノ上古墳	墳丘裾	大甕	津屋崎町大字宮司字井手ノ上 300他	肩部に瘤状小突起を2個付す (註9)
在自小田遺跡	SB01柱穴	胴部片	津屋崎町大字在自字小田 7411他	鳥足文・縄縹文叩き (註10)
〃	SK04及び 第2トレンチ	高杯・長頸壺・ 胴部片ほか	津屋崎町大字在自字小田 7411他	鳥足文・縄縹文叩き (註10)
牟田尻桜京古墳群 6号墳	墳丘	高杯	玄海町大字牟田尻字桜京	(註11)
玄海町表探資料		(器台)	玄海町大字田島字高畑	(註12)

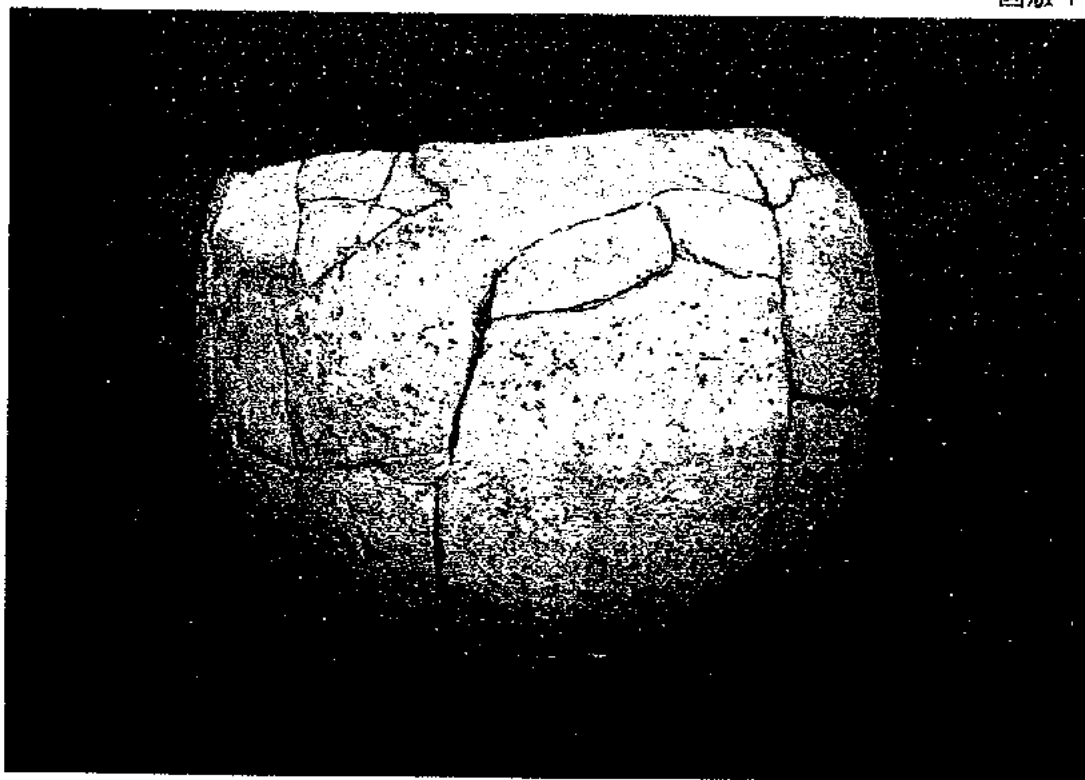
### 3) 中世大溝と掘立柱建物

規模に比して出土遺物が少なく、時期決定には若干疑問が残るがおおむね12世紀前半～中頃から造営が始まり13世紀末頃には埋没したであろう。掘立柱建物S B 65・66・67は同時期存続と考えられるが大溝との同時関係ははっきりしない。掘立柱建物の時期はS B 67の柱穴から黒色土器A類と瓦器片が共伴しており、12世紀前半代には終焉している可能性が高いことから大溝の造営開始期に掘立柱建物群が存在していたか否かは微妙である。またS D 39はS B 65・66とS B 67間を分断しているが掘立柱建物の主軸は溝を意識しておらず、規則性の面からも疑問が残る。

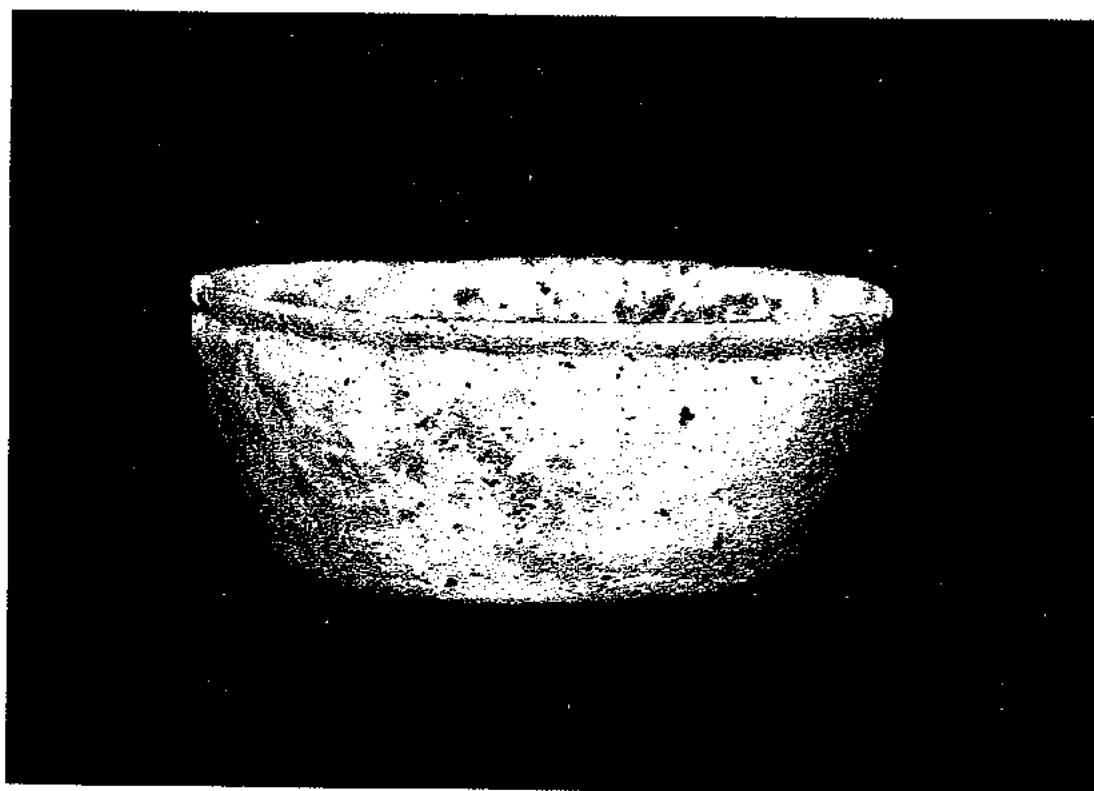
調査区が限られており溝全体の規模および構造を明らかにすることはできなかったがS D 34・50は調査区外で接続し、突出部を持つ環溝となる可能性があり、大溝の機能を含め今後の検討課題である。

- (註1) 武末純一「1.須玖式土器」『弥生文化の研究4』雄山閣 1987  
田崎博之「須玖式土器の再検討」『史淵第122輯』九州大学文学部 1985  
柳田康雄「2.高三瀨式と西新町式土器」『弥生文化の研究4』雄山閣 1987  
飛野博文「名残Ⅳ」宗像市文化財調査報告第29集 1991
- (註2) 岡村秀典「7.鉄製工具」『弥生文化の研究5』雄山閣 1985
- (註3) 橋口達也「5世紀における技術革新—須恵器—」『東アジアと九州』日本考古学協会1990年度大会発表資料集 1990
- (註4) 宗像市教育委員会「富地原川原田Ⅰ」宗像市文化財調査報告書第39集 1994
- (註5) 宗像市教育委員会「埋蔵文化財調査報告書—1984年度—」宗像市文化財調査報告書第9集 1985
- (註6) 宗像町教育委員会「久戸古墳群」宗像町文化財調査報告書第2集 1979
- (註7) 津屋崎町教育委員会「新原・奴山古墳群」津屋崎町文化財調査報告書第6集 1989
- (註8) 津屋崎町教育委員会「奴山5号墳発掘調査報告」 1978
- (註9) 津屋崎町教育委員会「宮司井手ノ上古墳」津屋崎町文化財調査報告書第7集 1991
- (註10) 津屋崎町教育委員会「在自遺跡群Ⅰ」津屋崎町文化財調査報告書第9集 1994
- (註11) 玄海町教育委員会 判田博明氏のご教示による。
- (註12) 宗像考古学研究会 井上栄二氏の表採資料である。

# 版 圖



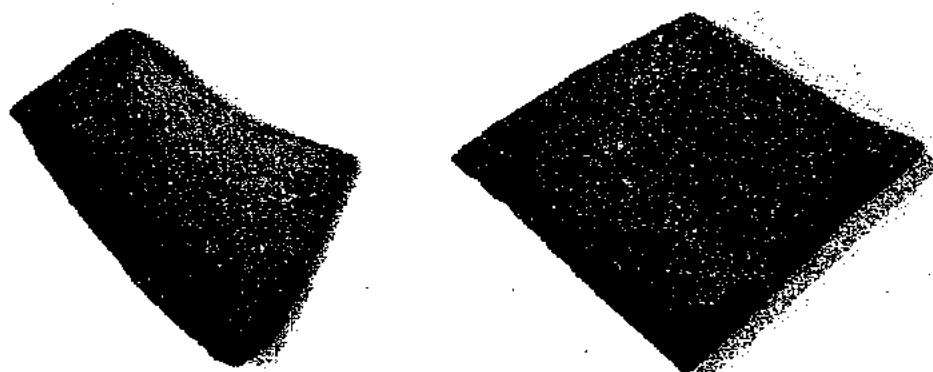
(1) S B 16-093 广口壶



(2) S B 16-094 平底钵



图版 2



(1) S P 221-201-202



(2) S K 70-083



富地原森道跡周辺の航空写真 (1/12,500) 昭和53年6月撮影



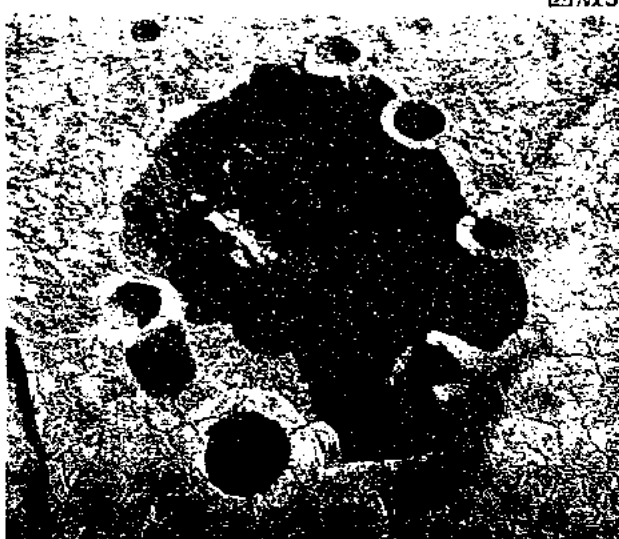
(1)調査区全景（南から）



(2)調査区全景（西から）



(1)SK11 (東から)



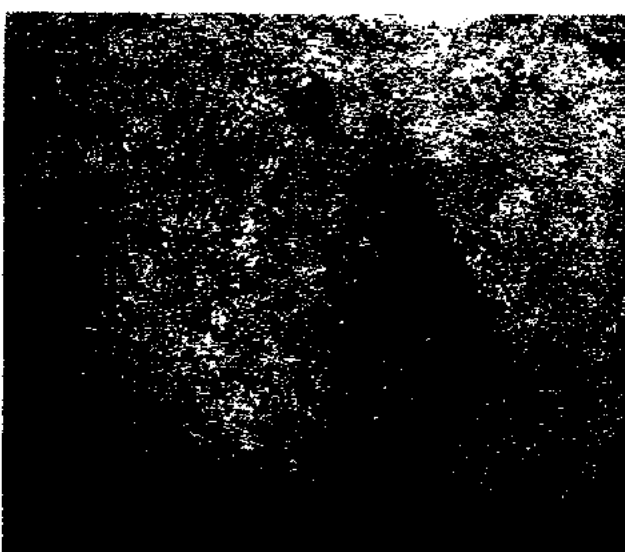
(2)SK12 (南から)



(3)SK18 (北から)



(4)SK33 (西から)



(5)SK37 (西から)

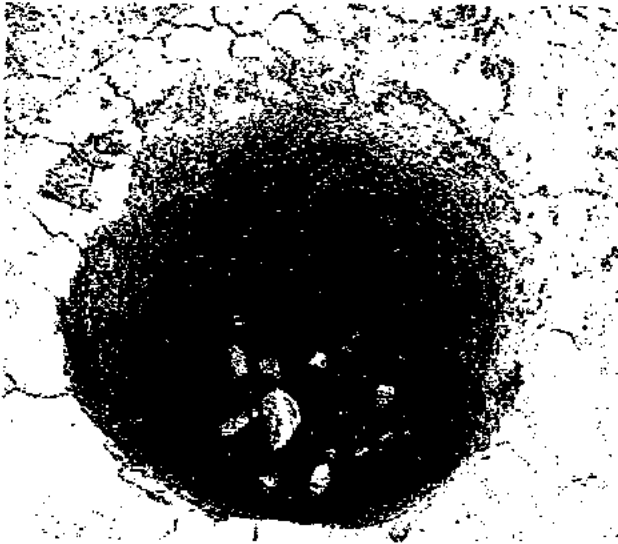


(6)SK44 (北から)

図版6



(1)SK41E層 (北から)



(2)SK45 (北から)



(3)SK51 (北から)

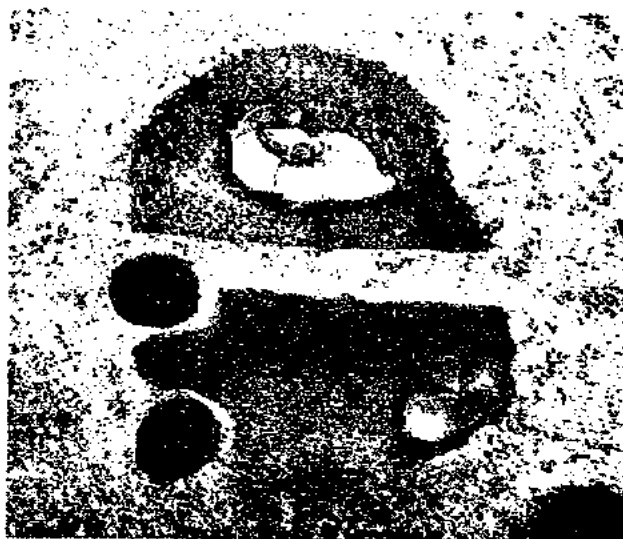


(4)SK53 (東から)

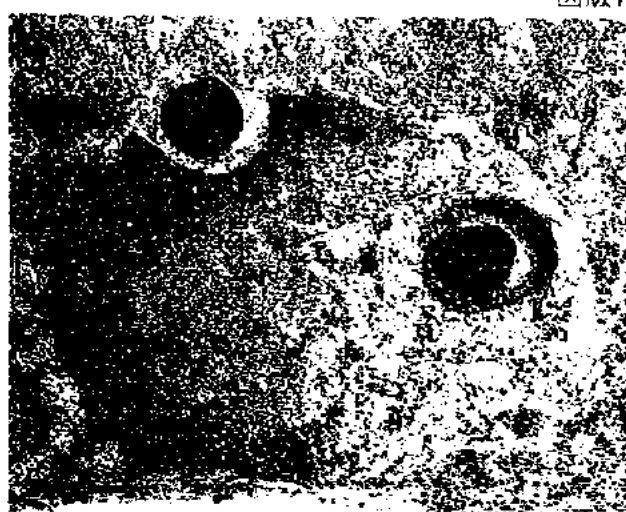


(5)SK61 (東から)

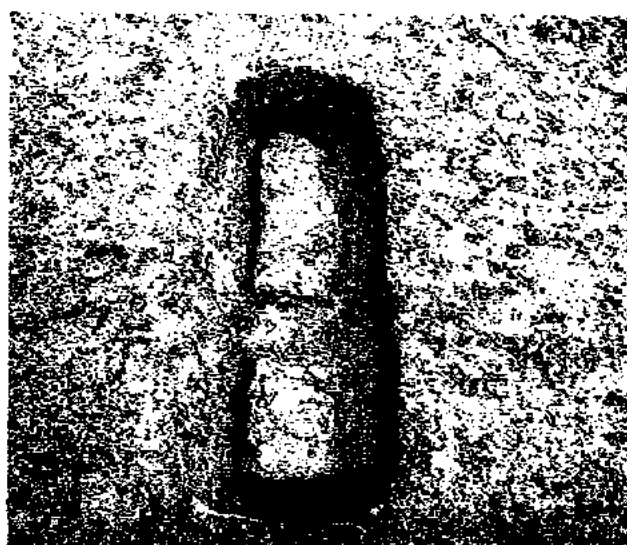




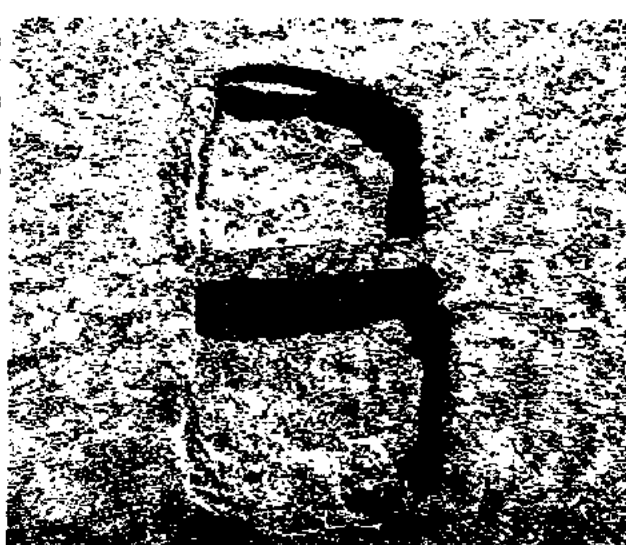
(1)SK62 (西から)



(2)SK70 (北から)



(3)SK28 (北から)



(4)SK29 (北から)



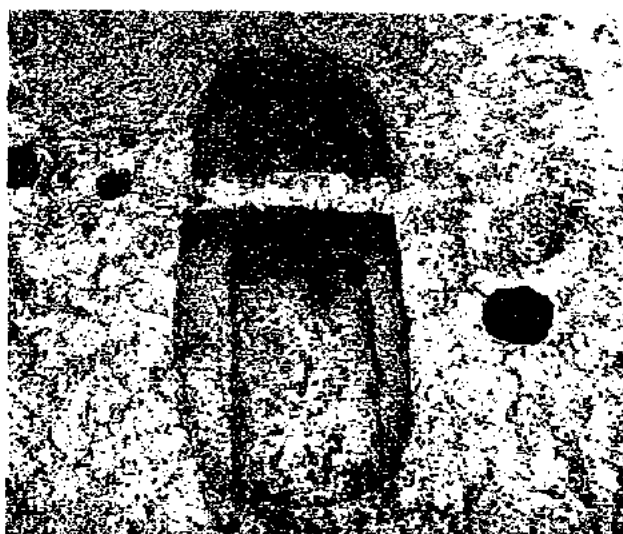
(5)SK30 (東から)



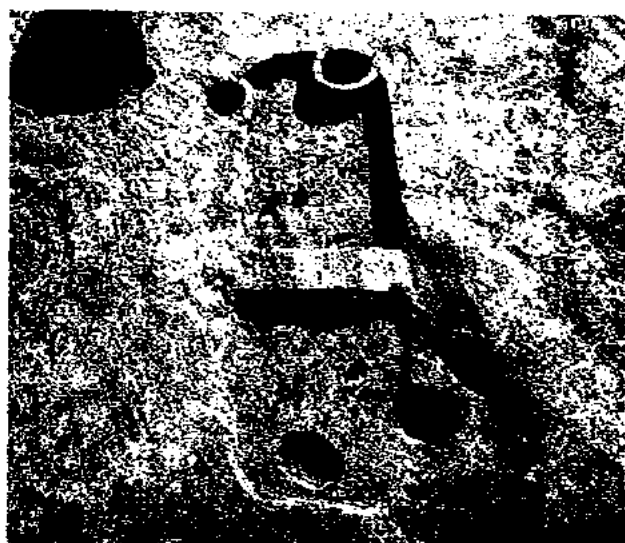
(6)SK31 (北から)



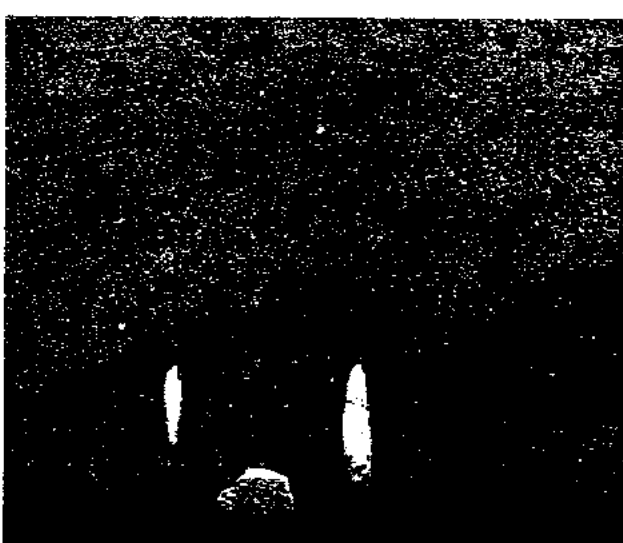
(1) S K 43 (東から)



(2) S K 55 (南から)



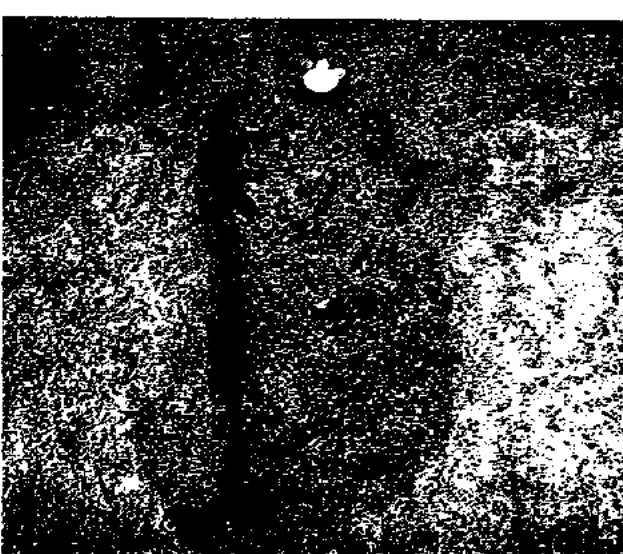
(3) S K 56 (北から)



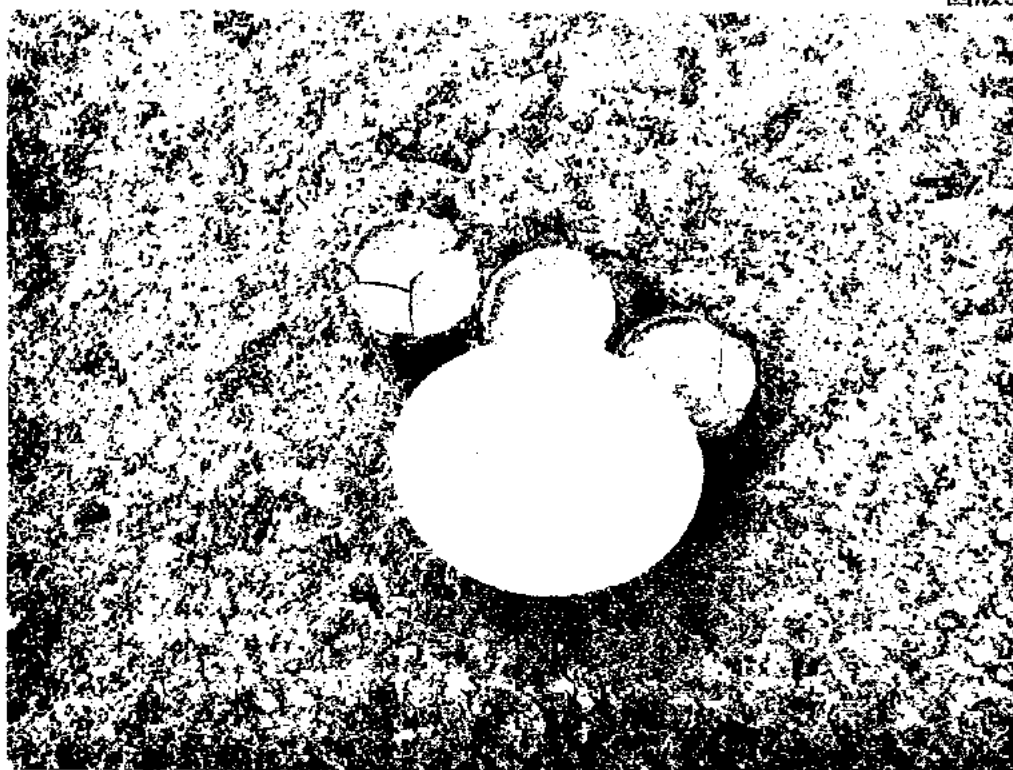
(4) S Q 64 墓壇検出面 (南から)



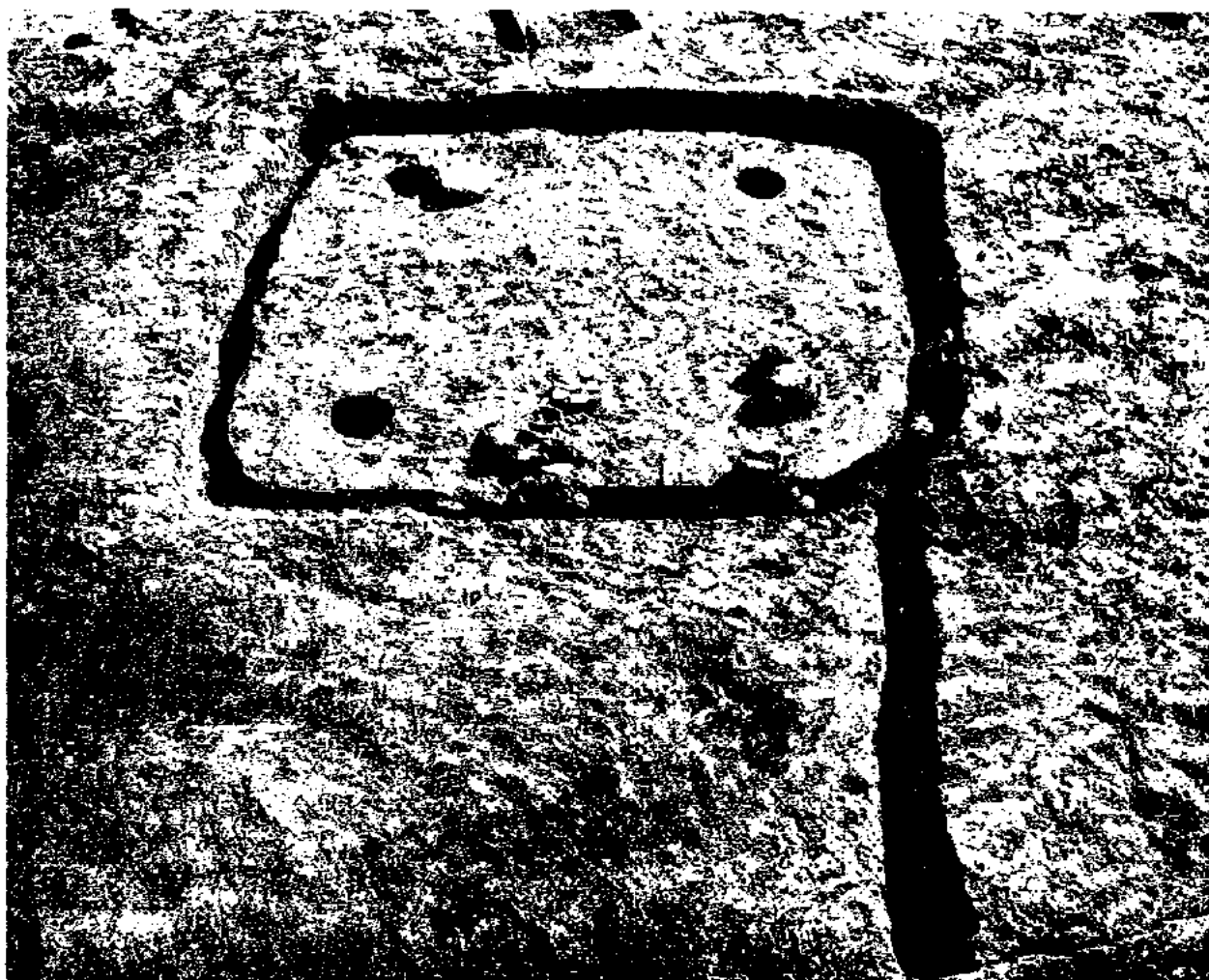
(5) S Q 64 (北から)



(6) S K 58 (南東から)



(1) S K 58 副葬遺物出土状況 (南東から)



(2) S B 16 (北から)





(1) S B 16北西角遺物出土状況 (北から)



(2) S B 22・S K 52 (北から)



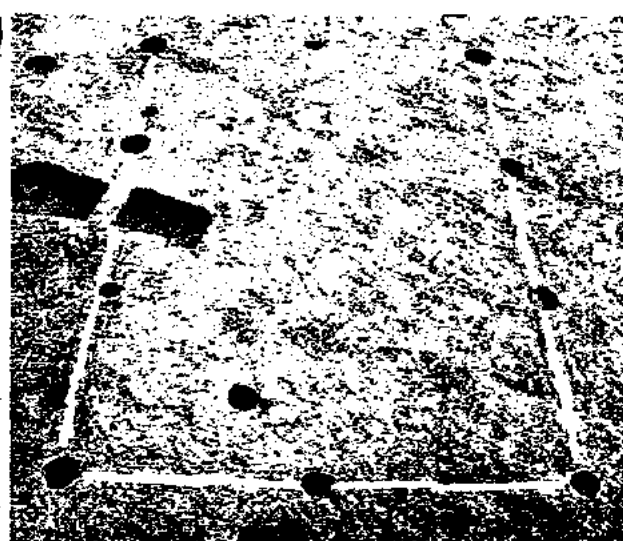
(1) S B 25 (西から)



(2) S B 26 (北から)



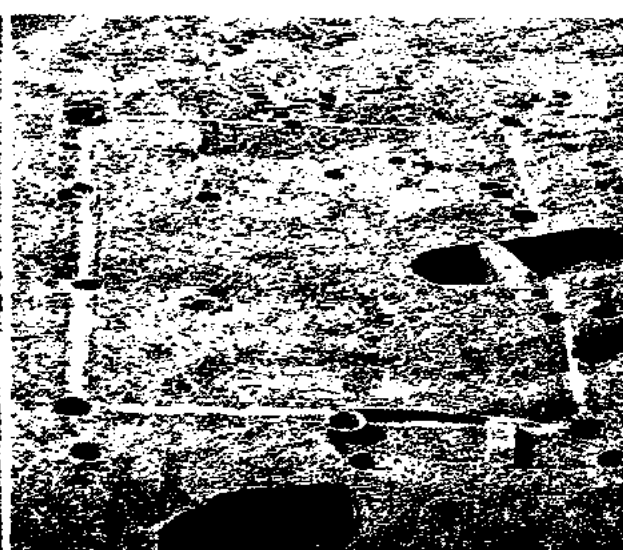
(3) S B 65 (東から)



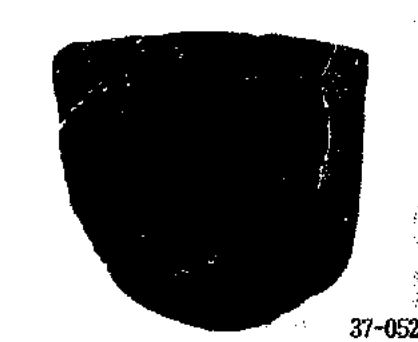
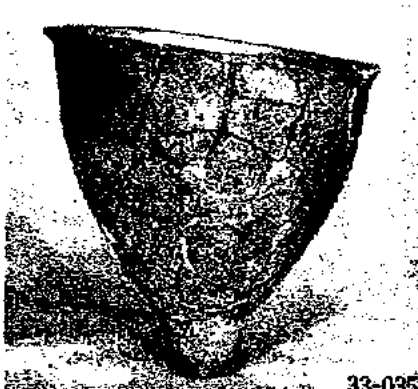
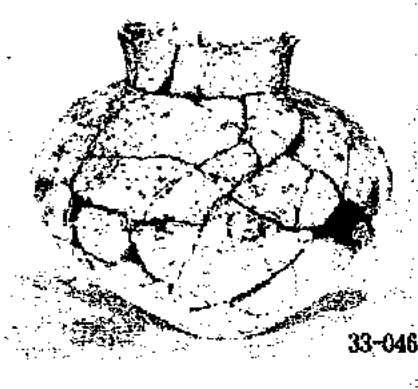
(4) S B 66 (北から)

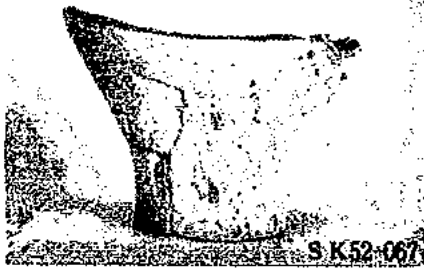


(5) S B 67 (北から)



(6) S B 68 (東から)

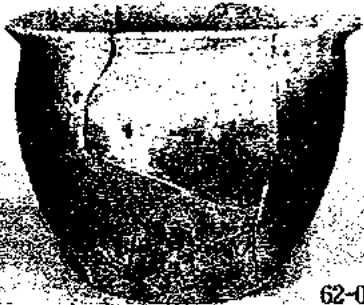
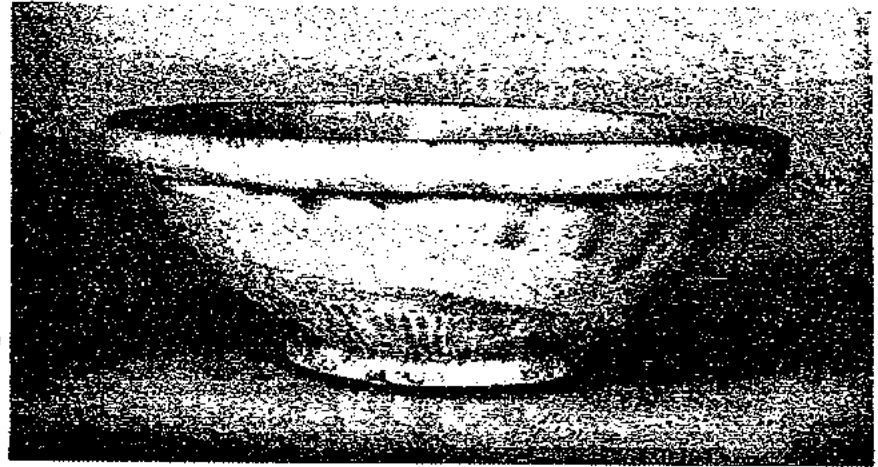




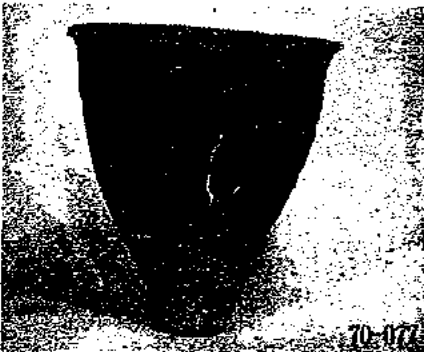
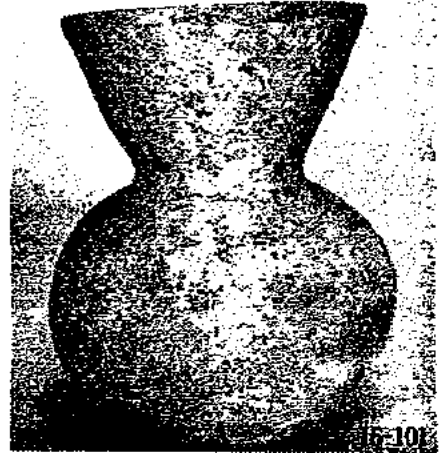
30-086



56-087



58-092





S B22-109



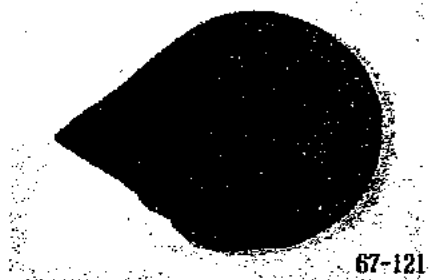
22-111



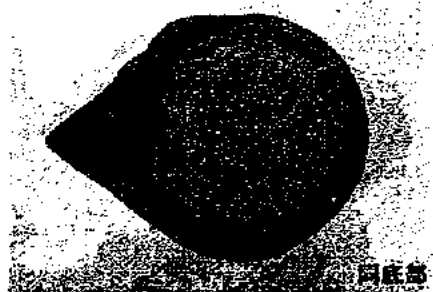
22-112



25-115



67-121



同底部



22-114

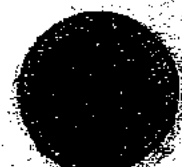


203



204

S P 299



S D 13

145-144-143

137-136-142

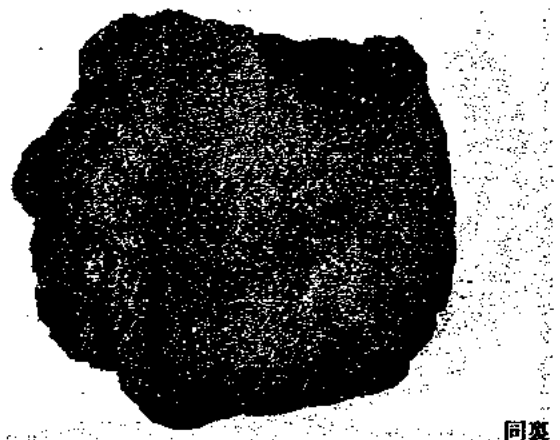
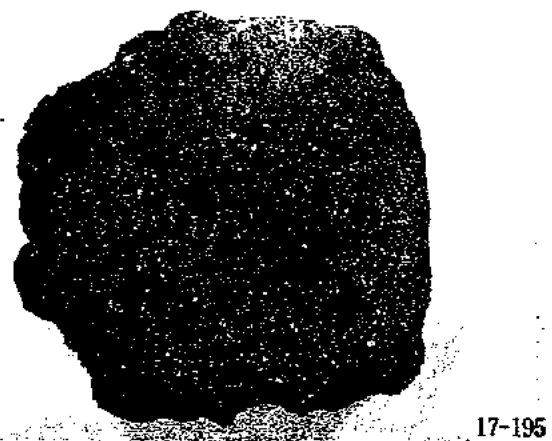
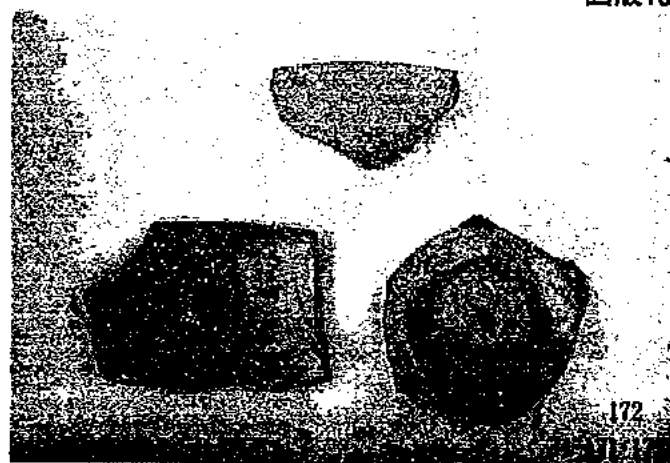
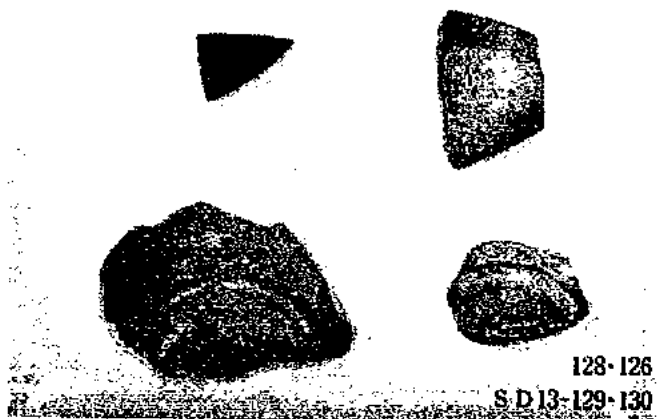


150

13-148-149



同底部



ふりがな	ふじわらもり							
書名	富地原森							
副書名	福岡県宗像市富地原所在遺跡の発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	宗像市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第40集							
編著者名	白木英敏							
編集機関	宗像市教育委員会							
所在地	〒811-34 福岡県宗像市大字東郷999番地 TEL(0940)36-1540							
発行年月日	西暦 1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査期間 m	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふじわらもり 富地原森	ふくおかけん 福岡県 ひなきたし 宗像市 ひなきたし 宗像市大字 ふじわら 富地原字森 1113-1他	40220	330535	33° 47' 45"	130° 36' 15"	19911028 1 19911227	45,00m	富地原地区県営園 場整備に伴う事前 調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
富地原森	集落跡	弥生 古墳 中世	竪穴式住居跡 掘立柱建物 土坑 土壇墓 木棺墓 石棺墓 大溝		弥生土器 土師器 須恵器(初期須恵器) 陶磁器(青磁・白磁)			



## **富地原森**

宗像市文化財調査報告書  
第 40 集

平成7年3月31日

発行 宗像市教育委員会  
宗像市大字東郷995番地

印刷 大成印刷株式会社  
福岡市博多区東那珂3丁目6の62